真・恋姫†無双～一人で三人、三人で一人～

やまかっちゃん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前前世と前世の記憶を持った男、北条刹那は幼い時、短い間だが、武将が女性になっていた三國志の世界に迷い混んでいた。それから数年後、刹那は再び恋姫の世界に舞い降りた。これは魏、蜀、呉にそれぞれ同時に少し性格が別れて現れた男の物語。※北郷一刀はいません。また処女作のため文才はありません。それでもよろしければご覧下さい。

目次

第零章　それぞれの出逢いと別れ
第一話 1
第二話 9
第三話 18
第四話 30
第五話 41
第六話 54
第七話 62
第八話 79
第九話 89
第十話 100
第十一話 107
第十二話 119
第十三話 130
第十四話 140
第十五話 148
第十六話 161
第壱章　それぞれの再会と婚前旅行
第十七話 171
第十八話 179
第十九話 187
第二十話 192
第二十一話 204
第二十二話 212
第二十三話 223

第二十四話 229
第二十五話 236

第零章　それぞれの出逢いと別れ

第一話

～刹那（魏）ｓｉｄｅ～

「はあ、此処…何処だよ…」

俺は今現在の状況が理解できないでいた。というか、今現在の状況が理解できるやつがいるのならそいつの顔を見てみたい。なんだよ、見渡すかぎり荒野ってわけわからん。

（とりあえず今までのことを思い出してみるか）

俺は前前世と前世の記憶を持って生まれてきた。まあ、確信はなかったけど、前世の時も記憶はあったから、もしかしたらっていうのはあったんだよな。

前前世は、北条家に仕えていた猛将で、前世は、学者だったけど、戦時中で苦労したんだよな。軍人の人数が少なくなったからって、学者まで戦場に引っ張り出すなよ！まあ、生き残れたからよかったけどさ。

（で、今の俺がまだ８歳の小学生なんだよな。肉体年齢は８歳で、精神年齢は１５５歳って見た目は子供、精神は大人、じゃなくてもう爺さんだよな）

　それで今日は、いつもやってる朝練のタングステンとベリリウムの合金で、できた変形型の刀で素振りを終え、あっ、いつもはキューブにして持ち歩いているから親には、バレてないよ!それから朝早くから図書館で調べものしようと、出かけていて、途中から霧が濃くなってきたなと思っていたら前から来ていた車のライトが眩しくて目を閉じて開いたらこれだろ、やっぱりわからん。
「わかることは此処が日本じゃないことぐらいか。とりあえず歩くか」
　～数十分後～
「歩く方向間違えたかな。景色ぜんぜん変わってないし。って…今、何か聞こえたな。……あれかな?金髪ドリルの女の子とその後に如何にもな服装の男達が見えるけど。まあ、行ってみればわかるか!」
「お～い、大丈夫か～?」
「なんであなたこっちに来てるのよ!?早く逃げなさい、此処は私が引き止めとくから」
「おいおい、逃がすわけないだろ。其処のガキも変わった服を着てるいるし、売りゃあ高く売れるだろよ」
「親分、ガキは殺して嬢ちゃんは売る前に俺らで楽しみましょうよ」
「それもそうだな、そうするか」
「まあ、こいつらもこんなこと言ってるし。それに俺も君に聞きたいことがあるしさ。

とりあえず此処は協力しようよ。ね？」
　まあ、別に俺一人でも問題はなさそうだけどな。だけど、二人のほうが確実だろうし。
「あ～～もうっ。わかったわよ。ところであなた武器は無いようだけど大丈夫なの？あと何人相手にできる？」
「武器はあるから大丈夫だよ。あと全員でも問題はないけど」
「「「「「ぎゃははははは」」」」」
「あなた、こんなときに何ふざけたこと言ってるのよ!?」

「いや別にふざけたわけじゃないよ？ほら一人目」
「ははははっぱぎゃっ!?」「っぺげゃ!!」
　その瞬間キューブを刀に変えて一人目の首を刎ね、刀から槍に変えたそれで、目の前での仲間の死に、固まってる奥のやつの眉間を貫く。
「これで二人目」
「てめえっ、よくもなかっあべし!?」
「遅いよっと、これで三人目と」
　あれ？賊だけじゃなくて、女の子も固まってるし、そのままだと、危ないかもしれないから、相手も動くに動けない今の内に女の子の意識を戻しとくか。

「ちょいちょい、お～い大丈夫？お～い」
「っって、あなた顔近いわよ！ていうか、あなた今のなによ!?」
「おっとごめんごめん、ところで意識は戻ったな？意識が戻ったなら危ないから後ろに下がってろ」
「舐めないで！私だって闘えるんだから」
「…そうか……なら早い者勝ちだな！」
「げふぁっ!?」「ふぎゃっ!?」「逃げっぐは！」「助けっいぎ！」
　それからそう時間もかからずに賊を全滅した。とりあえず此処にいても仕方ないので、女の子の家がある街に移動することになった。
「ところでまだ自己紹介してなかったな。俺は北条刹那で、８歳だ」
「私は姓名は曹操、字は孟徳よ、あと年齢はあなたと同じ８歳よ」
　はっ？いや、でも、俺の勘違いの可能性もあるし、一応聞かなきゃだよな？でも嫌な予感がするな。
「俺恥ずかしながら迷子なんだけど、此処何処だかわかる？あと国も」
「此処は沛国で、国は漢よ。そういえばあなたの服装からしてこの国の人間じゃなさそうね。何処の国の人間？」
　まじか～。いや、嫌な予感はしてたんだよ。でも１９００年近く前にタイムスリップ

とか、予想できねえよ。ただこの場合、曹操が女の子からしてタイムスリップというよりパラレルワールドのが正しいのかもしれないけどさ。

はあ、とりあえずこのあとどうしよう。

「話せば長くなるんだけど、それでもかまわないか？」

「ええ、大丈夫よ」

「頭狂ってると思うかもしれないけど、どうやら俺は、１９００年近く前の世界に迷い混んでしまったらしい。信じるかどうかは、君次第だけどさ」

「刹那の顔を見てれば、嘘を言ってないことぐらいわかるわよ。そうすると真名のことも知らなそうね」

「真名？それはどういうものなんだ？」

「真名っていうのは、私達の真の名のことよ。真名を許可なく呼べば、誰であろうと殺されても、文句は言えないわ。それほど尊いものよ。ついでに私の真名は華琳よ」

「って、おいおい、さっき真名は尊いものって自分で言ってたのにいいのかよ!?」

「いいわよ。一応刹那には命を助けてもらってるしね。たぶんあのままだったら私は切り抜けられなかったと思うから。……私でも単純って思うほど刹那に惚れちゃったんだから仕方ないじゃない（小声）」

「っっ!?悪い、とても言いづらいんだけど最後まで聞こえちゃってるんですけど」

たぶん俺の顔赤くなってるよな。もう、顔どころか身体全体が熱くなってるし。俺は俺で、自分で気づかなかっただけで、華琳に一目惚れしちゃたんだろうな。今まで、こんなこと言われたことないし。ええ、そうですよ、前前世も前世も独身でしたよ。（若干現実逃避）

「??っ、〜〜〜〜〜〜っ!?!?」ボフン

ああ、華琳も顔真っ赤になっちゃったよ。

「もう、刹那の馬鹿!·こんなときは気を遣って、聞かなかったことにしなさいよ。」カオマッカ

やばいな、俺、華琳が怒ってる姿見ても可愛いと思えてるよ。俺もしっかり自分の想いは伝えないとだよな。（若干混乱気味）

「〜〜ぅぅ……ふう、華琳、今更卑怯な気もするけれども、俺も言われてついさっき、自覚したばかりで上手く伝えられるか、わからないけど、俺も一目見た時から好きになりました。付き合って下さい」ドキドキ

ああ、断れたらどうしよう。断れたらショックでたぶん寝込むぞ俺。

「えっと·····んっ·····」「·····んっ!?!?」

俺はそっと唇を触れさせる程度だが口づけをされていた。

（えっ?·えっ?·何、これはＯＫってことでいいの??というか女の子からされるとか俺も

情けないな）

どれくらいの時間が経ったのだろうか、実際には数秒程度だろうが俺達には数十秒にも数分間にも感じられた。

「ぷはっ・・・ごめんなさい、刹那の世界での付き合うっていう返事の返し方がわからなかったから」

「ありがとう。でもできれば、男として奪われるより奪いたかったな」

そして自然とまた目が向き合い

「「……んっ……」」

今度はこちら側から唇を重ねる。でも先程より短く。

けれども、息苦しくない程度に数回繰り返した。

「もう、でも私今まで、今が一番幸せだわ。そういえば、……初めて…よね？」

少し不安そうに、訊いてきた。

ああ、その表情もとても可愛いです。（かなり暴走気味）

「勿論、前前世も、前世も含めて初めてだよ」

「…そう…私も初めて・・よ。でも前前世も、前世もって、どういうこと？」

「あっ！」
「えっと…ごめん、隠し事をしたかった訳じゃないんだけど俺、前前世と前世の記憶があるんだ。だから今世の記憶もたぶん引き継ぐと思うだ」
「へ～～そういうこともあるのね！じゃあ、もし私も今世の記憶を引き継ぐことができれば、そのときは、また来世でも出逢いましょ！」
　う～ん、好奇心旺盛の華琳も可愛いな～（最早暴走のブレーキがへし折れてます）
「とりあえず、早く街まで行きましょ！家族にも早く紹介したいし（小声）」
「おう！」
（今度は最後まで聞こえなかったな、でもまた後で聞けばいいか！）
　そうして俺達は華琳の家がある沛国まで歩いて行った。

第二話

～曹操ｓｉｄｅ　～

あの日、私はいつも訪れる平凡な日々に飽き飽きしていた。今の曹家の官職は、豫州に含まれる郡、沛国の都尉になる。

私は、このまま家の中や庭で過ごしていても、今の自分の飽き飽きしている感情を、満足させるようなことはないだろうと思い、気分転換に出かけることにした。

この時の私は、ある程度の武術を修めていたこともあり、自分自身に自信を持っていたことや、曹家が沛国を統治していたことによる安心などの要因で、油断していた。

「おいおい、嬢ちゃん、こんな荒野のなか、一人でいたら危ねえぜ」

「そうそう、一人でいたら俺達みたいな恐～いおじさん達に連れ拐われちまんだぜ」

「「「「「ぎゃはははははは」」」」」

（チッ、街の門から目をつけられていたなんて、油断してたわ。対集団との戦い方なんて、学んでないわ。とりあえず途中で引き返して街に戻るにも、今は逃げるしかないわね）

「なんだ、嬢ちゃん、おじさん達と追いかけっこでもするつもりかい？」

「なら、早く逃げないと、おじさん達に捕まっちまうぞ～」
「「「「「「ぎゃはははははは」」」」」」
～数分後～
　私は未だに、賊から逃げていた。引き返すタイミングを完全に逃していたのだ。
（どうしよう、引き返すタイミングを見誤ったわ。街からもだいぶ離れてしまったし。もう駄目なのかしら。っっっいや、駄目なら駄目で、一人でも多く道連れにしてやるわ）
　しかし、華琳は、自分達が走っている方向に男の子の姿を見つけてしまった。
（このままじゃ、あの男の子まで巻き込んでしまうわ）
「其処にいるあなた、このままじゃ危ないから早く逃げなさい！（大声）」
「お～い、大丈夫か～？」
（うそ！なんでこっちに向かってくるのよ!?）
「なんであなたこっちに来てるのよ!?早く逃げなさい、此処は私が引き止めとくから」
（この子だけでも、逃がさないと）
「おいおい、逃がすわけないだろ。其処のガキも変わった服を着ているし、売りゃあ高く売れるだろうよ」
「親分、ガキは殺して嬢ちゃんは売る前に俺らで楽しみましょうよ」
「それもそうだな、そうするか」

「まあ、こいつらもこんなこと言ってるし。それに俺も君に聞きたいことがあるしさ。とりあえず此処は協力しようよ。ね？」
（一応、この子も武術には自信があるのかしら？そのうえ、武器らしき物は見当たらないけど大丈夫なの？）
「あ～～もうっ。わかったわよ。ところであなた、武器は無いようだけど大丈夫なの？あと何人相手にできる？」
「武器はあるから大丈夫だよ。あと全員でも問題はないけど」
（何馬鹿なことを言ってるの！ふざけてるの！）
「「「「「ぎゃはははははは」」」」」
「あなた、こんなときに何ふざけたこと言ってるのよ!?」
「いや別にふざけたわけじゃないよ？ほら一人目」
　彼がそう言った瞬間
「ははははっぱぎゃっ!?」「っぺげゃ!!」
　賊の一人は何かで首を刎ねられ、その奥にいた賊の眉間には槍が刺さっていた。
「これで二人目」
（何、今の!?私には何かで賊の首が刎ねられたと思ったら、次の瞬間には奥にいた賊の眉間に槍が刺さってた!?ていうか何処に槍があったの!?）

「てめえっ、よくもなかっあべし!?」
「遅いよっと、これで三人目と」
　私はきっとこの時から刹那に惚れていたのだろう。なぜなら、このとき自分が、彼に見惚れていたことを、自覚できるほどのことだったのだから。
（彼、かなり武術や体術を修めていることは確かね。いつの間にか槍から刀になってるし。何より彼の太刀筋は綺麗で美しかったわね。はあ～～）ポケ～～
「ちょいちょい、お～い大丈夫？お～い」
「おっとごめんごめん、ところで意識は戻ったな？意識が戻ったなら危ないから後ろに下がってろ」
（彼に質問無視された!?）ガーン　（ううん、それよりも）フリフリ
「舐めないで！私だって闘えるんだから」
（彼にも私の良いところ魅せたいし）
「…そうか……なら早い者勝ちだな！」
「げふぁっ!?」「ふぎゃっ!?」「逃げっぐは！」「助けっいぎ！」
　それからそう時間もかからずに賊を全滅させたわ。とりあえず此処にいても仕方ないので、私の家がある沛国に移動することになった。
「ところでまだ自己紹介してなかったな。俺は北条刹那で８歳だ」

（あら？私と同い年だったのね）
「私は姓名は、曹操、字は、孟徳よ、あと年齢はあなたと同じ８歳よ」
（いきなり、顔がこわばり始めたけど、どうしたのかしら？）
「俺恥ずかしながら迷子なんだけど、此処何処だかわかる？あと国も」
　刹那が言った言葉で、私は、刹那が、この国の人間ではないこと、何かしら事情があることに気付いた。
「此処は沛国で、国は漢よ。そういえばあなたの服装からしてこの国の人間じゃなさそうね。何処の国の人間？」

（考えることを潔く諦めたような、どこか無理矢理納得したような顔で空を見上げ始めたけど、刹那は沛国に行ったあと、どうするのだろ？）
「話せば長くなるんだけど、それでもかまわないか？」
（この話で、刹那の事情を聞けるかも）
「ええ、大丈夫よ」
（刹那のことを一つでも多く知りたい）
「頭狂ってると思うかもしれないけど、どうやら俺は、１９００年近く前の世界に迷い混んでしまったらしい。信じるかどうかは、君次第だけどさ」

（そうだったのね。そうだとすると刹那はこの世界で独りっきりなんだわ。どうにかして、刹那を私の家に連れて行くことはできないかしら？）
「刹那の顔を見てれば、嘘を言ってないことぐらいわかるわよ。そうすると真名のことも知らなそうね」
「真名？それはどういうものなんだ？」
（ああ、やっぱり知らなかったのね。それじゃしっかり教えないと後々大変なことになりそうね）
「真名っていうのは、私達の真の名のことよ。真名を許可なく呼べば、誰であろうと殺されても、文句は言えないわ。それほど尊いものよ。ついでに私の真名は華琳よ」
（今までは、他の人に真名を言うときはなんともなかったけど、刹那に教えるときは、少し恥ずかしいわね）
「っておいおい、さっき真名は尊いものって自分で言ってたのにいいのかよ!?」
「いいわよ。一応刹那には命を助けてもらってるしね。たぶんあのままだったら私は切り抜けられなかったと思うから。……私でも単純って思うほど刹那に惚れちゃったんだから仕方ないじゃない（小声）」
（聞こえて……ないわよね？）
「っっ!?悪い、とても言いづらいんだけど最後まで聞こえちゃってるんですけど」

「??っ、〜〜〜〜〜〜っ!?!?」ボフン
（うそ、うそ、うそ!?どうしよ、どうしよ、このあと、どんな顔で刹那の顔を見ればいいのよー?）
「もう、刹那の馬鹿!こんなときは気を遣って、聞かなかったことにしなさいよ」カオマッカ
「〜〜ぅぅ……ふう、華琳、今更卑怯な気もするけども、俺も言われてついさっき、自覚したばかりで上手く伝えられるか、わからないけど、俺も一目見た時から好きになりました。付き合って下さい」
（本当に?嘘じゃないのよね?今私とてもドキドキしていて、また幸せで、嬉しい。この気持ちをどうやって伝えればいいの?……って早く返事返さないと、でも刹那の世界での付き合いますっていう返事の返し方がわからないわ。どうすればいいのかしら?……これなら、今の私の気持ちと一緒に伝わるかしら?でも恥ずかしいわね）
「えっと……んっ……」「……んっ!?!?」
私はそっと唇を触れさせる程度だが口づけをした。
どれくらいの時間が経ったのだろうか、実際には数秒程度だろうが私達には数十秒にも数分間にも感じられた。
「ぷはっ……ごめんなさい、刹那の世界での付き合うっていう返事の返し方がわからな

かったから」
（私の今の気持ちも伝わったかしら？）
「ありがとう。でもできれば、男として奪われるより奪いたかったな」
そして自然とまた目が向き合い

「「……んっ……」」

今度は相手側から唇を重ねられた。でも先程より短く。けれども、息苦しくない程度に数回繰り返された。
（今度は、刹那からしてくれた！嬉しいわ！）
「もう、でも私今まで、今が一番幸せだわ。そういえば、……初めて…よね？」
（初めてじゃなかったらどうしよ？想像してきたら悲しくなってきたわ）
「勿論、前前世も、前世も含めて初めてだよ」
（よかった、私は刹那の初めてになれたのね。でも、あれ？）
「…そう…私も初めて…よ。でも前前世も、前世もって、どういうこと？」
「あっ！」
（さっそく私に隠し事かしら？）

「えっと…ごめん、隠し事をしたかった訳じゃないんだけど俺、前前世と前世の記憶があるんだ。だから今世の記憶もたぶん引き継ぐと思うんだ」
（ああ、また刹那のことを知ることができたわ！）
「へ～～そういうこともあるのね！じゃあ、もし私も今世の記憶を引き継ぐことができれば、そのときは、また来世でも出逢いましょ！」
「とりあえず、早く街まで行きましょ！家族にも早く紹介したいし（小声）」
「おう！」
（今度は聞こえなかったぽいわね）ホッ
そうして私達は私の家がある沛国まで歩いて行った。

第三話

～刹那（蜀）ｓｉｄｅ～

「此処は何処なんでしょうね？」

辺りを見渡して見ても、ほとんど草原で、途切れ、途切れに木が生えてるぐらいで、そこまで特徴がない場所だった。しかし、遠くの方に、人工物だと思われる柵らしき物を発見することができたため、とりあえず其処に向かうことにしながら、自己解析をすることにした。

（まず、車のフラッシュで目を閉じ、また開けてみたらこの状況、不思議な現象ですね）

「ただ、気候や生えてる植物から判断できることは、此処は地球であり、日本の近くの何処かのアジア周辺っと、いったところですかね。……っっ!?ってよく考えれば今時、木の柵で囲む場所なんてありませんよ!?てっことは、少なくとも時間移動をしたということですね。まあ、過去にしろ、未来にしろ、今慌てても仕方ありませんから、この興味深い現象を堪能することにしましょう」

（ふむ、あともう一つわかることがありますね。どうやら今の僕は、前世の時の性格が強く出ているため、考え方なども前世の学者の思考と同じような感じということでしょう

か。

といことは逆に、今世の性格は出にくいのか。

前世の性格の上書きにより消えてしまったのか。

もしくは、……これは、一番考えづらいですが、今現在に、もう一人の僕が他の場所にいて、そちらに性格が移動しているということでしょうか。

でも、この考えは今世だけとは、考えづらいので前前世の性格を持った僕も他の場所にいると考えなければいけませんね。

はあ～～～、自分の考えたことながら、頭が痛くなってきました。

ただ、唯一助かった点は、記憶は今世も前世も前前世も残っていることでしょうか）

しかし、ここまで自己解析したところで、村なのか、里なのか判断はつかないが、全体が、見えてきたため、自己解析をやめ、今度は、持ち物の確認をすることにした。

（今の私が持っているものは、いつも持ち歩いているキューブ、それと、今着ている服等、あとは、記憶に詰まってる知識といったところですね）

持ち物の確認も終えたところで、木の柵で、できた門の手前に着いたことにより、今度は今後のことや、中に入るための思考に変えた。

（といっても、門の近くにいる、門番らしき人と話して中に入れてもらうしかないんですけどね）ハアー

「おい！そこの子供、そこで止まれ！これから俺の質問に、正直に答えろ!!」
「はい!?」
（いきなりですか。子供相手でも威圧的にくるとは、少し驚きですね。普通の子供だったら泣きだすと思うんですけど？こちらの世界の子供は、逞しいのでしょうか？）
「まず、親が近くにいなさそうだが、どうした?!」
「僕には、元々親はいません！」
（まあ、この世界にはですが）
「……そうか、：次に持ち物が少なそうだがどうしてだ?!」
（正直に答えても、たぶん信じてもらえませんよね？ここは、適当に誤魔化しましょう）
「此処に来る途中で、賊を見かけまして。彼方には気付かれてませんでしたが、気付かれたあとでは遅いので、荷物は途中の道で放置にしてきました」
（これで、どうでしょう？）
「…ふむ、まあいいだろう、中に入れ！」
「ありがとうございます」
（良し！これで、中には入れますね。さて、今後の予定を考えましょう）
　そして、僕は村？里？の中央らしき場所に行き、住んでいる人達を観察して、現状をより、はっきりさせることにした。

（この村？里？の人達を見る限り、黒人や白人の顔つきではなく、また、肌を見ても黄色人種とみていいでしょう。そうすると、ここは中国か、台湾か、またまた、モンゴル辺りと見当がつきますね。ただし、ここの人達の髪は黒は勿論わ赤っぽかったり、青や紫や金髪までいて、遺伝子的にどうなってるんでしょうね!?）

「ねぇねぇ、そんなに辺りを見渡していて、何をやってるの？」

「っっ!?」ビクッ

（いきなりで驚きました！心臓に悪い!!しかし、集中しすぎて見えてませんでしたね。ああ、そうだ、どうせなら目の前にいる、この桃色の髪の女の子に此処のことを聞いてみることにしましょう）ウーン

「ねぇねぇだから、何やってるの？ねぇねぇ？……グスッ」ポロポロ

（やばっ!!泣き出してしまいました！どうしよ？どうしよ？どうしよ？どうしよ？あ～全然思考が追いつかない―！あと周りの視線が痛い!!）アセアセ

どうやら、刹那（蜀）はいつも学者的な考え方をして最善な答えが出せていても女の子の涙には弱いらしく、思考がポンコツになるようだ。

～数分後～

（あっ！そうだ！）ピコーン

「えっと、ごめんよごめんよ、一つだけ言うこと聞くからお願いだから謝るから泣き止ん

で～」
「グスッグスッ…ほんと？」クビカシゲ
「うんうん、ほんとほんと」
「ならいいよ～」ニパ～
（なんだろ？今のとても可愛かったな）ドキドキ
（でも、ふ～、たまには漫画の知識も役に立った、かな？あれ？でも確かそのあと更に大変なことになったような？とりあえず、また泣かれたら困るし、深く考えないことにしよ）
　やはり思考はポンコツのままだったらしい。
「ええっと、ところで、一つだけ言うこと聞くけど、何を聞けばいい？」
「えーとね～～あっ！そうだ！あれにしよ」
「えっと、だからあれって何？」
「えーとね～わ、わ、私と友じゃちにアウ、：友達になってくだしゃいぅぅっ」モジモジ
（最初噛んで、今また噛みましたね、でもやっぱり可愛いな～、って僕はロリコンではありませんよ。っと、僕は誰に言い訳してるんですか。精神年齢的には駄目ですが、肉体年齢的には問題ないはずですって、ああ～もう～）
「やっぱり…駄目？」グスッ

「いえいえ、大丈夫ですよはい、僕と友達になりましょう」
「よかった～、此処の里って私ぐらいの子供が少ないことや、私がかなりの人見知りのせいで友達がいなかったんだ～」
「そうだ！此処は里なんですか？」
「そうだよ！此処は桜桑里って言うんだよ？知らなかったの？」
（桜桑里：どこかで聞いたことのあったような？）
「ええ、知りませんでした。ところで、桜桑里はどの辺にあるか、わかりますか？近くの地名や山などでもいいので」
「えっとね、桜桑里はね、幽州にある涿郡の涿県の外れにあるんだよ」
「涿郡って！もしかしてこの国は漢って名前だったりしますか？」ズイ
「そ、そうだよ！」ヒキッ
「そうですか」ヒョイ
（どうやら、僕の予想は当たってしまっていたらしですね）
「あっ！まだ、自己紹介してなかったよね？さっそくしようよ！」
「ではまず僕から、僕の名前は北条刹那といいます。今年で８歳になります。これから宜しくお願いしますね」
「うん！よろしくね！私は、姓名が劉備で、字が玄徳、真名が桃香だよ。今年で７歳にな

るよ」
（真名とはまた不思議な言葉が出てきましたね。というか劉備玄徳ですか、もう今日は驚いたり、慌てたりして、疲れましたよ）ハアー
「すみません、僕のいた場所では真名といのは聞き慣れない言葉で、どのような意味があるのですか？」
「えっ？そうなんだ～。真名っていうのはね、私達の真の名のことでね。真名を許可なく呼べば、誰であろうと殺されても、文句は言えないんだよ。それほど尊いものなんだよ」
「それほどのものを僕に？」
（これは、僕も桃香にはしっかり僕のことを話さなければいけませんね。そうしなければ対等の立場には、なれないでしょうし）
「うん！だって私にとって初めてできた友達なんだもん！」
「そうですか。では僕には、真名がありませんから、真名の代わりに、僕自身のことを教えることにしますね。ただ、もしかしたら話しを聞いたあとに、僕のことを気味が悪く感じることになるかもしれませんが、それでもよろしいでしょうか？」
「うん、たぶん大丈夫だよ。何より私にとって初めてできた友達の刹那のことを、私知りたいもん！」

「僕のことを可笑しな人だと思うかもしれませんが、どうやら僕は、１９００年近く前の世界に迷い混んでしまったようなんですよね。
まあ、信じるかどうかは、桃香次第なんですが。
また僕には前前世と前世の記憶があるんです。だから今世の記憶もたぶん引き継ぐ可能性が高いと思うんです。
実際に今の僕の性格は、なぜだか前世の時の性格が強く出ているんです。
なのである意味今の僕は今世の僕とは言いづらいのですが」
その瞬間僕は桃香に抱き締められていた。
「うんうん、大丈夫だよ。私は御主人様を信じるから。ずっといつまでも私は御主人様の近くにいるから！だから!!」ポロポロ

『泣かないで!!』

いつの間にか僕は話しながら泣いていた。
「えっ?…なんで……涙…が…出てきてるいるのでしょうか?」ツー
(精神年齢的には僕は高いはずなんですがね、どうやら肉体に精神が引っ張られてるようですね)

「ってうん？ってなんで僕の呼び方が御主人様なんですか!?普通に先程と同じように刹那でいいじゃないですか!!桃香まで、泣いてますし！あと若干怒ってませんか？」

『だって!!』

「御主人様の話しを聞いてたら、どこか私と似ていて、でも私の様な馬鹿と違って頭が良くて、普通の人だったらきっと認められないことでも、すぐにそのことを認めて、次はどうしたらいいか？って最善のことを考えて行動に移せるのが凄いな、かっこいいなって、私もいつか御主人様の様になりたいなって思って、

途中から胸が締め付けられる様にドキドキしてきて、ああ、きっとこれが恋なんだろうなって自覚してきて、

でも御主人様はこの世界で独りしかいなくて、心細いはずって気づいて悲しくなり始めたら、

今度は御主人様が、自分で自分を否定するようなことを言い始めたからじゃないですか!!そんなに自分のことを、否定しないでください！今私の目の前にいる御主人様は御主人様しかいないのだから。

だから：だから、お願いだから！私が好きになった御主人様の存在を否定するような

ことを御主人様自身が言わないでくださいよ～～うぅっ」グスッグスッグスッ

（ああ、今の僕の存在を認めてくれる人がいてくれたのですね。あと何気に今さっき桃香は僕に告白してましたね）

～数分後～

「だから、今の御主人様の存在を御主人様であったとしても否定することは私が許しません!!」プンプン

（人のために照れたり、悲しんだり、泣いたり、怒ったり、桃香は忙しいですね。でも、だからこそ僕は桃香のことが好きになったのかもしれませんね。僕も男です。伝えなければいけない気持ちは、しっかり伝えましょう）

「桃香?」

「なんですか?」プンプン

「今さっき、僕に告白したことは、気づいてますか?」

「えっ??……っっ!?!?」プシュー

（顔が真っ赤になってしまいましたね）

「だから、僕も今の気持ちを桃香に伝えたいと思います」

「ひゃっ、ひゃい」カオマッカ

「僕も桃香のことが好きです。付き合っていただけますか？」
「は、は、はひっ!?」カオマッカ
「それじゃあ、これからお願いしますね。桃香」
「はい、こちらこそお願いします。御主人様」
「「……んっ……んんっ……」」
「「ぷはっ…はあ、はあ、」」
「「……んっ……」」
　そうして僕は、桃香の頬に手を添え口づけをした。それも何度も。このとき僕も桃香も顔は真っ赤だった思う。
　そうして、気づくべきだった。僕達のいる場所を。そう、初めて桃香と逢った場所から僕達は動いていない、つまり、僕達は里の人達がよく通る場所で、泣いたり、怒ったり、照れたり、悲しんだりしていた。
　そして周りにたくさんの人達がいることに気づかずに、キスをしていたのだ。それも何度も!!
　それはもう、周りからの視線が痛いことになっていた。
（はあ～～。もうここまできたら今更気にしてもしょうがないでしょうね。桃香はまあ、めっちゃ気にしてますけどね。ってあ!?）

「桃香、僕の呼び方どうにかならない？」
「なりません」
「そこをどうか」土下座
「無理です♪」めっちゃくちゃ笑顔
「はあ～」諦め
（まあ、僕の威厳がなくなるだけで済むし、そのままでいいか）ショボーン
そうして僕達はとりあえず桃香の家に行くことにした。

第四話

～劉備ｓｉｄｅ～

私が住んでいる里、桜桑里は、幽州にある涿郡の涿県の外れにあるため、とても田舎の場所だった。

そして、桜桑里には、子供が少なかったことや、私がかなりの人見知りといこもあり私には友達といえる人達はいなかった。

そのため、私は、いつも家の手伝いをするか、家を出て里の中央で、他の人達や、私以外の子供達が遊んでいるところを眺めていた。

そして、今日も私は手伝いを終え、里の中央に向かった。

しかし、今日はいつもとは違っていた。なぜなら中央には年が私か、少し大きいくらいのこの辺では見かけない男の子がいつも私がやっているようなことをしていたからだ。私は、その時点で、その男の子が今日この里に来たのだろうと察した。

そして私は、その男の子が、私と被って見えたため、私は勇気を出して話しかけた。

(私だって勇気を出して話しかければ、一人ぐらい友達もできるよね)

「ねぇねぇ、そんなに辺りを見渡していて、何をやってるの?」

「っっ!?」ビクッ

男の子は、私を見ると驚いたような顔でこちらを見ていた。でも顔をこちらに向けていても何の反応もなかった。私はこれで心がぽっきり折れかけてしまった。しかし、もう一度勇気を出して話しかかることにした。

(きっと驚いたように見えたから、それできっと私の話が聞こえなかっただけだよね?無視されているわけじゃないんだよね?)

「ねぇねぇだから、何やってるの?ねぇねぇ?……グスッ」ポロポロ

しかし、話しかけても何の返事も返ってこなかったため、私の心はぽっきり折れてしまった。

(なんで何回話しかけても返事が返ってこないの?ねえなんで?せっかく勇気出して話しかけたのに。無視されてるのかな?)ヒクヒク

〜数分後〜

「えっと、ごめんよごめんよ、一つだけ言うこと聞くからお願いだから謝るから泣き止んで〜」

私は、このとき私の心がまた元通りになった。

(これで私にも友達ができる)

「グスッグスッ…ほんと？」クビカシゲ
「うんうん、ほんとほんと」
「ならいいよ～」ニパ～
「ええっと、ところで、一つだけ言うこと聞くけど、何を聞けばいい？」
　この言葉で、友達になって欲しいということが恥ずかしくなってしまった。そのため、返答を長引かせてしまった。
「えーとね～～あっ！そうだ！あれにしよ」
「えっと、だからあれって何？」
「えーとね～わ、わ、私と友じゃちにアウ、．友達になってくだしゃいぅぅっ」モジモジ
　勇気を出して言おうとした言葉を私は噛んでしまいより恥ずかしくなってしまった。また、それから彼からの返答がなかなかこなかったため、友達にはなってくれないのではと考えてしまっていた。
「やっぱり…駄目？」グスッ
「いえいえ、大丈夫ですよはい、僕と友達になりましょう」
　このとき友達になることが否定されていたわけじゃないことがわかりとても嬉しかった。
「よかった～、此処の里って私ぐらいの子供が少ないことや、私がかなりの人見知りのせ

いで友達がいなかったんだ～」
「そうだ！此処は里なんですか？」
「そうだよ！此処は桜桑里って言うんだよ？知らなかったの？」
（やっぱり彼、今日ここに来たばっかりなんだ。それじゃあ、いつかまた別れちゃうのかな？）
「ええ、知りませんでした。ところで、桜桑里はどの辺にあるか、わかりますか？近くの地名や山などでもいいので」
（あれ？彼ここまで来たのになんで桜桑里の周りのことも知らないんだろ？親からどのような所なのか聞かされてないのかな？）
「えっとね、桜桑里はね、幽州にある涿郡の涿県の外れにあるんだよ」
「涿郡って！もしかしてこの国は漢って名前だったりしますか？」ズイ
（顔が近いよ！）
「そ、そうだよ！」ヒキッ
「そうですか」ヒョイ
「あっ！まだ、自己紹介してなかったよね？さっそくしようよ！」
「ではまず僕から、僕の名前は北条刹那といいます。今年で８歳になります。これから宜しくお願いしますね」

（へ～名前、刹那って言うんだ！あと年はやっぱり私より一つ大きいだけなんだ）
「うん！よろしくね！私は、姓名が劉備で、字が玄徳、真名が桃香だよ。今年で７歳になるよ」
（あれ？なんか私の名前言ったら溜め息つかれたけど、なんでだろう？少し悲しいな）
「すみません、僕のいた場所では真名といのは聞き慣れない言葉で、どのような意味があるのですか？」
（真名が無いなんてこの国の人じゃなかったの！）
「えっ？そうなんだ～。真名っていうのはね、私達の真の名のことでね。真名を許可なく呼べば、誰であろうと殺されても、文句は言えないんだよ。それほど尊いものなんだよ」
「それほどのものを僕に？」
（だって私にとって初めての友達で、嬉しいんだもん）
「うん！だって私にとって初めてできた友達なんだもん！」
（何か彼、深刻そうな顔をしているけど、どうかしたのかな？）
「そうですか。では僕には、真名がありませんから、真名の代わりに、僕自身のことを教えることにしますね。ただ、もしかしたら話しを聞いたあとに、僕のことを気味が悪く感じることになるかもしれませんが、それでもよろしいでしょうか？」

（初めてできた友達のことだもん気味が悪くなんて感じないよ！何より刹那、さっき深刻そうな、思い詰めたかな顔をしてたんだから、ここで否定すると刹那が壊れてしまう感じがする）

「うん、たぶん大丈夫だよ。何より私にとって初めてできた友達の刹那のことを、私知りたいもん！」

「僕のことを可笑しな人だと思うかもしれませんが、どうやら僕は、１９００年近く前の世界に迷い混んでしまったようなんですよね。

まあ、信じるかどうかは、桃香次第なんですが。

また僕には前前世と前世の記憶があるんです。だから今世の記憶もたぶん引き継ぐ可能性が高いと思うんです。

実際に今の僕の性格は、なぜだか前世の時の性格が強く出ているんです。

なのである意味今の僕は今世の僕とは言いづらいのですが」

私は刹那の話を途中まで聞いていたとき

（刹那は凄いな、私と似ているのにこんなにも最善の事を考えて行動に移せるなんて！）

と思う様になり、

そして私は、刹那の事を考えると胸が締め付けられる様にドキドキするようになっていた。

そして私は、自分が刹那に恋をしていることを自覚した。
（ああ、私今、刹那に、いいえ、御主人様に恋してるんだ！）
そして私は御主人様がまだ話をしてる途中で御主人様を抱き締めていた。
（こんなにも、御主人様は心の中で抱えてたんだ！どうにかして、御主人様を安心させてあげたい）
「うんうん、大丈夫だよ。私は御主人様を信じるから。ずっといつまでも私は御主人様の近くにいるから！だから!!」ポロポロ

『泣かないで!!』

「えっ？…なんで……涙：が…出てきてるいるのでしょうか？」ツー
（御主人様は気づいてなかったんだ）
「ってうん？ってなんで僕の呼び方が御主人様なんですか!?普通に先程と同じように刹那でいいじゃないですか!!桃香まで、泣いてますし！あと若干怒ってませんか？」
（御主人様は御主人様自身が御主人様の存在を否定していることに対して私が怒っているのをわかってないんだ!!それならしっかり今の私の感情を気持ちを伝えないと）

『だって!!』

「御主人様の話しを聞いてたら、どこか私と似ていて、でも私の様な馬鹿と違って頭が良くて、普通の人だったらきっと認められないことでも、すぐにそのことを認めて、次はどうしたらいいか？って最善のことを考えて行動に移せるのが凄いな、かっこいいなって、私もいつか御主人様の様になりたいなって思って、

途中から胸が締め付けられる様にドキドキしてきて、ああ、きっとこれが恋なんだろうなって自覚してきて、

でも御主人様はこの世界で独りしかいなくて、心細いはずって気づいて悲しくなり始めたら、

今度は御主人様が、自分で自分を否定するようなことを言い始めたからじゃないですか!!そんなに自分のことを、否定しないでください！今私の目の前にいる御主人様は御主人様しかいないのだから。

だから：だから、お願いだから！私が好きになった御主人様の存在を否定するようなことを御主人様自身が言わないでくださいよ～～ぅぅっ」グスッグスッグスッ

～数分後～

「だから、今の御主人様の存在を御主人様であったとしても否定することは私が許しま

せん!!」プンプン

「桃香?」

「なんですか?」プンプン

「今さっき、僕に告白したことは、気づいてますか?」

「えっ??……っっ!?!?」プシュー

「だから、僕も今の気持ちを桃香に伝えたいと思います」

「ひゃっ、ひゃい」カオマッカ

(絶対、今の私の顔真っ赤だ)

「僕も桃香のことが好きです。付き合っていただけますか?」

(うそ、えっ?本当に?今日まで友達すらいなかったのに!本当に今日御主人様に声を掛けて良かった!!)

「は、は、はひっ!?」カオマッカ

「それじゃあ、これからお願いしますね。桃香」

「はい、こちらこそお願いします。御主人様」

(あっ!)

「「……んっ……んんっ……」」
「「ぷはっ…はあ、はあ、」」
「「……んっ……」」
　そうして御主人様は、私の頬に手を添え口づけをした。それも何度も。このとき私も御主人様も顔は真っ赤だった思う。
　そうして、気づくべきだった。私達のいる場所を。そう、初めて御主人様と逢った場所から私達は動いていない、つまり、私達は里の人達がよく通る場所で、泣いたり、怒ったり、照れたり、悲しんだりしていた。
　そして周りにたくさんの人達がいることに気づかずに、キスをしていたのだ。それも何度も!!
　それはもう、周りからの視線が痛いことになっていた。

「桃香、僕の呼び方どうにかならない？」
（絶対変えません!!）
「なりません」
「そこをどうか」土下座
（土下座されても変えません。だってこんなにも私を恥ずかったけど変えてくれたんだ

もん）

「無理です♪」めっちゃくちゃ笑顔

「はあ～」諦め

（このあと、お母さんに相談と御主人様のこと紹介しなくっちゃっ♪）

そうして私達はとりあえず私の家に行くことにした。

第五話

～刹那（呉）ｓｉｄｅ　～

「此処…何処じゃ？」

周りを見ても木しかない。また草も生えたい放題になっており、自分が立っている場所が獣道にいることぐらいしか理解していなかった。

（ふむ、…山が、見えるの。……高さからいって、此処も山じゃな）

現在の状況を全て理解するよりも、此処が山とわかった瞬間行動を移すのは、早かった。

（此処が山ならば天気も変わりやすいはず。ともかく、いつ雨になるかもわからん。雨を凌げそうな、洞穴を探さなければ！）

しかし、その付近で、洞穴を見つけることができずにいた。また、洞穴を見つけることに夢中になりすぎていたためか、山を下りるどころか、逆に登ってしまっていた。どうやら、前前世の性格の刹那は、他の刹那達よりも、直感で動くらしい。

（しまった!?逆に登って来てしまったの。それに山の洞穴なら、熊などの獣いるやもしれないのぉ…武器の準備をしとくのが無難じゃな）

そうしてキューブを刀に変えた。
この刹那は自分の性格が今世ではないことや自分の言葉遣いや、一人称が変わっていることに、いまだに、気づいていない。何よりこの時点でまだ刹那は、精神年齢は１５５歳でも、肉体年齢は、８歳である。前前世が北条家の猛将だったためか、この刹那は熊などの獣相手でも遣り合うつもりらしい。若干戦闘狂である。普通のこの歳ぐらいの子供でこれだと、将来がとても心配されそうだ。
～数十分後～
（やっと見つけた！天気も如何に雨が降りそうな雲じゃ。見つけられて良かったわい。しかし、中からは何かしらの生き物の気配がするの。準備は大切じゃな）
しかし、洞穴の中からは、熊などの獣の唸り声等ではなく、男達の笑い声が聞こえてきた。
（ふむ、中に入ってもう少し聴いてみることにしてみるかの。それと、できれば人数確認もしたの）
中を確認してみるとそこには数十人の騒いでいる男達と手足を縄で縛られた、身体がぼろぼろの鮮やかな薄い紫色の髪をした女の子がいた。
「へへへっお頭、今日の獲物は当たりでしたね！」
「がっはっはっは!!おうよ、あの商人、護衛を雇う金をケチってこんなありさまだしな！

こっちからしたら有り難かったがな!!」
「ぎゃはははっ!そりゃそうだ。それに、小娘とはいえ、上玉も手に入りましたしね!」
「だが小娘が暴れたせいで此方も数十人殺られたがな。その小娘も今じゃ手足を縛られて何もできないがな!がっはっはっは!」
「お頭!このあとの宴が終わったら、味見してもいいですかい?」
「あぁいいぞ!だが、壊すんじゃねえぞ!!とりあえず
　野郎共っ宴だー!」
「「「「「おおー」」」」」
「それじゃあ、俺は小娘にまた話があるから先に始めてろ!」
（これは、不味いのぉ。それと今、娘と何か話している男の声は、聴こえないが、よく娘を見れば殴られたりしたような跡が見えるぞ!助けるにしても、もう少し油断してからにするかの。）
　～数分後～
（賊は数えてざっと６０人ちょいといったところじゃが、そろそろ行くとしよう）
「スーウ、貴様らは賊で間違いはないな!!」（大声）
「あぁん?なんだ?このガキは??」
「おい、ガキ!何処から入って来やがった!」

「入り口からに決まっておろうが、馬鹿か貴様らは!!」
「なっ！てめえっ！ガキだからって手加減しねーぞ!!」
「殺すぞ！ガキ！」
「それより貴様ら、そこにいる娘に手を上げよったな!?」
「あぁ？だったらなんだよ？」
「貴様がこの賊の親玉だな？」
「そうだが、それがどうした？」
「いいや、ただの確認じゃ。それと女に手を上げるとは、男の風上にも置けない奴等じゃな！」
「あぁ？だから何だってんだよ？」
「何、わしのなかで貴様らを皆殺しにする理由ができただけじゃ」ギロ
「「「「「っぷ！ぎゃはははは」」」」」
「こいつは、面白い冗談だ!!この人数を一人で遣り合おってか！がっはっはっは、舐めんじゃねえぞこのガキが!!野郎共ーこのガキを袋叩きにしてやれ!!」
「「「「「おおーー」」」」」
　男達が向かってきたが、刹那はそれらを全て無視をして娘の元へと向かった。それに対し、コケにされたと思った男達は武器を振り下ろしたが、そのことごとくを避けたり、

刀で防いだ。そうして娘の元へとたどり着いた。
「あなた！早く私にかまっていないで逃げなさい！殺されちゃうわよ!!」
「御主はこの状況で面白いことを言うなぁ。おっと！人が話しているときに邪魔をするでないわ!!!」ザン
　話しているときに邪魔をした男は上下に真っ二つにされた。その光景を見ていた男は、その光景に唖然としていた。今、手出ししても殺されることがわかった男達は隙を窺うことにした。
「ふん！人が話しているときを邪魔するからじゃ！それより女を見捨てて男がにげるなぞ、男の恥じじゃ!!何よりこれは、わしが売った戦じゃ！逃げるわけなかろうが!!」
「なら、せめてこの縄を切って！私も闘うから!!」
「ふむ、縄を切るのはよいが、飽く迄も奴等の人質ならないように、自己防衛をしてもらうためじゃ！わしが売った戦に誰の手出しはさせんわ！」ザンッ
　そして、わしは、娘の縄を切った。
「えっ！あんた本気で言ってるの!?この状況を見なさいよ！この人数を一人で相手して勝てるわけないじゃない!!」
「わしは、この人数でも問題がないから言っておるのじゃ。それに、冷静になされ、御主の身体はもはや、ぼろぼろじゃ。戦えるわけなかろう」

「なっ！あなた私を馬鹿にしてるの!?いえ、舐めてるのね!?私を馬鹿にしないで!!」プルプル
「じゃがな、ほれ！」ツン
「っ!?」ガク
「立つのでさえ辛いはずじゃ。ここはわしに任せておれ」ダキッ
　そうして、刹那は女の子をお姫様だっこをして自分より後ろの奥に連れて行こうとした。
「ひゃっ!?なっなっなにするのよー!!」カオマッカ&プシュー
「隙がだらけだぞ!!馬鹿が！」「死ねー！ガキが！」
「なっ！危ない!!」
　しかし、刹那が女の子をお姫様だっこして奥に連れて行こうと男達に背を向けた瞬間、二人の男達が武器を振り下ろして襲ってきた。
「舐めるな隙なぞないわあ!!」キンッ
「「なっ?!」」　「キャアッ」
　しかし、刹那は、女の子をお姫様だっこから自分の胸元
に抱き寄せるようにし、片手で二人の男達の攻撃を刀で防いでいた。
「ふっ！まだまだ、足腰の踏ん張る力が弱いわあ！次からやり直してこい!!」ザン

「「ギャアッ」」

そうして刹那は刀を振り払い、男二人の首を刎ねた。

「」ポケー

「御主は御主でこっちを見詰めて何を呆けておるのじゃ」呆れ

「はっ!?なっ何でもないわよ。べっべっ別にあなたに見とれて惚けていた訳じゃないんだからね!!勘違いしないでよ!」カオマッカ

「何を言っておるのじゃ御主は?」

誰が何処からどう見てもこの女の子は刹那に見とれていたことがわかる。しかし、自分でわかってるくせに否定していることから、この女の子はいわゆるツンデレである。

しかし、刹那はいつもはカンが鋭かったり、直感で動いているのに、自分のそっちの恋愛事情になると鈍感なるらしい。そのため、全然女の子からの想いに気づいていなかった。

言葉も意味がすれ違っている。

こいつ、目の前で堂々と言われてやっと少しは自覚するかもしれない。

「とりあえずわしの背中の後ろに隠れていろ!但し十分離れておれ!ここは誰も通さん。だが、念のため刀は持っておけ。って何をまた呆けておるのだ!しっかりせい!」

「えっ!べっべっ別に誤解しないでよ!別にさっきのあなたを見てかっこよかったな〜

とかあなたを見てて胸がドキドキ締められてるようでこれが恋なのかなっとかあなたに恋しちゃってるのかもしれないなんて思ってたりなんて思ってないんだからね」

「御主が鯉をしている？わしに鯉をしちゃってるかも??だから御主は何を言っておるのだ！」

女の子がここまで自爆してるのに、気づかないこいつは、なんなのだろうか？ツンデレではなく、はっきりとした言葉でないとこいつは、理解しないのかもしれない。というよりも恋を鯉と聞き間違えているこいつに、しっかりした好意をこの女の子は伝えることはできるのだろうか？

そして刹那は男達の方に振り返り

「それよりも、これよりここは貴様らにとっての墓場じゃ！覚悟はできておろうな？いや！できているはずじゃ!!とりあえずまとめて、かかってこいやー!!!」

「「「「「「「「「「うおおー」」」」」」」」」」

そこからはその洞穴内は、戦場と化した。

「がはっ!?」ザン

先ず刹那の近くいた男から襲ってきた。刹那はその男に対して真上から刀を振り下ろした。男はそれに対して武器で防ごうとしたが武器ごと身体を左右に真っ二つにされた。

「死ねー！はっ？ぐひっ！」グサ「なんびゃっ!?」スパッ

次に左右に真っ二つされた男の後ろにいた男が槍で刹那を突きにきた。しかし、刹那はそれに対して相手に近づき槍を

躱し瞬時に刀を槍に変形させ、男の顔面を貫き、そのまま、その男の隣にいた男の首を槍の刃の部分で刎ねた。

「「「「びげろっ!?」」」」グサグサグサグサグサ

男達は武器の変形に驚き足を止めてしまった。それを猛将の性格になっている刹那が見逃すはずがなく、今度は槍から弓に変形させた。

しかし、その弓には矢は存在してなかったが、刹那が弓の弦を引くと、弓の周りに磁力が発生し、これがまた瞬時に周りにある砂鉄が集め、鉄の矢となった。そのまま驚いている男達の眉間を矢で射る。眉間を貫いた矢は、また砂鉄に戻り矢は消えてしまった。

ここまでが僅か１０秒間の出来事である。この刹那、他の刹那よりも、自分のことや自分に対する好意には鈍感で、あまり、深く物事を考えないが、武術、体術、武器の扱いに関しては優れていた。つまり全ての性格が集まっている現代にいた刹那は最強だったのかもしれない。

「「「「」」」」ブチ

次に弓からまた、変形させ、今度は巨大な鎚にさせた。そして数回その鎚を振り回した。たったそれだけで、ほとんどの数人で固まっていた男達をミンチ状態にしてしまった。

そのあとは、残っていた男達を一人一人片付けて行った。ついでに敵の親玉は鎚に巻き込まれてミンチ状態になっていた。

そして刹那は、かすり傷すら負っていなかった。猛将の性格の刹那は強すぎました。こんな刹那ですが、もう一度言いますが、肉体年齢は８歳である。チート気味である。

「」ポケー

「戦は終わったぞ！ってまた呆けておるのか！御主その呆け癖どうにかならんのか!?」

「はっ!?惚けてて、わ、わ、悪かったわね！でも、し、仕方ないでしょ！あなたのその変な武器を上手く扱う姿がとても勇ましくて、よりいっそう私があなたのことに恋してるんだなって想って自覚しちゃったんだもん！それであなたに抱き着きたいって想うようになったのよ!!ようするに私があなたのことが好きになっちゃったの!!!!」

「御主がわしのことを鯉していることを自覚して？わしに堕姫憑きたい？ようになって鋤になっちゃった??やはり御主が言っている意味がわからん！」

こいつ、もはや理解する気があるとは思えない。そして、それにたいして切れる女の子。当たり前である。

「」ブチッ
「だから、私はあなたのことが、す・き・になったのわ・か・る」（大声）
「いや、わからん!!」ドドンッ
堂々とし過ぎだと思われる。
「もういい!!わからしてやる!!!」チュッ
「んっ?!?!?!」パチクリ
そして、女の子は大胆であった。
「んっ……ぷはっ…これでわかった！私の気持ち!!」
「なっなっ何をいきなりするんじゃ！いきなりせっせっ接吻などと」カオマッカ
また、この刹那、何気にうぶであった。
「これが私の気持ちよ!!あなたの気持ち聴かせてくれない?」
「ふ、ふむ、わしも日本男児だ！せっせっ接吻されたからにはその想いに応えよう！……ってあれ？御主の名前なんじゃ？」
「あれ？そういえばお互いに名前知らないわね？せっかくだし名前教え合いましょう」
「そうじゃな！わしの名前は、北条刹那、８歳である」
「私は、姓名が孫権、字が仲謀、真名が蓮華よ！そして私も８歳よ」
「真名ってなんじゃ？わしの国には真名というものがないからの。教えてもらってもい

いかの？」
「そうなのね！なら教えるわね！真名っていうのはね、私達の真の名のことよ。真名を許可なく呼べば、誰であろうと殺されても、文句は言えないものよ。それほど尊いもの。理解できたかしら？」
「とりあえず、教えてもらったら、口に出してよいのじゃな？」
「そうよ」
「それじゃあ、蓮華、蓮華、蓮華、蓮華、蓮華どうじゃ？」カオマツカ
「刹那に言われるごとに、胸の奥から熱い何かが込み上がってくるようだわ！」カオマツカ
「ならよかったのじゃ！あとわしのことも真名の代わりに教えるのお」
「ええ、ぜひ、教えてちょうだい！」
「わしは、日本って国にいたのじゃが、突然此処に迷い混んだのじゃ。まあ、神隠しにあったようなものじゃ。
　まあ、信じるかどうかは、蓮華次第じゃがな。あとわしには前前世と前世の記憶もある。だから今世の記憶もたぶん引き継ぐ可能性が高いと思うぞい。
　あっ！今気づいたのじゃが今のわしは、前前世の性格になっておるの。今世のわしは、わしとは言わずに俺と言っておったからな！」

「そうなの……あとこの国は漢と言うわ。ついでに此処は漢の徐州の下⊠国って場所よ」
「何を言ってるのか、ちんぷんかんぷんなのじゃ。しかし、この国が漢と言うことは、わしは、１９００年近く前に迷い混んだことになるんじゃ」
「そう、まあ、刹那の言っていることだし、信じるわ」
「ありがとうのお。それから、今更ながらわしと恋人になってくれんかの？」テレッ
「勿論よ♪これからよろしくね♪」
「こちらこそよろしく頼むのじゃ。あと今度はわしからも接吻をしたいのじゃが、いいかの？」カオマッカ
　刹那は、何気にむっつりだった。
「ええ、勿論♪刹那からもしてもらいたいわ♪」

「では……」ドキドキ「……」ドキドキ
　あと数センチで唇同士が重なるっというところで
「蓮華大丈夫!?」
「っっっっ!?!?!」
　謎の女の子の登場により、結局接吻をすることはできなかったのであった。

第六話

～刹那（呉）ｓｉｄｅ　～

「蓮華大丈夫!?」

「っっっ?!?!?!」

謎の女の子の登場により、結局刹那から接吻をすることはできなかったのであった。

「えっ!?姉様!?」

「姉様!?」

「ええ、でもなんで姉様完全武装しているのかしら?」

「いやいや!完全に御主の為だろうに!?御主先程まで、賊達に捕まっていたじゃろ!もう忘れたのかや!!

」

「…あっ!……そうだったわね。忘れてたわ」

もはや、蓮華にとって、賊達に襲われたことは、遠くの過去の話しになっていたらしい。

「それと御主の姉、わしのこと、何故か親の敵のように見てくる…いや、睨んでくるん

じゃが、わし何かしたかの？」
「知らないわよ！それともう、私の真名は教えたんだから、御主じゃなくて蓮華って呼びなさいよ!!」
「それもそうじゃな！蓮華、このあとのことは、どうするつもりかの？」
「なっ！蓮華っあなた！そいつに真名まで教えているの!?」
「ええそうよ！姉様！何より私この人、刹那の妻になりたいもの♪接吻もしちゃったし♪」
「「つ、妻ーー!?」」
「何刹那まで驚いてるのよ？何？私と接吻しときながら結婚はしたくないの!?」
「いや別にそういうわけじゃないのじゃが。さっき恋人になったばかりなのに、もう結婚の話しなったから驚いただけじゃ。なにより、わしらまだ、８歳じゃぞ！」
「あ、あの、蓮華に、男友達すらいない、蓮華に恋人!?ましてや妻ー!?蓮華っあなた！そいつに何か弱味を握られているんでしょ?!そうでもなきゃ、いきなり蓮華に恋人ができるはずがないもの！大丈夫よ、蓮華！とっととそいつをぶっ殺して助けてあげるからね!!」
　この姉、何気に実の妹にひどいことを言っている。
「なんかもうわしの話し、絶対に聴いてもらえぬだろ？この状況」

「ちょっ、ちょっと待ってよ姉様！私、刹那に助けてもらったのよ！それに弱味なんて握られてないわよ!!」
「そんなの嘘よ！そいつを別に庇う必要なんてないわよ。大丈夫私が助けてあげるから、蓮華は安心してなさい。」
「どうやら、実の妹の話しもしっかり聴くつもりはなさそうじゃな」
「ごめんなさい、刹那。姉様、私のせいで暴走しちゃってるみたいなの」
「まあ、仕方ないじゃろ。実の妹に何かあったのではと、慌てていることはよくわかるからの」
「孫策様！部隊５０人全て揃いました。次の指示を！」
「わかったわ。そこにいる男をとっとと殺して蓮華を連れ戻し、下⊠国に戻るわよ！」
「「「「はははっーー」」」」
「どうやら、話して解決する問題じゃ、なくなったようじゃな」
「ごめんなさい！でもどうか！皆を殺さないで!!」
「そのようなことは、わかっておるわ。しっかし、これは少しばかり骨がおれそうじゃな！」
　そうして、刹那は刀から金属バットに変形させた。
「刹那……何……それ？」

「うん？…あぁこれは、非殺傷武器に変形させただけのことよ」
「刹那が持ってる武器？って変わってるわね」
「まあ、なにかと便利じゃぞ。これっと！きたようじゃな。とりあえず、大丈夫じゃとは思うが、念のため後ろに下がっておるのじゃ！」
「それじゃあ、姉様と皆のこと、頼むわね」
「任せておけい！気絶程度ですませておくわい。殺しはせんし、殺されもせんわ！」
「っっ!!舐めやがって!!皆かかりなさい！」
そうして、刹那の非殺の戦が始まった。
しかし、確かに賊達よりも、孫策の兵達は強かったが、５０歩１００歩でそこまでの大差はなかった。
そのため、非殺とはいえ全ての兵を気絶させるのにそこまで時間はかからなかった。
だが、孫策は別だった。
「確かにあなた強いわね。これなら、その辺の賊なら問題は、ないでしょう。先程のことは、謝ります。ですが！あなたが蓮華を脅していることには、なんの変わりはありません！ですから死んでください！」
そう言った孫策は、刀を構えた。そして、刹那も金属バットを構えた。その瞬時から周りの空気がピリピリとし始めた。

（蓮華の御姉さん、気配だけでもわかるが強いのお。これは、久しぶりに血が滾るような戦ができそうじゃな！）
（相対したからこそ、わかるけどこいつ、強いわね。でも蓮華のために負けられない！）
そうして、どちらが先に動いただろうか？どちらが先に動いたと判断しにくいほど二人は同時に動いていた。
キャキィンギギ！
普通なら金属バットごと刹那は切り捨てられるところだったが、金属バットになっているキューブは普通の金属ではできていなかったため、切り捨てられることはなかった。
一撃で仕留めようとしていた、孫策はその状況に驚いていた。しかし、孫策が驚いている隙を逃すほど、刹那は甘くなかった。
「しまっ!?」キンッ
「ふっ！」ゲシッ
「キャアッ」ツルッ
「これでも、まだやるかの」ピト
刹那は孫策の顔面に金属バットを振るった。しかし、それに対し、孫策はすぐさま刀で金属バットを払ったが、その金属バットは囮だった。刹那は無理に金属バットを払っ

た孫策の崩れたバランスの身体の脚を自分の脚でかけ転ばした。そして、尻餅をついた孫策の首筋に金属バットを添えたのだった。
「まだ、やるというのであればこのまま気絶させる。しかし、やらないというならばここで終わりじゃ。さて、御主はどちらを選ぶのじゃろうな?」
「くっ!しかし、このままじゃ蓮華を救えない!!」
「だから、姉様、人の話しを聴いて!全て姉様の誤解なの!」
「あなたはこいつに、騙されてるのよ!蓮華!!」
「だ・か・ら〜ひ・と・の・は・な・し・をき〜け〜この馬鹿姉様があっ!!」ブンッ
「ひぎっ!?!?」バギャッ
蓮華の話しをなかなか聴かない孫策に対して、苛立った蓮華は、孫策の左頬に右ストレートを決めてしまい、結局孫策を気絶させてしまった。
「」キュ〜
「おいおい、結局気絶させてしまってどうするのじゃ!?」
「あっ!ごめんなさい」ショボーン
そのあと、孫策が目が覚めるまで待ち、目が覚めてからは、これまでの全ての事情を話した。
「そう、……私の誤解だったのね。刹那さん、ごめんなさい」

「いや、わしも久しぶりの血が滾る戦ができたから満足じゃ！それと、一応もう一度名乗るが、わしは、北条刹那８歳じゃ」
「私も自己紹介するわね！姓名は孫策、字は伯符、真名は雪蓮、１０歳よ！でもまだ、蓮華との仲を認めたわけじゃないからね！」
「何故ですか?!姉様!?」
「だって～、私も刹那が気に入っちゃったんだもん」
「何が！気に入っちゃったんだもんですか!!刹那は私のです。姉様であろうと渡す気はありませんよ！」
「あら?蓮華あなた、姉である私に喧嘩売るの?だったらいいわ！買ってあげる!!」
「刹那は私のことが、好きなんです！姉様のような年増には刹那が好きになるはずがありませんよ!!」
「ムキーッ！実の姉に年増だなんて！というか私あなた達よりも、年上でもまだ、１０歳よ!!」
「ねえ刹那?あなた、私のことが好きなんでしょ！ここではっきり姉様の前で言ってちょうだい!!」
「あら?私のことはどうかしら?蓮華よりも先に大人の身体つきになるわよ！」
「さあ！どっちを選ぶの!!」

（こういうの修羅場というんじゃっとのぉ）現実逃避
「わしにとって、蓮華が一番これは、変わりようはない。しかし、雪蓮も選ぶと言うのはやっぱりなしかのお？」
「まあ、私が一番っていうのなら、姉様だしいいわよ！」
「私もまあ、選んでもらえるのならいいわ！」
「すまない、ひどいことを二人に言っていることは、わかっとる。しかし、どちらかだけを選んでもう一人のほうを悲しませなくはないのじゃ」
「それじゃあ、御母様達にも刹那のことを伝えるために早く下⊠国に行きましょ？ねえ刹那!!」
「もう、蓮華ったら、でもそれもそうね！行きましょうか？刹那！」
「なんかもう、わし、今の時点で緊張で腹が痛くなってきたのだが！」ダラダラ
　そうして、蓮華と雪蓮に連れられ刹那は、下⊠国にある蓮華達の家がある街に向かったのだった。

第七話

〜孫権ｓｉｄｅ　〜

私は、今日初めて賊の恐ろしさを知った。

私は南海覇王の整備に必要な道具を買いに隣街の鍛冶屋まで、行っていた。そして、一通り買い終わったため、自分の家がある徐州の下⊠国の街に戻ろうと商人の荷台に乗せてもらい帰った。

しかし、私の家がある街の付近で私たちは賊達に襲われた。

そのうえにこの商人は護衛を雇うお金をケチっていたため、商人はすぐに殺されてしまった。そして、私も出来る限りの抵抗した。それにより、賊達を２０人以上を殺したのは覚えているが途中から体力もなくなり捕らえれてしまった。その際も抵抗したため、身体中を殴られ、手足は縄で縛らてしまった。そして、私は南海覇王を抱き締めたまま気絶してしまった。

私は洞穴の上から垂れてくる水により目を覚ました。

（ここは何処なんだろう?もう私駄目なのかな?）グスッ

「お頭、小娘が起きやしたぜ!」

「おう！小娘やっと起きたな！おめが抱えて持ってるその刀をこちらに渡してもらおうか!!」
（どうやら、あの状況でとっとと手足を縛らなきゃいけなかったぽいから抱えて気絶した私は南海覇王を奪われなかったのね！）ホッ
「渡すわけないでしょ！」
「なら無理矢理でも奪うぞ！」
「奪えるなら奪ってみなさい！ただし手足の縄をほどいた瞬間に殺してやる!!命の惜しくないのなら奪いにくるがいいわ！」
「ちっ！ならまだそのままでいるんだな！野郎共っー宴の準備だー!!」
（無理矢理奪うって言ってたわりに殺して奪うことはしないのね？あとで聴いてみようかしら？）
～数十分後～
「へへへっお頭、今日の獲物は当たりでしたね！」
「がっはっはっは!!おうよ、あの商人、護衛を雇う金をケチってこんなありさまだしな！こっちからしたら有り難かったがな!!」
「ぎゃははは っ！そりゃそうだ。それに、小娘とはいえ、上玉も手に入りましたしね！」
「だが小娘が暴れたせいで此方も数十人殺られたがな。その小娘も今じゃ手足を縛られ

て何もできないがな！がっはっはっは！」
「お頭！このあとの宴が終わったら、味見してもいいですかい？」
「あぁいいぞ！だが、壊すんじゃねえぞ!!とりあえず
　野郎共っ宴だー！」
（なっ！私このままじゃこの男達に犯されてしまうの!!そんの嫌！私は私が大人になって好きになった相手とそういうことをしたいの!!こんなどこの馬の骨かもわからない奴等となんて死んでも嫌!!誰か、誰か、誰でもいいから助けてよぉ）グスッグスッグスッ
「「「「「おおー」」」」」
「それじゃあ、俺は小娘にまた話があるから先に始めてろ！」
「何しに来たのよ!?あとなんで私を殺して奪わないのよ？」グスッグスッ
「あぁ？てめえをあとで売るためだよ！」
「なっ！ならいいわ！あなた達が私に何かしらしようとして縄をほどいた瞬間に自害してやる！」グスッ
「だがそうすれば、その刀は簡単に手に入るな！」
「うぐっ!?」グスッ
「まあ、いい、この宴が終わるまで考える時間を与えてやる。よく考えるんだな!!」
（私はどうすればいいの？できれば、こんな終わりかたをする前に家族の顔を見たかっ

たな）シクシク

～数分後～

「スーウ、貴様らは賊で間違いはないな!!」（大声）

突然この辺では見かけない服装をした男の子が現れた。

（えっ！誰かが助けに来てくれたの!?でも、私と同じぐらいの年の男の子？）

「あぁん？なんだ？このガキは??」

「おい、ガキ！何処から入って来やがった！」

「入り口からに決まっておろうが、馬鹿か貴様らは!!」

「なっ！てめえっ！ガキだからって手加減しねーぞ!!」

「殺すぞ！ガキ！」

（駄目！早く逃げて！男の子なら捕まったらすぐに殺されちゃう!!）

「それより貴様ら、そこにいる娘に手を上げよったな!?」

「あぁ？だったらなんだよ？」

「貴様がこの賊の親玉だな？」

「そうだが、それがどうした？」

「いいや、ただの確認じゃ。それと女に手を上げるとは、男の風上にも置けない奴等じゃな！」

「あぁ？だから何だってんだよ？」
「何、わしのなかで貴様らを皆殺しにする理由ができただけじゃ」ギロ
（見た目のわりに年寄りくさい言葉遣いね）
「「「「「っぷ！ぎゃはははは」」」」」
「こいつは、面白い冗談だ!!この人数を一人で遣り合おってか！がっはっはっは、舐めんじゃねえぞこのガキが!!野郎共ーこのガキを袋叩きにしてやれ!!」
「「「「「おおーー」」」」」
　男達が男の子に向かっていったが、男の子はそれらを全て無視をして私の元へと向かおうとしてきた。それに対し、コケにされたと思った男達は武器を振り下ろしたが、そのことごとくを避けたり、刀で防いだ。そうして私の元へとたどり着いた。
（凄い!?紙一重のあの無駄のない避けかたや、刀で防ぐ時も、前もって重心を低くして大人の男の人の力を分散させて負けないようにしてる!!でも防いだり、避けてばかりじゃ、じり貧だわ！やっぱりこのままじゃ不味いわね！早く逃がさないと!!）
「あなた！早く私にかまっていないで逃げなさい！殺されちゃうわよ!!」
「御主はこの状況で面白いことを言うなぁ。おっと！人が話しているときに邪魔をするでないわ!!!」ザン
（何なのこの男の子？後ろのまま刀で防いで、振り向き様に切り捨てるなんて！）

話しているときに邪魔をした男は上下に真っ二つにされていた。その光景を見ていた男は、その光景に唖然としていた。今、手出ししても殺されることがわかった男達は隙を窺うことにした。

「ふん！人が話しているときを邪魔するからじゃ！それより女を見捨てて男がにげるなぞ、男の恥じじゃ!!何よりこれは、わしが売った戦じゃ！逃げるわけなかろうが!!」

（この男の子となら、もしかしたら、私助かるかもしれない！それなら!!）

「なら、せめてこの縄を切って！私も闘うから!!」

「ふむ、縄を切るのはよいが、飽く迄も奴等の人質ならないように、自己防衛をしてもらうためじゃ！わしが売った戦に誰の手出しはさせんわ！」ザンッ

そして、私は縄を切ってもらった。

（確かにこの男の子は凄いけどこの数は無理よ！）

「えっ！あんた本気で言ってるの!?この状況を見なさいよ！この人数を一人で相手して勝てるわけないじゃない!!」

「わしは、この人数でも問題がないから言っておるのじゃ。それに、冷静になされ、御主の身体はもはや、ぼろぼろじゃ。戦えるわけなかろう」

（やっぱりこの男の子、周りの状況を理解していない！それに、私を馬鹿にして!!何が、なんでも闘ってやる！）

「なっ！あなた私を馬鹿にしてるの!?いえ、舐めてるのね!?私を馬鹿にしないで!!」プルプル
（今立つのも辛いけど今更弱音は、吐けない）
「じゃがな、ほれ！」ツン
（ちょっ!?!?）
「っ!?」ガク
（やばい！もう今の私じゃあ立てない！どうしよ!?）ナミダメ
「立つのでさえ辛いはずじゃ。ここはわしに任せておれ」ダキッ
（キャッ!?）
　そうして、私は男の子にお姫様だっこをされて今いる場所より後ろの奥に連れて行かされそうになった。
「ひゃっ!?なっなっなにするのよー!!」カオマッカ&プシュー
（か、顔をがとてつもなく近いよ!?な、なんなのこの格好～!?!?）
「隙がだらけだぞ!!馬鹿が！」「死ねーー！ガキが！」
（ちょっ!?後ろから来てるわよ!?!?）
「なっ！危ない!!」
　しかし、私を男の子がお姫様だっこして奥に連れて行こうと男達に背を向けた瞬間、

二人の男達が武器を振り下ろして襲ってきた。
「舐めるな隙なぞないわあ!!」キンッ
「「なっ?!」」　「キャアッ」
(な、何!?何が今起こったの!?)
　しかし、男の子は、私をお姫様だっこから自分の胸元
に抱き寄せるようにし、片手で二人の男達の攻撃を刀で防いでいた。
「ふっ!まだまだ、足腰の踏ん張る力が弱いわあ!次からやり直してこい!!」ザン
「「ギャアッ」」
　そうして刹那は刀を振り払い、男二人の首を刎ねた。
「」ポケー
(この男の子、確実に私よりも武術等は優れているわね。まるで、後ろに目があるような瞬時の動き、そのうえあの太刀捌き、綺麗だったな〜。あとこの真剣な凛々しい顔!かっこいいよ〜。)ポ〜
「御主は御主でこっちを見詰めて何を呆けておるのじゃ」呆れ
「はっ!?なっ何でもないわよ。べっべっ別にあなたに見とれて惚けていた訳じゃないんだからね!!勘違いしないでよ!」カオマッカ
(やばいやばい!!見られちゃった!どうしよどうしよ!!私の気持ちばれちゃったかな!?

あの言い訳は、さすがにないわよ私！）
「何を言っておるのじゃ御主は？」
（あれ？ばれて・ない？ほっ。ならよかった。でも何かしら？とても胸辺りがむかむかするわね！）
　誰が何処からどう見てもこの女の子は刹那に見とれていたことがわかる。しかし、自分でわかってるくせに否定していることから、この女の子はいわゆるツンデレである。
　しかし、刹那はいつもはカンが鋭かったり、直感で動いているのに、自分のそっちの恋愛事情になると鈍感なるらしい。そのため、全然女の子からの想いに気づいていなかった。
　言葉も意味がすれ違っている。
　こいつ、目の前で堂々と言われてやっと少しは自覚するかもしれない。
「とりあえずわしの背中の後ろに隠れていろ！但し十分離れておれ！ここは誰も通さん。だが、念のため刀は持っておけ。って何をまた呆けておるのだ！しっかりせい！」
（やっぱり、かっこいいな～。私、結婚するならこんな人がいいな～。って私！もしかして、この男の子に恋しちゃってる!?やばい!!意識し始めたらドキドキが止まらなくなってきちゃった！）
「えっ！べっべっ別に誤解しないでよ！別にさっきのあなたを見てかっこよかったな～

とかあなたを見てて胸がドキドキ締められてるようでこれが恋なのかなっとかあなたに恋しちゃってるのかもしれないなんて思ってたりなんて思ってないんだからね」
（だから私はどんな言い訳してるのよ!!）
「御主が鯉をしている？わしに鯉をしちゃってるかも??だから御主は何を言っておるのだ！」
（仮にこの男の子も何でこれで気づかないんだろう？）
女の子がここまで自爆してるのに、気づかないこいつは、なんなのだろうか？ツンデレではなく、はっきりとした言葉でないとこいつは、理解しないのかもしれない。というよりも恋を鯉と聞き間違えているこいつに、しっかりした好意をこの女の子は伝えることはできるのだろうか？
そして男の子は男達の方に振り返り
「それよりも、これよりここは貴様らにとっての墓場じゃ！覚悟はできておろうな？いや！できているはずじゃ!!とりあえずまとめて、かかってこいやー!!!」
「「「「「「「「「「うおおー」」」」」」」」」」
そこからはその洞穴内は、戦場と化した。
「がはっ!?」ザン
先ず男の子の近くいた男から襲ってきた。男の子はその男に対して真上から刀を振

り下ろした。男はそれに対して武器で防ごうとしたが武器ごと身体を左右に真っ二つにされた。
（あの刀、何でできてるのかしら？ただ業物であることは確かね！）
「死ねー！はっ？ぐひっ！」グサ「なんびゃっ!?」スパッ
次に左右に真っ二つされた男の後ろにいた男が槍で男の子を突きにきた。しかし、男の子はそれに対して相手に近づき槍を
躱し瞬時に刀を槍に変形させ、男の顔面を貫き、そのまま、その男の隣にいた男の首を槍の刃の部分で刎ねた。
（は？何今の!?刀から槍になった!?私目がおかしくなったのかしら？）ゴシゴシ
「「「ぴげろっ!?」」」」グサグサグサグサ
男達は武器の変形に驚き足を止めてしまった。それを猛将の性格になっている刹那が見逃すはずがなく、今度は槍から弓に変形させた。
しかし、その弓には矢は存在してなかったが、男の子が弓の弦を引くと、弓の周りに磁力が発生し、これがまた瞬時に周りにある砂鉄が集め、鉄の矢となった。そのまま驚いている男達の眉間を矢で射る。眉間を貫いた矢は、また砂鉄に戻り矢は消えてしまった。
（今度は槍から弓になったわね！私の目は正常よね!?）

ここまでが僅か１０秒間の出来事である。この刹那、他の刹那よりも、自分のことや自分に対する好意には鈍感で、あまり、深く物事を考えないが、武術、体術、武器の扱いに関しては優れていた。つまり全ての性格が集まっている現代にいた刹那は最強だったのかもしれない。

「「「「」」」」ブチ

次に弓からまた、変形させ、今度は巨大な鎚にさせた。そして数回その鎚を振り回した。たったそれだけで、ほとんどの数人で固まっていた男達をミンチ状態にしてしまった。

（また今度は、弓から巨大な鎚になったようね。もうなんでもありねあれ！）現実逃避

そのあとは、残っていた男達を一人一人片付けて行った。ついでに敵の親玉は鎚に巻き込まれてミンチ状態になっていた。

そして刹那は、かすり傷すら負っていなかった。猛将の性格の刹那は強すぎました。こんな刹那ですが、もう一度言いますが、肉体年齢は8歳である。チート気味である。

「」ポケー

（はあ～。凄かったなあ～。刀だけじゃなくて、あんなに多種多様に武器を使えるなんて。そのうえにそれらをしっかり使いこなしているし。私もあの人のような武人になりたいわね！やっぱり私この男の子に恋しちゃってるのね。なんだかとてもこの男の

子に今抱き着きたい気持ちでいっぱいだわ！）
「戦は終わったぞ！ってまた呆けておるのか！御主その呆け癖どうにかならんのか!?」
「はっ!?惚けてて、わ、わ、悪かったわね！でも、し、仕方ないでしょ！あなたのその変な武器を上手く扱う姿がとても勇ましくて、よりいっそう私があなたのことに恋してるんだなって想って自覚しちゃったんだもん！それであなたに抱き着きたいって想うようになったのよ!!ようするに私があなたのことが好きになっちゃったの!!!!」
（言っちゃった！）ドキドキ
「御主がわしのことを鯉していることを自覚して？わしに堕姫憑きたい？ようになって鋤になっちゃった??やはり御主が言っている意味がわからん！」
（はあ？私がここまで気持ちを伝えてるのになんで、伝わってないのよ!!）
　こいつ、もはや理解する気があるとは思えない。そして、それにたいして切れる女の子。当たり前である。
「」ブチッ
「だから、私はあなたのことが、す・き・になったのわ・か・る」（大声）
「いや、わからん!!」ドドンッ
（こいつに、どうやってわからしてやろうかしら！恥ずかしいなんてもうどうでもいいわ!!こうしてやる!!）

堂々とし過ぎだと思われる。
「もういい!!わからしてやる!!!!」チュッ
「んっ?!?!」パチクリ
そして、女の子は大胆であった。
「んっ……ぷはっ…これでわかった！私の気持ち!!」
（これで、さすがに伝わったわよね？これで伝わってなかったらどうしましょう??）
「なっなっ何をいきなりするんじゃ！いきなりせっせっ接吻などと」カオマッカ
（あっ！さすがに伝わったようね！こいつ、まったく鈍いんだから！）
また、この刹那、何気にうぶであった。
「これが私の気持ちよ!!あなたの気持ち聴かせてくれない？」
「ふ、ふむ、わしも日本男児だ！せっせっ接吻されたからにはその想いに応えよう！
……ってあれ？御主の名前なんじゃ？」
（やっった～!!あのとき接吻してしまったけど、今思うと恥ずかしいわね。それとこの男の子の名前、私まだ知らないわ）
「あれ？そういえばお互いに名前知らないわね？せっかくだし名前教え合いましょう」
「そうじゃな！わしの名前は、北条刹那、８歳である」
（北条刹那っていうんだ～。いい名前ね！それに、やっぱり私と同じ年だったわ！）

「私は、姓名が孫権、字が仲謀、真名が蓮華よ！そして私も８歳よ」
「真名ってなんじゃ？わしの国には真名というものがないからの。教えてもらってもいいかの？」
（あら？真名を知らないなんて、この国の人間ではないのね）
「そうなのね！なら教えるわね！真名っていうのはね、私達の真の名のことよ。真名を許可なく呼べば、誰であろうと殺されても、文句は言えないものよ。それほど尊いもの。理解できたかしら？」
「とりあえず、教えてもらったら、口に出してよいのじゃな？」
「そうよ」
「それじゃあ、蓮華、蓮華、蓮華、蓮華、蓮華どうじゃ？」カオマツカ
（急に言われると、恥ずかしいわね！）ぅぅ～
「刹那に言われるごとに、胸の奥から熱い何かが込み上がってくるようだわ！」カオマツカ
「ならよかったのじゃ！あとわしのことも真名代わりに教えるのお」
「ええ、ぜひ、教えてちょうだい！」
「わしは、日本って国にいたのじゃが、突然此処に迷い混んだのじゃ。まあ、神隠しにあったようなものじゃ。

まあ、信じるかどうかは、蓮華次第じゃがな。あとわしには前前世と前世の記憶もある。だから今世の記憶もたぶん引き継ぐ可能性が高いと思うぞい。

あっ！今気づいたのじゃが今のわしは、前前世の性格になっておるの。今世のわしは、わしとは言わずに俺と言っておったからな！」

（やっぱりこの国の人間ではなかったのね。それよりも前世何かの記憶があるなんて、凄いわね）

「そうなの……あとこの国は漢と言うわ。ついでに此処は漢の徐州の下⊠国って場所よ」

「何を言ってるのか、ちんぷんかんぷんなのじゃ。しかし、この国が漢と言うことは、わしは、１９００年近く前に迷い混んだことになるんじゃ」

（刹那の話しが本当なら、だいぶ後の人なのね刹那は。刹那のことだから本当のことでしょうけども）

「そう、まあ、刹那の言っていることだし、信じるわ」

「ありがとうのお。それから、今更ながらわしと恋人になってくれんかの？」テレッ

「勿論よ♪これからよろしくね♪」

「こちらこそよろしく頼むのじゃ。あと今度はわしからも接吻をしたいのじゃが、いいかの？」カオマッカ

　刹那は、何気にむっつりだった。
（刹那からもしてくれるなんて嬉しいわね♪）
「ええ、勿論♪刹那からもしてもらいたいわ♪」

「では……」ドキドキ「……」ドキドキ
　あと刹那の唇まで数センチでというところで
「蓮華大丈夫!?」
「っっっっ?!?!?!」
　私を知る謎の女の子の登場により、結局接吻をすることはできなかったのであった。

第八話

～孫権ｓｉｄｅ　～

「蓮華大丈夫!?」

「っっっ!!?!?」

蓮華を知る謎の女の子の登場により、結局刹那から接吻をすることはできなかったのであった。

「えっ!?姉様!?」

「姉様!?」

謎の女の子は蓮華の姉であった。

「ええ、でもなんで姉様完全武装しているのかしら?」

(なんでこのタイミングで来るのよ!?)

「いやいや!完全に御主の為だろうに!?御主先程まで、賊達に捕まっていたじゃろ!もう忘れたのかや!!

」

「…あっ!……そうだったわね。忘れてたわ」

（そういうば、そうだったわね！）

　もはや、蓮華にとって、賊達に襲われたことは、遠くの過去の話しになっていたらしい。

「それと御主の姉、わしのこと、何故か親の敵のように見てくる：いや、睨んでくるんじゃが、わし何かしたかの？」

「知らないわよ！それともう、私の真名は教えたんだから、御主じゃなくて蓮華って呼びなさいよ!!」

「それもそうじゃな！蓮華、このあとのことは、どうするつもりかの？」

（うんうん！真名で呼ばれるとやっぱり嬉しいわ♪）

「なっ！蓮華っあなた！そいつに真名まで教えているの!?」

（姉様はなんでそんなに驚いているのかしら？）

「ええそうよ！姉様！何より私この人、刹那の妻になりたいもの♪接吻もしちゃったし♪」

「「つ、妻ーー!?」」

（刹那まで驚かなくてもいいじゃない！やっぱり私じゃ嫌なのかしら？）イラッ

「何刹那まで驚いてるのよ？何？私と接吻しときながら結婚はしたくないの!?」

「いや別にそういうわけじゃないのじゃが。さっき恋人になったばかりなのに、もう結

婚の話しなったから驚いただけじゃ。なにより、わしらまだ、８歳じゃぞ！」
（歳なんてすぐに経つわよ!!）
「あ、あの、蓮華に、男友達すらいない、蓮華に恋人!?ましてや妻ー!?蓮華っあなた！そいつに何か弱味を握られているんでしょ?!そうでもなきゃ、いきなり蓮華に恋人ができるはずがないもの！大丈夫よ、蓮華！とっととそいつをぶっ殺して助けてあげるからね!!」
（姉様!?私にひどくない!?それに誤解もひどいし！）
　この姉、何気に実の妹にひどいことを言っている。
「なんかもうわしの話し、絶対に聴いてもらえぬだろ?この状況」
「ちょっ、ちょっと待ってよ姉様！私、刹那に助けてもらったのよ！それに弱味なんて握られてないわよ!!」
「そんなの嘘よ！そいつを別に庇う必要なんてないわよ。大丈夫私が助けてあげるから、蓮華は安心してなさい。」
（もう姉様に何言っても聴いてもらえそうもないわね）
「どうやら、実の妹の話しもしっかり聴くつもりはなさそうじゃな」
「ごめんなさい、刹那。姉様、私のせいで暴走しちゃってるみたいなの」
「まあ、仕方ないじゃろ。実の妹に何かあったのではと、慌てていることはよくわかるか

らの」
「孫策様！部隊５０人全て揃いました。次の指示を！」
「わかったわ。そこにいる男をとっとと殺して蓮華を連れ戻し、下⊠国に戻るわよ！」
「「「はははっーー」」」」
「どうやら、話して解決する問題じゃ、なくなったようじゃな」
（本当に姉様と皆がごめんなさい！）
「ごめんなさい！でもどうか！皆を殺さないで!!」
「そのようなことは、わかっておるわ。しっかし、これは少しばかり骨がおれそうじゃな！」
（やっぱりこういうところは優しいわね♪）
　そうして、刹那は刀から金属バットに変形させた。
「刹那……何……それ？」
（また、新しい形になったわね！それにしても今度の形は見たことのない形に変わっているわね！似ている形といったら棍棒が一番近いかしら？）
「うん？…あぁこれは、非殺傷武器に変形させただけのことよ」
「刹那が持ってる武器？って変わってるわね」
（何処で手に入れたのかしら？）

「まあ、なにかと便利じゃぞ。これっと！きたようじゃな。とりあえず、大丈夫じゃとは思うが、念のため後ろに下がっておるのじゃ！」
「それじゃあ、姉様と皆のこと、頼むわね」
「任せておけい！気絶程度ですませておくわい。殺しはせんし、殺されもせんわ！」
「っっ!!舐めやがって!!皆かかりなさい！」
（姉様が怒ってるところ久し振りにみたかも。刹那でも大丈夫かしら？）
そうして、刹那の非殺の戦が始まった。
しかし、確かに賊達よりも、姉様の兵達は強かったが、５０歩１００歩でそこまでの大差はなかった。
そのため、非殺とはいえ全ての兵を気絶させるのにそこまで時間はかからなかった。
だが、姉様は別だった。
「確かにあなた強いわね。これなら、その辺の賊なら問題は、ないでしょう。先程のことは、謝ります。ですが！あなたが蓮華を脅していることには、なんの変わりはありません！ですから死んでください！」
そう言った姉様は、刀を構えた。そして、刹那も金属バットを構えた。その瞬時から周りの空気がピリピリとし始めた。
そうして、どちらが先に動いただろうか？わたしにはどちらが先に動いたと判断しに

くいほど二人は同時に動いていた。
キャキィンギギ!
普通なら刹那のいう金属バット?ごと刹那は切り捨てられるところだったが、金属バット?になっているキューブ?が普通の金属?ではできていないと言っていたため、切り捨てられることはなかった。
一撃で仕留めようとしていた、姉様はその状況に驚いていた。しかし、姉様が驚いている隙を逃すほど、刹那は甘くなかった。
「しまっ!?」キンッ
「ふっ!」ゲシッ
「キャアッ」ツルッ
「これでも、まだやるかの」ピト
刹那は姉様の顔面に金属バット?を振るった。しかし、それに対し、姉様はすぐさま刀で金属バット?を払ったが、その金属バット?は囮だった。刹那は無理に金属バット?を払った姉様の崩れたバランスの身体の脚を自分の脚でかけ転ばした。そして、尻餅をついた姉様の首筋に金属バット?を添えたのだった。
「まだ、やるというのであればこのまま気絶させる。しかし、やらないというならばここで終わりじゃ。さて、御主はどちらを選ぶのじゃろうな?」

「くっ！しかし、このままじゃ蓮華を救えない!!」
（姉様だからそれは誤解です！）
「だから、姉様、人の話しを聴いて！全て姉様の誤解なの！」
「あなたはこいつに、騙されてるのよ！蓮華!!」
（なんで姉様は私の話しすら聴かないのよ!?）
「だ・か・ら～ひ・と・の・は・な・し・をき～け～この馬鹿姉様があっ!!」ブンッ
「ひぎっ!?!?」バギャッ
　私の話しをなかなか聴かない姉様に対して、苛立った私は、姉様の左頬に右ストレートを決めてしまい、結局姉様を気絶させてしまった。
「」キュ～
（やっちゃったぁ！どうしよ！）アセアセ
「おいおい、結局気絶させてしまってどうするのじゃ!?」
「あっ！ごめんなさい」ショボーン
（あぁ刹那に怒られてしまったわ！）ショボーン
　そのあと、姉様が目が覚めるまで待ち、目が覚めてからは、これまでの全ての事情を話した。
「そう、……私の誤解だったのね。刹那さん、ごめんなさい」

「いや、わしも久しぶりの血が滾る戦ができたから満足じゃ！それと、一応もう一度名乗るが、わしは、北条刹那８歳じゃ」
「私も自己紹介するわね！姓名は孫策、字は伯符、真名は雪蓮、１０歳よ！でもまだ、蓮華との仲を認めたわけじゃないからね！」
（なんで、姉様に認められなければならないのよ!!）
「何故ですか!?姉様!?」
「だって～、私も刹那が気に入っちゃったんだもん」
（いきなり横入りなんてふざけないで!!）
「何が！気に入っちゃったんだもんですか!!刹那は私のです。姉様であろうと渡す気はありませんよ！」
「あら？蓮華あなた、姉である私に喧嘩売るの？だったらいいわ！買ってあげる!!」
（姉様であろうと刹那のことが関わるならやってやるわよ!!）
「刹那は私のことが、好きなんです！姉様のような年増には刹那が好きになるはずがありませんよ!!」
「ムキーッ！実の姉に年増だなんて！というか私あなた達よりも、年上でもまだ、１０歳よ!!」
「ねえ刹那？あなた、私のことが好きなんでしょ！ここではっきり姉様の前で言って

ちょうだい!!」
（お願い！私を選んで！）
「あら？私のことはどうかしら？蓮華よりも先に大人の身体つきになるわよ！」
「「さあ！どっちを選ぶの!!」」
「わしにとって、蓮華が一番これは、変わりようはない。しかし、雪蓮も選ぶと言うのはやっぱりなしかのお？」
（私のことを選んでくれたわ！でもそうね。姉様を別に私も悲しませたいわけじゃないしね。私も少しは譲ってあげるべきよね！）
「まあ、私が一番っていうのなら、姉様だしいいわよ！」
「私もまあ、選んでもらえるのならいいわ！」
「すまない、ひどいことを二人に言っていることは、わかっとる。しかし、どちらかだけを選んでもう一人のほうを悲しませなくはないのじゃ」
「それじゃあ、御母様達にも刹那のことを伝えるために早く下⊠国に行きましょ？ねえ刹那!!」
（あぁ御母様達に早く伝えなくっちゃ！）
「もう、蓮華ったら、でもそれもそうね！行きましょうか？刹那！」
「なんかもう、わし、今の時点で緊張で腹が痛くなってきたのだが！」ダラダラ

そうして、私と姉様に連れられ刹那は、下⊠国に向かったのだった。

第九話

～孫策ｓｉｄｅ　～

私はこの日、初めて妹を失いかけた。

その日私達は、庭で模擬試合をしていた。そして、それは突然の出来事だった。

「伝令っ！東門にて、東門付近にて、商人が賊達に襲われたもよう！」

「街の近くで襲撃ですって！この街も舐められたものですね！兵達を直ちに編成させ、その賊達を探しだし、誰の街の近くで襲撃したか思い知らせてやりなさい!!」

私の母、孫堅は、伝令を聴き、すぐさまその伝令の兵に命令した。しかし、伝令には、まだ続きがあった。

「いえ、このあとの話しが重要です！東門の門番の話しでは、蓮華様に似た人もその商人の荷台にいたもよう！そして、その人物は、賊を２０人以上殺したところ、体力が尽き、賊達に捕まったようです。ほぼ蓮華様と間違いないと思われます。」

「ならば、尚更早くに準備を終え賊達を、探しだし皆殺しにしなさい!!」

「御母様、それでは時間がかかりすぎます！それに、それまでに蓮華の身に何かあっては遅すぎます！」

「ならば、どうするというのですか!?」
「私が、先に馬に乗り向かいます！御母様は、５０人程用意し、この街の近くの山に向かわせてください！」
「あなた程の腕ならそうそう賊にはやられないでしょう！しかし、何故あの山なのですか？それは確実なわけではないでしょ!?」
「この辺でそれなりの賊が隠れるにはあの山ぐらいしかありません。また雨などを凌ぐにも洞穴等でしょうからほぼ確実に見つけられると思います」
「そう、ならば時間が惜しいですね！それならば直ちに蓮華を救出に行きなさい！雪蓮！」
「はっ！」
　そうして、私は馬に乗り蓮華の救出に急いで向かった。
（どうか、どうか、無事でいてちょうだい蓮華！）
　～数十分後～
（ちっ！ここも外れか！急がないと蓮華が危ないのに！それに、雨が降りそうな天気になり始めたはね。雨が降って体力が奪われた状態で賊と戦うのはさすがに、と厭いわ！ならば、後は山の頂上付近しかないわね！）
　～さらに数十分後～

（やっと見つけたわ！この洞穴の中に蓮華がいるはず！）
「蓮華大丈夫!?」
「っっっ!?!?!」
（これはどういう状況なの!?賊は皆死んでるし、賊の死に方も多種多様で、一人の人間により殺されたとは思えない。ただここにいる二人は武器はどちらも刀だからミンチ状態になっているものや頭などを射ぬかれているのは説明できない。そうするとやっぱりここにはこの二人以外の第三者がいたことになるわ）
「えっ!?姉様!?」
「姉様!?」
（それに、蓮華の隣にいる男の子は別段強そうにはみえないわね。刀傷は蓮華がやったものとしてあの男の子は何をやったのかしら?もしかしたら、ただ見ていただけかもしれないわね！）
「ええ、でもなんで姉様完全武装しているのかしら?」
「いやいや！完全に御主の為だろうに!?御主先程まで、賊達に捕まっていたじゃろ！もう忘れたのかや!!
」
「…あっ！……そうだったわね。忘れてたわ」

（この妹はなんで賊に襲われたことを忘れてるのよ！それにしても男の子との距離が近いわね。それ以上近いと接吻しちゃいそうな距離じゃない！でも蓮華が動こうとしないことから……まさか、そいつに何か弱味を握られてるんじゃ!?そ、そうよ、そうに違いないわ！それなら早く蓮華を助けなくちゃっ!!）混乱

「それと御主の姉、わしのこと、何故か親の敵のように見てくる・・いや、睨んでくるんじゃが、わし何かしたかの？」

「知らないわよ！それともう、私の真名は教えたんだから、御主じゃなくて蓮華って呼びなさいよ!!」

「それもそうじゃな！蓮華、このあとのことは、どうするつもりかの？」

「なっ！蓮華っあなた！そいつに真名まで教えているの!?」

（そうそう、人に真名を教える子じゃないのに！やっぱり何か脅されているのね！）

「ええそうよ！姉様！何より私この人、刹那の妻になりたいもの♪接吻もしちゃったし♪」

「「つ、妻ーー!?」」

（つ、妻ってどういうことよ!?ってさっき接吻までしているとかも言ってたわよねー！もう何がどうなっているのよ！）

「何刹那まで驚いてるのよ？何？私と接吻しときながら結婚はしたくないの!?」

「いや別にそういうわけじゃないのじゃが。さっき恋人になったばかりなのに、もう結婚の話しなったから驚いただけじゃ。なにより、わしらまだ、８歳じゃぞ！」
「あ、あの、蓮華に、男友達すらいない、蓮華に恋人!?ましてや妻ー!?蓮華っあなた！そいつに何か弱味を握られているんでしょ?!そうでもなきゃ、いきなり蓮華に恋人ができるはずがないもの！大丈夫よ、蓮華！とっととそいつをぶっ殺して助けてあげるからね!!」
「なんかもうわしの話し、絶対に聴いてもらえぬだろ?この状況」
「ちょっ、ちょっと待ってよ姉様！私、刹那に助けてもらったのよ！それに弱味なんて握られてないわよ!!」
「そんなの嘘よ！そいつを別に庇う必要なんてないわよ。大丈夫私が助けてあげるから、蓮華は安心してなさい。」
「どうやら、実の妹の話しもしっかり聴くつもりはなさそうじゃな」
「ごめんなさい、刹那。姉様、私のせいで暴走しちゃってるみたいなの」
「まあ、仕方ないじゃろ。実の妹に何かあったのではと、慌てていることはよくわかるからの」
「孫策様！部隊５０人全て揃いました。次の指示を！」
（やっと揃ったのね。それなら早く行動に移してしまいしょう！）

「わかったわ。そこにいる男をとっとと殺して蓮華を連れ戻し、下⊠国に戻るわよ！」
「「「「はははっーー」」」」
「どうやら、話して解決する問題じゃ、なくなったようじゃな」
「ごめんなさい！でもどうか！皆を殺さないで!!」
「そのようなことは、わかっておるわ。しっかし、これは少しばかり骨がおれそうじゃな！」
　そうして、そいつは刀から謎の形に変形させた。
（何……今…の刀から何か？に変わった!?）
「刹那……何……それ？」
「うん？…あぁこれは、非殺傷武器に変形させただけのことよ」
「刹那が持ってる武器？って変わってるわね」
「まあ、なにかと便利じゃぞ。これっと！きたようじゃな。とりあえず、大丈夫じゃとは思うが、念のため後ろに下がっておるのじゃ！」
「それじゃあ、姉様と皆のこと、頼むわね」
「任せておけい！気絶程度ですませておくわい。殺しはせんし、殺されもせんわ！」
（こっちは、殺す気でやっているのに手加減するですって!!）
「っっ!!舐めやがって!!皆かかりなさい！」

そうして、そいつとの戦いが始まった。
しかし、戦いが始まってからは、驚きの連続だった！
（なっ！賊のために用意したとはいえ、何故こいつに、ここまで一方的にこちらがやられているの!?）
そしてそいつに、全ての兵が気絶させられるのにそこまで時間はかからなかった。
（だが！私はそうは、いかないわよ！でもその前に）
「確かにあなた強いわね。これなら、その辺の賊なら問題は、ないでしょう。先程のことは、謝ります。ですが！あなたが蓮華を脅していることには、なんの変わりはありません！ですから死んでください！」
（ええ、あんたが強いのは認めるわよ！でもねあんたを殺すことには変わりはない！）
そして私は、刀を構えた。そして、あいつも武器を構えた。その瞬時から周りの空気がピリピリとし始めた。
（相対したからこそ、わかるけどこいつ、強いわね。でも蓮華のために負けられない！）
そうして、私とあいつは、少しの間、探りあいをしたあと、ほぼ同時に相手へと動いた。しかし、あいつのほうが、ほんの僅かだが、早かった。私は初手でほぼ決めるつもりで動いたがそれは、防がれてしまった。
キャキィンギギ！

普通なら武器ごと、こいつを切り捨てられるところだったが、武器が思っていたよりも固かったためにこいつを切り捨てられることができなかった。
一撃で仕留めようとしていた、私はそのことに戸惑ってしまった。しかし、私が戸惑っている隙を逃すほど、こいつは甘くなかった。
「しまっ!?」キンッ
「ふっ!」ゲシッ
「キャアッ」ツルッ
「これでも、まだやるかの」ピト
こいつは私の顔面に武器をを振るってきた。しかし、それに対し、私はすぐさま刀でこいつの武器をを払ったが、その武器はは囮だった。こいつは無理に武器をを払った私の崩れたバランスの身体の脚に自分の脚でひっかけ転ばしたのだ。そして、尻餅をついた私の首筋に武器を添えたのだった。
「まだ、やるというのであればこのまま気絶させる。しかし、やらないというならばここで終わりじゃ。さて、御主はどちらを選ぶのじゃろうな?」
「くっ!しかし、このままじゃ蓮華を救えない!!」
「だから、姉様、人の話しを聴いて!全て姉様の誤解なの!」
(こいつに、騙されている妹の話しが聴けるわけないでしょ!?)

「あなたはこいつに、騙されてるのよ！蓮華!!」
「だ・か・ら～ひ・と・の・は・な・し・をき～け～この馬鹿姉様があっ!!」ブンッ
「ひぎっ?!?!?!!」バギャッ
　私との会話に苛立った蓮華が私の左頬に右ストレートを決めてしまい、結局私は気絶させてしまった。
　そのあと、私が目が覚めてからは、これまでの全ての事情を聴いた。
「そう、……私の誤解だったのね。刹那さん、ごめんなさい」
（あぁ、私はとんでもない誤解をしていたのね。謝っても謝り足りないわ！それにしても、刹那さん、こんなに強いなんて蓮華もいい人を見つけたのね。いいわね～。私も欲しいわ！私よりも、強い子なんて下の年にいたなんて！同い年ですらいないのに!!）
「いや、わしも久しぶりの血が滾る戦ができたから満足じゃ！それと、一応もう一度名乗るが、わしは、北条刹那８歳じゃ」
「私も自己紹介するわね！姓名は孫策、字は伯符、真名は雪蓮、１０歳よ！でもまだ、蓮華との仲を認めたわけじゃないからね！」
「何故ですか?!姉様!?」
「だって～、私も刹那が気に入っちゃったんだもん」
「何が！気に入っちゃったんだもんですか!!刹那は私のです。姉様であろうと渡す気は

ありませんよ！」
「あら？蓮華あなた、姉である私に喧嘩売るの？だったらいいわ！買ってあげる!!」
「刹那は私のことが、好きなんです！姉様のような年増には刹那が好きになるはずがありませんよ!!」
（なっ！この妹は、なんてことを言うのよ！）
「ムキーッ！実の姉に年増だなんて！というか私あなた達よりも、年上でもまだ、１０歳よ!!」
「ねえ刹那？あなた、私のことが好きなんでしょ！ここではっきり姉様の前で言ってちょうだい!!」
「あら？私のことはどうかしら？蓮華よりも先に大人の身体つきになるわよ！」
「「さあ！どっちを選ぶの!!」」
「わしにとって、蓮華が一番これは、変わりようはない。しかし、雪蓮も選ぶと言うのはやっぱりなしかのお？」
「まあ、私が一番っていうのなら、姉様だしいいわよ！」
（やっぱり、蓮華のことを刹那は愛しているのね。でも、私を悲しませたくないからって、蓮華にも負けずに意見をしっかりいえるのか～。やっぱりいい人ね。一番でなくても選んでもらえるならなんでもいいわ！）

「私もまあ、選んでもらえるのならいいわ！」
「すまない、ひどいことを二人に言っていることは、わかっとる。しかし、どちらかだけを選んでもう一人のほうを悲しませなくはないのじゃ」
「それじゃあ、御母様達にも刹那のことを伝えるために早く下⊠国に行きましょ？ねえ刹那!!」
「もう、蓮華ったら、でもそれもそうね！行きましょうか？刹那！」
「なんかもう、わし、今の時点で緊張で腹が痛くなってきたのだが！」ダラダラ
　そうして、蓮華と私に連れられ刹那は、下⊠国にある蓮華達の家がある街に向かったのだった。

第十話

～刹那（魏）ｓｉｄｅ～

俺達は、いまだに華琳の家がある沛国の街まで歩いていた。

「そういえば刹那？あなた真名がなかったわよね？」

「ああ、そうだが、それがどうしたんだ？」

（これは、華琳、俺に真名を与えるつもりかもな！）

俺はここまでの道で華琳と喋っていて何となくだが、華琳の言いたいことがわかるようになっていた。

まあ、まだ大概外れていることのが多いのだが。いつか言いたいことが、全てわかるようになりたいものだ！

「ええ、私の御母様達に刹那のことを教えるのに真名がないといろいろ不都合でしょ？刹那にとって」

そうなのだ。俺はできるだけ俺の前世や未来から来たことなどを話さないようにして欲しいと頼んであったのだ。

「そうだよ。俺達の今後の関係や俺のことを話して、もしも大人達が、俺のことを危ない

子と、判断してしまったら華琳と一緒にいられない可能性があるからな。それは、華琳も嫌だろ？」
「そんなの当たり前でしょ！私が、ここまで愛した人は過去でも、そして、未来においても刹那、あなた一人しかいないのだから！私は刹那さえ、いれば何もいらないわ！だからもし、私の家族が反対をするというのなら私から家を出て行ってやる!!」
（俺のために、ここまで言ってくれるのか。俺、華琳から愛されてるな～。その分俺も華琳のことを愛してやりたい！でもちょっと今の華琳暴走してるな～。でもそんな、華琳も可愛いよ～）ブレーキのレバーどころかブレーキの部分がなくなっています。
　もはや華琳よりも刹那（魏）の方が暴走してしまっていた。
「流石に家族まで捨てるなよ！とりあえず、そうならないように対策を考えてたんだよな」
「そうよ！でも、もし本当に話が失敗したら、容赦なく実行するから！もしも私に家族を失わせたくないのなら頑張らなくちゃね♪」
「これは、責任重大だな。でも、華琳も協力はしてくれよ？」
「それは、勿論よ！それで、話は戻すけど今、刹那の真名を考えない？」
「今ってここでか？そりゃあどこでもいいけどさ！」
「なら、この話しは決まりね！それでは、どうしましょうか？」

「そういえば、ここの世界でも四神獣はいるとされているのか？」
「ええ、確かにいると、されてるけどそれがどうかしたの？」
「いや、ちょっと気になったことがあってな、中央にいるのは、麒麟、黄龍、鳳凰、どれだ？」
「どれもがいるとはされているけど、一番有力なのは鳳凰かしら？」
「そうか、なら鳳凰の鳳の字を使って欲しいな！」
「何か刹那に考えがあるのね？」
「そうだ」
「なら、真名はそうね、鳳に私から一字の華を取って華鳳ってどうかしら？」
「良い名だ！なら、ここでもう一度、華琳に名乗ろう。姓名は北条、字は刹那、真名は華鳳、全ては御身のために！」
「ありがとう、確かに刹那の真名は預かったわ！それと鳳の字を使った真名の意味も教えてくれるかしら？」
「勿論だ！何気に華琳が自分の字も使ってくれて、助かったが、鳳凰は中心にいることから家やその人自体を守る意味がある。だから華琳を守るって意味が俺の真名になったわけだよ」
　そして、華琳の顔を見ると、華琳は驚いたような表情で固まってしまっていた。

～刹那（魏）ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

◆◇◆◇

～曹操ｓｉｄｅ～

私は、刹那がいえ、華鳳が言っている意味が一瞬何を言っているのかわからず固まってしまい、意味がわかるとまた固まってしまっていた。

私は、何となく華鳳に私の名を入れたいと思い入れただけだったが、刹那の真名がとてつもない意味になってしまった。

華鳳はきっと何かしらを守るという意味で鳳の字を使いたかっただけだと思うがこれでは、まるで

「……真名を華鳳に名付けたのは私なのだから、これじゃあ私が、独占欲の強い女みたいじゃない」プンプン

「ん?それじゃあ俺に対して独占欲はないの?」笑顔

「もう～華鳳のいじわる～」クスッ

華鳳はわざとらしく私に尋ねてきた。でもそれもからかって、言ってきていることがよくわかっていたので、逆に私も華鳳に甘えることにした。

「でもこれで、私また、華鳳の初めてをもらうことができたのかしら?私は、できるだけあなたの初めてをもらいたわね♪」

「やっぱり、なかなか独占欲が強いじゃないか！でもそうだな。俺の初めてを華琳にできるだけ、あげるよ。その代わり俺もできるだけ華琳の初めてが欲しいな？くれる？」
クビカシゲ
　あぁ、たまにでてくる華鳳の甘えは可愛いわね。何でもしてあげたくなっちゃう！ちょっとした母性でも働いているのかしら？まあ、何だっていいわ、私と華鳳が幸せならばね♪
「あなたになら、わたしの物なら何だってあげるわよ」
「そっか、嬉しいよ！」
「このあとの予定を決めて動きましょう」
「そうだな、とりあえずこの後はどう動こうか？」
「一先ず、私の家族と話し合いね！その話し内容によって行動が変わってくるわね」
「そうか、そういえば華琳の家族構成はどうなっているんだ？」
「あら？てっきり私話してたと思ってたわ！じゃあ教えるわね」
「お願いするよ」
「まず、今曹家の当主である御祖母様、次期当主の御母様よ」
「祖父と父親はどうしたんだ？」
「私が、産まれる前に起きた賊との抗争で亡くなったらしいわ。でも私は、その存在を

知っていても、見たことはないから実感ないのよ」
「そうなのか。すまない、話しずらいことを聞いてしまった」
「別にかまわないわ。私達は未来に生きているのだから過去ばかり振り返っているわけにはいかないの！」
「本当にすまない。ん？あのうっすらと、見えるのが門か？でかいな～」
「ええ、そうよ。さっきも言ったけど前に賊との抗争があってからはより厳重に警備されるようになったのよ！ただそのせいで、私は、油断してしまって今回、賊の襲撃に会ったのだけれども。でもそういうこともあって華鳳に逢えたのだから私は、後悔はしないわ！」
「俺も華琳と、逢う切っ掛けをつくってくれた、賊には感謝はするが、華琳を襲ったことは許しはしない。それと、もう油断だけはするなよな！」
「わかってるわ、……あっ！もし私の家で居候が決まったら、武術の稽古を私につけてちょうだい！私は、強くなりたいの。いいでしょ？」
「かまわないよ、俺自身の稽古にもなるしな！ただ、華琳が使ってるその大鎌をしっかり教えられるかが心配だな！」
「闘うための基礎は変わらないはずだから大丈夫のはずよ」
「じゃあとりあえず、堅苦しい話しはここまでにしてここからはのんびりと行かないか

？」

「それもそうね！こうしながらのんびりと行きましょ！」ギュッ

そうして、私は、華鳳の左腕にしがみついて華鳳に甘えながらのんびりと門まで歩いた。

～曹操ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十一話

～刹那（蜀）ｓｉｄｅ～

「ここが、桃香の家ですか？」

「はい！何か変ですか？」

「いえ、そうではなく、庭？が広い家だなと思ったのと庭？にある家より大きい小屋？はなんですか？」

「そうかな？まあ、私の家はいろいろやってるから、そのせいかもしれないね。それと小屋には私が、愛情込めて育て上げた子達がいる場所です！」

今僕は、僕の目の前にある桃香の家の庭？にある小屋？を見て驚いていた。

（庭？に畑ならわかりますが小屋？に蚕？や鶏？を飼っているのは言葉が出ませんね！まあ、それだけなら良かったのですが）チラッ

そう、僕が最も驚いたことは、今僕がチラ見している小型？の龍？蛇？と思わしき生物だった。

（何ですか!?この生物は!?この世界には、こんなのもいるのですか！）

拝啓、家族へ…僕が思っていた以上にこの世界はファンタジーでした。

いや、でも蚕?も鶏?も僕が知っている生物ではなかった。
(蚕?の形も頭に角があって、そこに電気らしきものを帯びてますし、鶏?も尻尾が蛇で、その蛇は焔を吐いてますし、その鶏?の背中辺りも甲羅で、覆われてますよ!そしてその二匹は、喧嘩?なのかな?まあ、争ってます)
「芋電氣乃助も鶏焔蛇亀も喧嘩ないの!」
(いもでんきのすけとけいえんじゃき?!桃香、長いうえに呼びづらい名前ってあまりネーミングセンスないのかもしれませんね)
「もう!堕邪蛇丸も見てないで二人を止めてよね!」
(一応蛇?なんですね。それにしても、だじゃじゃまるも凄く噛みそうな名前ですね!そして、芋電氣乃助と鶏焔蛇亀は人扱いですか!?これは、堕邪蛇丸も人扱いしてそうですね)
「ところで、三匹、いえ、三人はどこで見つけたのですか?」
「え~と、芋電氣乃助は、私が初めて蚕を飼育してたらこんな感じに成長してたよ?」
「いや、流石にこの大きさはないでしょう!?芋電氣乃助は、角を合わせて2メートル近いですよ!」
「でもそれを言ったら鶏焔蛇亀は3メートル近いし、堕邪蛇丸も3メートル以上はあるよ?流石に4メートルは、ないけどさ」

（もうちょっとした怪獣ですよ！そして、この里はそれに対して気にしていないというがまた凄いですね）
「これに関して家族の方はなんと言っているのですか？」
「え？立派になったね！って喜んでたよ？」
（桃香の家族自体が感覚が規格外ですよ）
「あと芋電氣乃助のきの字が氣と聞こえるのですが？」
「うん、この子、氣を使ってるんだって！お祖父ちゃんが言ってたから！」
「マジですか!?本当にファンタジーですね!!」
「ファンタジー？」
「いえ、気にしないでください」
　今日の僕の驚きは桃香に逢ってからが、本番だったらしい。
「堕邪蛇丸はどのような？」
「堕邪蛇丸は鶏の卵を3年間温めてたら孵化したときにこの姿になって、すくすく育ったよ！」
（もうなんでもありですね。はぁ～）
「あっ！とりあえず家にあがってよ！お祖父ちゃん達に紹介するからさ！私は、御主人様をお祖父ちゃん達に紹介するから芋電氣乃助も鶏焔蛇亀も堕邪蛇丸もおとなしくし

てよ！」
「キュッキュー」「ピィー」「シャーッ」
「芋電氣乃助も鳴くのですね！」
そうして、僕は桃香の家に入った。そして、中ではなんかもう桃香の御家族が揃って待っていた。どうやら桃香が、あいつらの説明をしていた時点でもう待っていたらしい。とても申し訳なかった。
桃香の御家族を紹介されましたがとても優しい家族でした。そのうえ僕を義息子の様に扱ってくださり、この家に居候することも決まりました。ただ真名がないことは、驚かれましたけど。
〜その日の夜〜
今の僕と桃香は現状が理解できないでいた。
御家族から風呂入ってこいと僕と桃香は風呂場に同時に放り込まれていた。桃香に聞いたところやはり、この時代そうそう風呂には入れないらしい。そのため同時に放り込まれたらしいことを恥ずかしながら桃香が教えてくれた。しかし、聴きたいことが終わったあと僕が裸の桃香を真剣に見ていたみたいになってしまい、僕も恥ずかしかった。
まあ、まだ僕達は小学生の年齢なので意識するほど体の違いがあるわけではないのだ

けれども。しかし、僕達は好きな相手ということもあり、意識してしまっていた。
「あぁ～、後ろ向いてるから先に洗ってください」カオマッカ
「うん、じゃあ先に洗わせてもらうね」カオマッカ
～数分後～
「洗い終わったから、次洗っていいよ！」カオマッカ
「わかりました。じゃあ次は後ろ向いてもらってもいいかな？」カオマッカ
「わかったよ。あとのぼせちゃうから、早めにお願いね！」カオマッカ
「ええ、男なのでそこまで時間はかかりませんよ」カオマッカ
そして、全てを終えた僕らは明日に備えて寝ることになった。しかし、僕が来たからっといって部屋が空くわけもなく、桃香の部屋で一緒に寝ることになったが、またもや、意識してしまい、なかなか寝付くことができずにいた。そのため、僕達は次の日は寝不足気味だった。
～翌日～
今日は、昨日のこともあり、僕の真名を考えることになった。しかし、僕も桃香もネーミングセンスがひどいためなかなか決まらずにいた。
「どうしますか？なかなか思いつきませんが」
「何か、一文字でも決まれば、決めやすそうなのにな～。御主人様、何かありませんか？」

「何か一文字と言われましても」
　その時僕には山の方に飛ぶ鶴が見えた。
（鶴ですか、確か鶴は日本では、縁起の良い動物でしたね！鶴の字を使いますか）
「鶴の字を使ってみませんか？」
「鶴ですか、私は何も思いつきませんし、私の一文字の桃をいれて桃鶴とはどうでしょうか？」
「ええ、良い名だと思います。それでは、桃香に僕の名を預けましょう！姓名は北条、字は刹那、真名は桃鶴、これからの僕の人生は、桃香と共に！」
「はい！これからは共に人生を歩んで行きましょう!!」
　こうして今日、僕の真名が決まった。
　～刹那（蜀）ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～
◆◇◆◆
　～劉備ｓｉｄｅ～
「ここが、桃香の家ですか？」
「はい！何か変ですか？」
「いえ、そうではなく、庭？が広い家だなと思ったのと庭？にある家より大きい小屋？はなんですか？」

「そうかな？まあ、私の家はいろいろやってるから、そのせいかもしれないね。それと小屋には私が、愛情込めて育て上げた子達がいる場所です！」

何故か、御主人様は、御主人様の目の前にある私の家の庭にある小屋の中を見て驚いていた。

小屋の中を見ていることからしてどうやら、芋電氣乃助と鶏焔蛇亀、堕邪蛇丸を見て驚いているようだ。

（それにしてもまた、二人は喧嘩してるし！この二人が喧嘩するときは、大抵私に甘えたい時でどちらが先に甘えるかで喧嘩するんだよね。まあ、そういうところも可愛いんだけどね♪）

「芋電氣乃助も鶏焔蛇亀も喧嘩ないの！」

「もう！堕邪蛇丸も見てないで二人を止めてよね！」

（堕邪蛇丸は、極力動きたがらないんだよね～。だから私に甘えたい時は二人が喧嘩して疲れたところを見計らって私のところに来るんだ。まあ、動く時は動くんだけど、実際今、二人を止めてるし）

「ところで、三匹、いえ、三人はどこで見つけたのですか？」

「え～と、芋電氣乃助は、私が初めて蚕を飼育してたらこんな感じに成長してたよ？」

（育て方は、他のと変わらないから、愛情の差なのかな？）

「いや、流石にこの大きさはないでしょう!?芋電氣乃助は、角を合わせて2メートル近いですよ!」
（立派になったよね～）
「でもそれを言ったら鶏焔蛇亀は3メートル近いし、堕邪蛇丸も3メートル以上はあるよ?流石に4メートルは、ないけどさ」
（皆、ほんと大きくなったよ。特に鶏焔蛇亀は、ひよこの時から育った芋電氣乃助と一緒に入れといたら今みたいな姿になってて、流石に私達も少し驚いちゃったんだよね。でもひよこの時から比べるとかっこよくなったな）
　それはきっと芋電氣乃助に対して恐れて対抗するためだと思われるが、この時、誰一人としてその事に気付く者はいなかった。
「これに関して家族の方はなんと言っているのですか?」
「え?立派になったね!って喜んでたよ?」
（なんか御主人様、若干呆れてる?）
「あと芋電氣乃助のきの字が氣と聞こえるのですが?」
「うん、この子、氣を使ってるんだって!お祖父ちゃんが言ってたから!」
「マジですか!?本当にファンタジーですね!!」
「ファンタジー?」

「いえ、気にしないでください」
「堕邪蛇丸はどのような？」
「堕邪蛇丸は鶏の卵を3年間温めてたら孵化したときにこの姿になって、すくすく育ったよ！」
（3年間も産まれなかったから最初は皆慌てたけど卵の中で動いている音は聞こえてからは、死んでいないことがわかって安心したんだよね）
「あっ！とりあえず家にあがってよ！お祖父ちゃん達に紹介するからさ！私は、御主人様をお祖父ちゃん達に紹介するから芋電氣乃助も鶏焔蛇亀も堕邪蛇丸もおとなしくしててよ！」
「キュッキュー」「ピィー」「シャーッ」
「芋電氣乃助も鳴くのですね！」
何故か芋電氣乃助が鳴くことに御主人様は驚いていた。
そうして、私は私の家に御主人様を入れた。そして、中ではもう私の家族が揃って待っていた。どうやら私が、あの子達の説明をしていた時点でもう待っていたらしい。
家族に御主人様を紹介したらとても優しく御主人様に接してくれた。ただ御主人様を紹介したとき、私のお婿さんになることを伝えたら、とてもからかわれた。でも反対されたわけではないのでよかった。そして、御主人様は、この家に居候することも決ま

りました。ただ御主人様に真名がないことは、驚かれたけど。あっ！説明し忘れてた！

～その日の夜～

今の私と御主人様は現状が理解できないでいた。

お祖父ちゃんから風呂入ってこいと私と御主人様は風呂場に同時に放り込まれていた。御主人様が私に今の時代のお風呂のことについて聞いてきたところ、未来では毎日お風呂に入るらしい。その話しを御主人様から聞いた時はとても羨ましかった。そして、御主人様に教えているとき、とても恥ずかしかったよ～。だって御主人様、私達が裸でいることを忘れて真剣に私の方見て聴いてるんだもん！まあ、聴きたいことが終わったあとは自覚をしたのか御主人様も恥ずかしがってたけど。

まあ、まだ私達は見た目てきに体の違いがあるわけではないんだけどね。でも私達は好きな相手ということもあり、意識しちゃった。

「あぁ～、後ろ向いてるから先に洗ってください」カオマッカ

先に譲ってくれる辺り、御主人様の優しさを感じた。

「うん、じゃあ先に洗わせてもらうね」カオマッカ

～数分後～

「洗い終わったから、次洗っていいよ！」カオマッカ

「わかりました。じゃあ次は後ろ向いてもらってもいいかな？」カオマッカ

「わかったよ。あとのぼせちゃうから、早めにお願いね！」カオマッカ
「ええ、男なのでそこまで時間はかかりませんよ」カオマッカ
（へ～！そうなんだ～！）
　そして、全てを終えた私達は明日に備えて寝ることになった。しかし、御主人様が来たからっといって部屋が空くわけもなく、これは、私の考えがしっかりしていなかったためです。そのため私の部屋で一緒に寝ることになりましたが、また、御主人様を意識してしまい、なかなか寝付けませんでした。そのため、私達は次の日は寝不足気味でした。
　～翌日～
　今日は、昨日のこともあり、御主人様の真名を考えることになりました。しかし、私も御主人様もネーミングセンス？というものがないらしく、なかなか決まらずにいました。
「どうしますか？なかなか思いつきませんが」
「何か、一文字でも決まれば、決めやすそうなのにな～。御主人様、何かありませんか？」
「何か一文字と言われましても」
　その時御主人様は山の方を見ていた。
（山の方を見てるけど、御主人様は何を見てるんだろう？）

「鶴の字を使ってみませんか？」
「鶴ですか、私は何も思いつきませんし、私の一文字の桃をいれて桃鶴とはどうでしょうか？」
（私のことを永遠に覚えていて欲しいですしね♪）
「ええ、良い名だと思います。それでは、桃香に僕の名を預けましょう！姓名は北条、字は刹那、真名は桃鶴、これからの僕の人生は、桃香と共に！」
「はい！これからは共に人生を歩んで行きましょう!!」
　こうして今日、御主人様の真名が決まった。
　～劉備ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十二話

～刹那（呉）ｓｉｄｅ～

わしたちはまだ、下⊠国にある蓮華達の家がある街に向かっている途中だった。

「そういえば、御母様に刹那を紹介するのに真名はあったほうがいいわね」

「それもそうですね！なら姉様、今ここで考えながら向かいましょう！刹那も良いわよね？」

「勿論じゃよ！じゃが、どのような真名にしようかのう？」

「それよね。本来真名は親から貰うものだから私達も考えたことすらないのよね」

「姉様、どのみち愛する人は見つかったのですから、そんなのは時間の問題ですよ！」

「それもそうね！なら将来のためにも、ちょっとしたお試しとして考えましょうか！」

「一応それ、わし一生使うのじゃが」困り

「それじゃ、皆で考えましょうか！」

「まず絶対に入れたい一文字を決めましょう！」

「ふむ、何がいいかのう」

「といっても、本当は私達で、一文字は決めているんです。ですからあとは刹那から許し

があれば一文字は確定なのよ」
「それは何じゃ？」
「「私達に共通する文字、すなわち、蓮よ！」」
「まあ、いいじゃろう。皆で共通の一文字を入れるのも趣があるしの」
「それじゃあ、蓮の一文字は決定ね！そうすると蓮に合う一文字は何があるかしら？姉様何か思いつきませんか？」
「そうね、あっ！」
「何か思いつきましたか？姉様」
「ええ、刹那、あなたがいた場所で何か縁起の良い漢字はなかったかしら？」
「一応何個かはあるが何故じゃあ？」
「それはね、私達の一族は何故か皆短命なのよ、それは血の繋がらない婿でも例外ではないわ。ただ死因は様々なんだけどね」
「ほう、例えば？」
「まず私が、知る限りじゃあ、まず御父様は流行り病で亡くなったわ。そして、御母様の方の御祖母様は、賊との争いでやっぱり早くに亡くなったそうよ。御祖父様もさっき言った賊との争いで負った傷が原因で病で亡くなったわ。姉様は他に知ってる？」
「そうね、御母様の方の曾祖父様は確か幼い頃の御母様を助けるために亡くなり、曾祖母

様は、御祖母様を産むのに亡くなったはずだわ。」
「あれ？父親の祖父などはどうしたのじゃ？」
「孫家にいる男は皆婿なのよ。産まれてくる子供は皆、女ということね！」
「それは、それで凄いのう！まあ、その辺は遺伝子の問題じゃろうな」
「「遺伝子？」」
「まあ、わかりやすく言えば血筋じゃな！」
「えっと話しを戻すわね。そんなわけで私達も短命の可能性があるのよ。勿論刹那、あなたもよ。だから何か長生きできそうな縁起の良い言葉はないかしら？」
「わかったのじゃ！考えるから少し時間が欲しいのじゃ！」
「勿論良いわよ」
　～数十分後～
「思い付いたぞ！亀を使うのはどうじゃ？」
「何故亀なのかしら？」
「わしがいた国じゃあ、鶴は千年、亀は万年と言われておってのう。まあ、長生きということじゃろ。だからかのうどうじゃ？」
「姉様、私は良いと思うのですがどうですか？」
「わたしも良いと思うわ」

「それでは、決まりじゃな！では御主達にここでわしの真名を捧げようぞ！わしの姓名は北条、字は刹那、真名は蓮亀、御主達の折れぬ刃になりて全てを尽くそう！」

そして、わし達は下⊠国にある蓮華達の家がある街に着いた。

～刹那（呉）ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

◆◇◆◇

～孫権ｓｉｄｅ～

私達はやっと街に着くことができた。今日と言う一日が長く感じる。これは、私にとってたくさんの事があったからだろう。

「それでは、門を通してもらってもいいかしら？」

「はっ！どうぞお通りください！」

「そう、ありがとう。それじゃあ、蓮華、蓮亀行くわよ！」

今街を見ている蓮亀の反応をみてると、とても面白かった。今の街はそれなりに賑やかの時刻もあり、いろんな店から蓮亀は声をかけられていた。しかし、とてもいろんな店に入りたがりそうな蓮亀を引っ張って家に急いだ。

「もう！蓮亀、このあと私達の御母様と会っていただくのだから、店は話しが終わってからにしてちょうだい」

「それもそうじゃな。すまんかった。」

「そういえば、蓮亀、あなた私達とは話しをすることができるけど文字は読めたりするの？あなた、この国に来たことないでしょ？」
「ふむ、わしは来たことはないの。しかし、前世で戦時中に未来のこの辺で戦っておったから、前世の記憶で覚えておるのよ」
「へ～、何かと便利ねそれ」
「姉様、流石に蓮亀の前世までの話しを持ち出すのは不謹慎ですよ！」
「いや、かまわぬよ。それに今のわしの性格は前前世の物だしな！」
「ごめんなさい」
「でも姉様じゃないけど、そうなると、蓮亀はこの時代のこの国では文官でも武官でも、できそうね。蓮亀の将来は安泰ね！」
　そうして私は蓮亀の右腕に抱きついた。それを隣で見ていた姉様は、とても羨ましいそうにしていた。
「あっ！ずるいわよ、蓮華！蓮亀、私もしてもいいわよね！駄目なら泣くわよ」
　そうして姉様は蓮亀の左腕に抱きついた。
「かまわぬけれども、少し歩きづらいのう」
「「我慢してちょうだい!!!!」」
　そうしながら私達は、蓮亀に甘えながら御母様のいる家に向かった。

～孫権ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

◆◇◆◇

～孫策ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

「あら？私はあなたたちを心配して待っていたのに、私に見せつけながら帰って来るなんて、いい身分ね！ふざけているの？」ピキピキ

私達は、御母様に怒られていた。血管が浮き出るほど怒られるのは本当に久し振りだった。そのため私は冷や汗が出ているし、蓮華なんて泣いて顔が涙と鼻水でえらいことになっている。隣に蓮亀がいるのに、御母様のことで存在を忘れているわね。きっと。ただそのなかで蓮亀は平然とした顔で御母様を見ている。

「おかあしゃま～ごめんなしゃ～い。ヒック」ビエーン

「まだ産まれたばかりの小蓮もいるのだから心配させないでちょうだい。それと隣にいる男の子はどなた？」

そう言った御母様は蓮亀の方を向き睨み付けた。そして覇気を出しながら蓮亀を威圧をしていた。私も蓮華も御母様の覇気で身体が怯んでしまったが、やはり蓮亀は平然とした顔で御母様を見ていた。この時、私は蓮亀は私達よりも強いことを改めて実感した。

「へ～！この威圧にも耐えられるのね！娘達にしては、強い子を連れてきたわね」

「御義母様もお強いのですのう」
「あら？やっぱりわかる？なら話しが早いわ、私と模擬試合をしなさい」
「なっ！御母様、流石にそれはいきなりどうなのですか！」
「そうです。蓮亀も疲れているのだから、せめて時間をおいてください！」
　あら？蓮華は泣き止んだのね。そうよね。蓮亀はこちらに来てから一日も経ってないものね。疲れているはずだわ。
「大丈夫じゃよ。心配しなさるな」
「それもそうね！ならこれより2時間後より模擬試合を行う！それまでに準備をしておきなさい。武器はこちらで用意しておくわ。あと雪蓮、模擬試合には小蓮も連れて来なさい！小さいときから見せておくことに価値のある試合になると思うから。わかったわね？それでは、解散!!」
「「はっ！」」
　そうして蓮亀は、御母様と模擬試合することになった。
「蓮亀、御母様に勝てそう？」
「たぶん、大丈夫とは思うが油断は禁物じゃな」
「御母様の武器は刀よ。私達の武術の師でもあるわ」
「そうか、それは雪蓮よりも強いということじゃな？これは、心踊るような戦ができそう

じゃな！」ギラギラ

そう言った蓮亀は目をギラつかせて嬉しそうにしていた。

蓮亀の戦闘狂は健在だったらしい。しかし、その事に雪蓮も蓮華も気づいていなかった。その表情を見ているだけでも、うっとりとしていたからだ。こちらはこちらで重症だった。

そして、２時間もあっという間に経ち模擬試合が始まった。

～孫策ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

◆◇◆◇

～蓮亀ｓｉｄｅ～

そして、模擬試合が始まった。

「あなたに用意したのは木刀だけど良かったかしら？」

「大抵の武器は使えるので木刀でも問題ないのですよ！」

「そう、では始めるとしましょうか？雪蓮達はそこで小蓮を抱っこして座って見てなさい」

雪蓮達は蓮亀達から３０メートルは離れている場所から見ていた。

まず先に動いたのは孫堅だった。

「まずは小手調べよ！」

そして、木刀で殴られたら打撲どころか骨折をしそうな勢いで木刀を手先や横腹を狙うように振ってきた。しかし、それらは全て蓮亀の木刀で防ぎきってしまった。
「なかなかはやるようね！ならこの早さにはついてこれるかしら！」
先ほどと比べるのが馬鹿げているほどの早さで顔面やフェイントを入れてきたが、それも難なく防ぎきってみせた。そして、次は蓮亀から仕掛けた。
「今度はこちらから行かせてもらうのじゃよ」
笑顔でそう言いながら、孫堅に木刀を振った。しかし、早さは孫堅にも劣っていたが、しっかりと力が伝わる打ち方をしてきた。そのため身体に受けることはなかったが、手が痺れるような感じを受けてしまい、それを受けてからは孫堅は避けることに専念することにしたらしい。
「あなた本当に8歳なの？この私が打ち合うだけでも厳しいなんて、久し振りだわ」
「御義母様はお強いのですが、どうやら、力の逃が仕方が苦手な様子、だからこそ力で振ってくるのではなく、早さで勢いよく力を相手に伝え、自分にはその反動がないようにしてくることが最初の攻めでわかりましたのでのう。違いますかな？」
「ええ、その通りよ。これじゃあ私が稽古をつけられているようだわ。でもここからは本気で行きましょう？」
「わかりもうした」

～蓮亀ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

◆◇◆◇

～孫策ｓｉｄｅ～

そこからはもう、どちらから打ちに行っているのがわからないほどの早さで打ち合い始めてしまった。小蓮なんて、頭に?を浮かべていることがわかるほどなのだから、小蓮にはまず、もう見えていないのだろう。蓮華は必死に目を細め追い付こうと見ていたが途中から追い付いてはいないようだった。私は見えてはいるけれども、打ち合っている本人達よりは現状を理解しきれていないだろう。しかし、その打ち合いも今、蓮亀が御母様の首筋に木刀を添えて終わったようだ。

「これにてこの模擬試合は終わりでよろしいでしょうかな?」

「ここまでされて、負けを認めないわけにはいかないわよもう!」

御母様と蓮亀の身体の状態を見ると御母様には何もなさそうだけども、蓮亀は打撲で身体中が痣だらけだった。

「なんで御母様には何もないのに、逆に負けるようなことになっているの?」

この時のことを御母様と蓮亀に聞いてみたところ、どうやら蓮亀は御母様に傷を残さないようにダメージを体から抜けるように打ち合っていたらしい。しかし、逆に御母様はダメージを残すように打ち合っていたらしく蓮亀の体は痣だらけだったようだ。本

来なら痣どころか骨折ものだが痣程度で抑えている蓮亀が凄いのである。しかし、確実に御母様のほうが蓮亀により打たれていたようだ。そのため最後に木刀を添えられて負けを認めたらしい。

「わしは姓名は北条、字は刹那、真名は蓮亀でございます。今後宜しくお願い致します」

「先に自己紹介されてしまったわね！なら私も、私は姓名は孫堅、字は文台、真名は炎蓮、私、炎蓮が雪蓮、蓮華との仲を蓮亀に認めましょう！」

こうして蓮亀との仲を私達は御母様に認めてもらうことができた。

第十三話

～華鳳ｓｉｄｅ～

「ここが華琳の家がある街か！門からしてでかいな!!」

俺達は華琳の家がある街の門にやっと着くことができた。

「だけど、周りの目が痛いな」

門に着くまで華琳とイチャつきながら来たせいか、周りの、特に男性からの目が痛かった。でも女性からは微笑ましいような目で見られていたようだが、それはそれで照れくさかった。

「ふん！そんなやつらのことなんて気にするだけ無駄よ！そんなことよりも私のことを見てちょうだい！」

とても華琳が俺に対してかまってちゃんになっていた。初めて逢った時はそんな風には見えなかったんだけど、やはり恋は人を変えることをこの時、実感した。

「なら？速？に見せつけてやるか？……んっ…んん」

「「「「?!!」」」」

「むぐ??!?…んん……ぷはっ！もう！いきなり何するのよ！」カオマッカ

照れて怒ってる華琳もとても可愛かったです。
「いやだってな、以下にも私もかまってオーラ出してるんだもん。そんなの出してたら、人目なんてもう気にしないだろう？違うか？」
「っっ！そんなこと言われたら否定できないわよ!!」
そして、人目を気にしないでしたせいか、男性からの目はよりいっそう痛くなり女性達の顔は赤くなっていた。
「見てるだけでこっちが恥ずかしくなるわ！詰まってるからとっとと通れ!!」
門番の人からも怒られてしまった。
「ここが華琳の家が統治している街の中か！綺麗で賑やかだな！まあ、それだけの人がいて、皆の気持ちが明るい証拠だろうな!!」
「勿論よ！だからこそ華鳳、あなたと共に私はここで暮らしたいの！だからこそ話し合いを成功させるわよ」
「そうだな！俺も華琳と、そして、その家族と暮らしたいからな！」
そのまま、華琳の家がある場所へと俺達は向かった。
「ここが、華琳の家か～！立派で綺麗な家だな！」
「ふふん、そうでしょう！もっと私を褒めてくれてもいいのよ！」
華琳が偉いわけではないのだがそんな姿も可愛かったので撫でまくった。

「よ～しよしよし、華琳は可愛いな～」ナデナデ
「えへへ！」
　ほんとに可愛かったです。
「お嬢様、お帰りなさいませ」
「あっ！っっ今見ていたことは忘れなさい！」カオマッカ
「わかりました。ところでそちらの男の子はどちらさまでしょうか？お嬢様と仲が良さそうに見えましたが？」
　今いる場所は華琳の家の前、ということは、華琳の家の者に見られていてもおかしくなかったのだが、華琳はその事をすっかり忘れていたらしい。そんなところも可愛くて魅力的なんだけどな！
「俺は、姓名は北条、字は刹那と言います。華琳とは健全なお付き合いをさせていただいています」
「そう、それで御母様達にも華鳳を紹介しようと思って、連れてきたのよ！」
「成る程、もう真名まで交換する仲になっているのですね。自己紹介が申し遅れました、私は華琳お嬢様御付きの侍女その1と覚えていただければ結構です。では、曹騰様の元に御案内させていただきますね」
「華琳、曹騰って？」

「あぁ、御祖母様のことよ」
「こちらに、いらっしゃいます。では私はここで失礼致します」
「ありがとうございます。華琳、俺今もの凄く緊張してきたんだけど大丈夫かな？」
「もう！しっかり堂々としてなさい！華琳です。失礼します。」
　そして、華琳は親がいる部屋の扉を開け、中に入っていった。
「ほら、華鳳も早く入りなさいよ」
「えっと、失礼します」

　中に入ってみると中には華琳が成長していったらなるのではないかと思われる、人達がいた。まあ、華琳の母親と祖母だと推測できるんだが、どちらもおとなしそうなイメージだが華琳の気の強い性格はどこからきたのだろうか？
「初めまして俺、いえ私は姓名は北条、字は刹那、真名は華鳳と申します。華琳とは健全なお付き合いをさせていただいています。」ガチガチ
「華鳳、今凄く緊張しているけどいつもはちがうのよ」アセアセ
「そんなに緊張しなくて大丈夫よ。私達は、華琳が連れて来ただけで、もう認めているのよ」
「えっ？なんでなの御母様？」

「だってあなた！そもそも友達いないじゃない」
　まさかの親から華琳に友達いない発言で親から知るとわ。華琳驚いて固まってるし。
「そんなことないわよ！友達ぐらいいるもん！」ナミダメ
　何故親ではなく、俺に訴えるんだ？
「でも華琳、家に友達に連れて来たことないじゃない！」
「グスッ、いるもん！友達ぐらい、うぅっ」グスッグスッ
　幼くなっている華琳もいいです。そしてこちらをめっちゃくちゃ見詰めてきてます。でも、今度は時間が経ってきたら睨んでくるのは何でだよ！恥ずかしいのはわかるけどさ！
「とりあえずわかりました。それでは、御祖母様も発言はしていないですが、華鳳との仲は認めてくれるのですね！」
「ええ、かまわないわ。曹家の当主、曹騰が認めます！」
「そういうわけで、今日から華琳の婿と言うことで華鳳君、あなたは、私達の家族の一員よ！私は華琳の母親で曹嵩よ！宜しくね」
「やったわね華鳳！認めてもらえたわ。これでもう遠慮なくイチャイチャしても文句はないわ！」
「まだ遠慮してたのかよ！俺はそれに驚きだよ！」

「私の本気の甘えなんてあんなもんじゃないんだから」
「これでもか？んっ…んっんん…ぷはっ！」
「んん!?んっ…んん…ぷはっ！」
親の前で俺達は接吻を遠慮なくしていた。流石に親達はその光景に苦笑していた。
そして、接吻を止めたのに鳥の雛のように唇を啄んでくる華琳も可愛かったです。とても恥ずかしいんだけどね。
華琳の親に認めてもらえて、とりあえずよかった。
そして、親の前でまだ接吻を俺達は止めていなかった。
～華鳳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～
◆◇◆◇
～曹操ｓｉｄｅ～
親からは、華鳳との仲を認めてもらえてとても嬉しくて未だに接吻を私は止められなかった。
「はむ……はむはむ……んっんん…ちゅぴっ…ぷはっ！」
「華琳そろそろ止めようか！親の前で恥ずかしくないの？」
「今の私の想いの感情は誰にも止められはしないわ！」
「せめて親の前ではもうやめてくれ！俺が恥ずかしい」

「なら続きは私の部屋でしましょう！なら早く私の部屋に行きましょうか！」
「いや、親に別れは言わなくていいのかよ!?んっ！んん…ぷはっ！」
「んむ、んん…ぷはっ！…それでは、御母様方、私達はこれで失礼します」
「いろいろ見せつけられたわね！」
「仲が良いことはいいんだけどね！華琳があそこまで惚れ込んでいるとは思わなかったわ！」
　華琳の親達は、いろいろ華琳に驚かせられていた。
「ここが、華琳の部屋か！」
「そうよ、この部屋には御母様達ですらそうそう、入れないのよ？だから男性は華鳳、あなたが初めてよ！」
「そうか！ところで、まだ抱きついてるのか？部屋には着いたけど？」
　今私は、他人から見たらはしたなく見えるだろうけど、正面から華鳳に抱きついていた。
「まだまだ甘え足りないわ♪だ・か・ら・ベットの上でも甘えるわよ～」
　そして、私は夕飯の時間まで華鳳に甘えていたわ。華鳳は疲れきっているけどね♪まあ、華鳳がまだ子供！俺達８歳！っていうから一線はこえてはないんだけどね。
「華琳、あなたもう少し落ち着かないと華鳳君から逃げられるわよ！」

「えっ？」
「俺が華琳から逃げるわけないだろう！ただ、やっぱりもう少し落ちつて欲しいかな！」
よかったあ～。嫌われてしまったのかと思ったわ。でもそうね、少しは自重しなければならないかしら。
「わかったわ。次からはもう少し自重するわね♪」
「頼むよ！それにしても美味しそうだなこれ！」
「あなたのために私が腕をかけて作ったんだから残さず食べなさいよ！」
料理を御母様達に教えてもらっていてよかったわ！
「そうか！これは華琳が作ってくれたのか。それは残さず食べなきゃな！」
そのあと料理は全て美味しく食べてくれたわ！
今日は、華鳳を紹介したこともあり、お風呂に入ることになったのだけど、一緒に入ると、私達まだ子供なのにお風呂が狭く感じるわね♪この時点で先程言っていた自重はなくなっていた。
「いや、何でだよ！俺が先に入ってたよな!?」
「あなたが入ってたら、私も入るのは自然の道理よ！」
「そんな自然の道理、俺は知らないんだけど!?」
「あら？なら今日から知っていけばいいと思うわね♪」

「風呂から出ると言う選択肢は？」
「あるわけないでしょ！」
「ですよね…むぐっ…んん…んぷ」
「んん…んっ…ぷはっ！風呂での接吻もまた違うわね♪」
「何が違うのか俺にはわからないや」
　そうして、私達は風呂場でもイチャイチャしていた。
「で、寝るときもこうなるよな！」
「あなたの部屋はないもの。ある意味あなたの部屋は私の部屋ね♪」
「仕方ないか、一応俺居候だしな」
「そういうことよ！それじゃ、また寝るまでイチャつくわよー」
「華琳、お前寝るときまで元気だな！」
「いつもは違うんだけどね。華鳳がいるから、私今きっと興奮してるんだと思うわ！」
「そういう俺も華琳と寝るからドキドキ胸の音がうるさいんだよな」
「私もそうよ、ほら、聞こえるでしょ？」
「そうだな！逆にほれ！俺の音も聞こえるだろ？」
「そうね！お互い様ね♪」
　こうして私達は、寝るまでイチャイチャしながら、お互いに甘えて、寝るときは添い

寝して寝たわ。

～曹操ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十四話

～桃鶴ｓｉｄｅ～

僕の真名を決めるのもお昼までには終わったため、桃香と一緒に芋電氣乃助と鶏焔蛇亀、堕邪蛇丸とコミュニケーションをとることになった。何故ならいつもは、家の手伝いがある桃香も、今日は僕と一緒に真名を決めるのもあって手伝いをしなくてよいと言われていたので一緒に暇になったからだ。そして、僕があの子達の話しをしたら仲良くなったほうが良いと言われたためでもある。

「そういえば、この子達は何を食べるのですか？」

（何を食べるにしても、とんでもない量になりそうですけど）

「私、自体があげる子は芋電氣乃助だけなんですよ！」

（では、他の子達は、どうしているのでしょうか？）

「とりあえず、芋電氣乃助は何を食べるのですか？」

「それは」

「それは？」ゴクッ

「それは、そこらに生えてる雑草ですよ！」

「うん、桃香が直接あげているわけではないことがよくわかりました」
「そうですかね？」
「そうですよ！でもそうするとこの辺の土地は禿げてしまいそうですがそうでもないですね？」
「やだな～御主人様、禿げませんよ！だって、芋電氣乃助はこれだけの大きさをしてますけど食べる量は他の蚕と変わりませんから！」
「桃香、違和感を感じましょうよ！たぶん芋電氣乃助が特殊なだけですね」
（だって１０センチと２００センチ近くって差がかなりありますからね）
「でもそうすると、鶏焔蛇亀は自分で食料を取ってきますね！」
「飼われている鶏？でも狩猟本能は忘れていないということですか？」
「はい、自分で山に行っては熊とか猪や鹿などを取ってきますね。生きたまま」
「昔の鶏は凄かったんですね。まあ、その光景を想像できますけど。それにしても生きたままですか？」
「そうなんですよ！ここで殺して、堕邪蛇丸にあげて残った分を自分で食べるんですよ」
「完全に親鳥になっていますね！」
（あっ！でも確か堕邪蛇丸も一応は鶏の卵から生まれてましたね。そのせいかもしれませんね）

「とりあえず、この子達とこんな感じで遊んであげてください」
「キュー」「ピィッピュイ」「シャー」
「もうこんなに甘えちゃって、可愛い子達ですね♪」
「言葉だけを聞いてると、とても和むような光景なのですが、目を開けて見ると桃香が襲われているようにしか見えませんね！」
「御主人様もこっちに来て可愛がってあげてください!!」
「今行きますよ！」
「芋電氣乃助の場合は、角との間や目と目の間の部分を撫でてあげてください。届かなくても頭を下ろしてくれるから大丈夫ですよ」
「触り心地は、普通に芋虫と変わりませんね！」ナデナデ
「でも不思議なことに、槍とか刀、矢なんかは刺さったりしないんですよね。何でだろ？」
「それは不思議ですね？それは他の子達にもいえることなのですか？」
「そうなんだよ！食べ物の差はそんなにないからやっぱり愛情の差かな？」
「愛情って！そうすると愛情というものがかなり凶悪的になってきますね」
「そんなことよりも、他の子達とも仲良くしようよ！」
「わかってますよ！次は鶏焔蛇亀ですか？」

「うん、鶏焔蛇亀の場合尻尾の蛇の頭を撫でてあげることと甲羅の部分を死んだ馬の尻尾の毛で作った物で隙間の苔なんかを取ってあげると喜びます。」
「鶏自体にはなにもしないのですか？」
「やってあげても反応がないんだもん！」
「そうですか。では、堕邪蛇丸はやっぱり頭でしょうか？」
「それもそうなんだけど、時々助けなきゃいけない時があるの。それはやってあげないと」
「助けなきゃいけないこととはなんですか？」
「脱皮です。まだ幼いせいか自分では完全に取れないんだよな～」
「これだけ大きいと脱皮も大変ですね」
「そうなんだよ。芋電氣乃助と鶏焔蛇亀も手伝ってはくれるんだけどね」
「この子達は本当に家族の様ですね」
「勿論だよ！後、暖かい内に川で水浴びもたまにはさせるんだよ」
「あ！疑問があったのですが、この子達の寿命ってどれぐらいなのでしょうか？」
「全然わからないけど、大きい分たぶん寿命も長いはずなんだよね～」
「そうですか！出来るだけ長生きはして欲しいですね」
「うん、そうだよね！もしかしたら私達よりも長生きするかもだし！」

僕達はこのまま変わらずこの地で生き、そして死んでいくものだとこの時は思っていた。僕の身にあの事が起こるまでわ。

～桃鶴ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

◆◇◆◇

～劉備ｓｉｄｅ～

あの後、この子達も長生きはするだろうと話しをした後、御主人様がいきなり高熱を出して倒れてしまった。

その倒れるとき、私達は皆で、川で水浴びをしていた。

御主人様が急に倒れてしまったため私達は驚いてしまい、少しの間、御主人様は川の勢いで流されてしまったが、堕邪蛇丸がすぐに川から引き上げてくれたので助かった。

それからは大変だった。親達は薬草等で出来る限りのことをしたが、熱はいっこうに下がらず、もうどうしようもなかった。

私も親達も芋電氣乃助達も、ただただ熱が下がることを祈るしかなかった。

しかし、御主人様が高熱を出して倒れてから2日後、何もなかったかのように御主人様の熱は、下がり御主人様は起きていた。

その事に私達は驚いた。まあ、芋電氣乃助達は普通にその事に喜んでいたけどね。

～2日後～

「そうですか。僕はあの後倒れたんですね。他に変わったことは、ありましたか？」
「御主人様は、高熱も出してたんだよ！皆このままじゃあ死んじゃうかと思ってたんだから。だから、今日ぐらい安静にしていてくださいよ。もう！」
「そう言われましても、この通りもう体は元気なのですが」
「それでもです！」
「わかりました。それとどうやら僕が高熱を出していたとき、夢を見ていた様ですね」
「それは、どんな夢だったのですか？御主人様」
「しっかりとは、覚えてはいないのですよ。ただ女性の声が聞こえただけで、全てを聞き取ることができませんでした。でも最初と最後は聞き取ることができましたよ。」
「何て言ってたの？」
「ひとつひとつが途切れ途切れだったのですが、み、っ、つ、の、せ、い、と、ち、を、も、つ、も、の、よ、と、き、が、み、ち、た、と、き、こ、の、ち、に、も、ど、ら、ん、と聞こえたことから、3つの性と智を持つ者よ刻が満ちた時この地に戻らんということですね。」
「??結局どう言うことなの御主人様？」
「要するに、僕は一度ここから居なくなるっぽいですね！」
　この時やっと私は、御主人様が言っていたことが理解することができたのだ。

「!!御主人様、居なくなっちゃうの!やだやだやだ、ずっと居ようよ!」グスッ
「泣かないでくださいよ。最後にも言いましたが、時間が経てばまた、ここに戻ることができることはわかってはいるのですから」
「そっか〜!あれ?でもいつ戻ってくるの?あといつから居なくなっちゃうの??」
「それは……僕にもわかりません。もしかしたら、すぐかもしれませんし、数日や数十日、数年や数十年かもしれません。下手すると桃香が生きている時には戻ってこれないかもしれません」
「そんなのずっと居ないようなものじゃん!どうしたらいいの?ねえ、どうしたら戻らなくてもすむの?教えてよ御主人様!」
「そんなことは僕が聞きたい!!!でも今はいつ戻っても良いように、戻っても寂しくないように、桃香達との想い出を作るしかないのですよ!!」大声
「ごめんなさい」ビクッ
「すみません。大声を出してしまって。僕もどうやら冷静ではないようですね。でも先程も言いましたが、これからは想い出を作っていきましょう。お互いに寂しくないようにするために」
「グスッグスッ、うん、そうする」
　それからは、私達はこの事を親達にも芋電氣乃助達にも話し、理解してもらった。

そして、ひたすら想い出になるようなことを芋電氣乃助達と一緒に作っていった。川で遊んだり芋電氣乃助達の上で、御主人様と一緒に寝たり、恥ずかしかったけど、また一緒にお風呂に入ったりもした。そうそう、堕邪蛇丸の脱皮も一緒に手伝ったりもしたな。

そんな楽しい日々は過ぎ、時は経っていった。

そして、あの出来事から2年の月日は経ち、御主人様は私達の前から姿を消してしまった。

～劉備ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十五話

～蓮亀side～

雪蓮達の母親殿、炎蓮殿に雪蓮達の仲を認めてもらうことができた。

その後は、大変だった。雪蓮と蓮華がどちらの部屋で一緒に寝るのか、から始まり夕食もどちらの隣で食べるのかや、明日はどちらから武術の稽古をするのやらで大喧嘩を始めたからじゃ。

まあ、結局炎蓮殿が喧嘩両成敗ということで、雪蓮達に拳骨を落として話しは終わったのじゃがな。

そして、今現在わしは、風呂に入っておる。これだけならまあ、わしが初めて来たこともあり毎日は入れない風呂を今日は、沸かしたという話しで終わるのじゃがな～。

何故かは知らぬが、わしの両隣には雪蓮と蓮華が入っておった。

「ところで、なんで雪蓮と蓮華は入っておるのじゃ？わし、先に入っておったよな？」

「だって、蓮亀が入っているのよ！なら入るしかないじゃない！」

「いや、そんな自信満々に言われてものう」

「姉様一人だけで入らせるわけないじゃない！」

「で、本音は？」
「蓮亀が入ってるのなら私も入るしかないじゃない！」
「御主らは本当に似ている姉妹じゃな！」
「「えへへへ」」
「別に褒めてるわけじゃないぞ。それと入って来るならマナー違反じゃが、布でせめて身体を隠してこぬか！」
「「私に隠すような恥ずかしい身体はしてないわ!!」
「それ、他のやつの前でもそうするのかのう？」
「「そんなことするわけないじゃない。私の身も心もあなたの物なのだから!!」」
「それならわしの時も出来れば隠して欲しいのじゃが、まあ、わしも雪蓮や蓮華の裸を他のやつには見せたくはないからな。そして、わしだけのためというのも悪い気はしないのう」テレテレ
「このままずっと一緒に入っていたいけど、流石にのぼせてくるから先に私は出るわよ」
「私も出るわ姉様！蓮亀も早めに出ないとのぼせるわよ！」
「これぐらいの温度じゃのぼせはしないが、長湯も身体に悪いし、わしも出るとするかの」
わしらが風呂から出ると今度はやはりどちらの部屋で一緒に寝るのかの話しなった

が、先程のような喧嘩にはならず、淡々と話しをしておった。
　そして、結局二人一緒に寝ることになった。ただ日替わりで、雪蓮と蓮華の部屋を交互に寝ることの話しだったようだ。
「そして、やはりわしは、真ん中で寝るのじゃな」
「これが一番平等なのよ！」
「私達だって別に喧嘩したいわけじゃないもの、だから出来る限り平等にしたいのよ！」
「そうか、御主らの間で話しがついておるのなら別にかまわないからな」
「じゃあ蓮亀、お休みなさいの接吻をしましょ！」
「ふむ、こちらでもこれはあるのじゃな！」
「あっ！ずるいわよ蓮華！あなた洞穴にいたときもしていたそうじゃない！私は一度もしたことがないのだから先に譲りなさいよ～！」
「姉様正妻は私です！なら先にするのも私のはずです」
「どちらともするのじゃから喧嘩するでないわ！寝るときぐらい落ち着くのじゃ！」
「だって蓮華（姉様）が」
「だってもない！喧嘩するのであれば今日はなしじゃ！それでもよいのか！」
「ごめんなさい」
「ふむ、わかればよい。さて結局どちらから先にすればよいのじゃ」

「蓮華から先にしなさいな。そちらのほうが後々しっかりとした順位をつけることができるしね」
「出来れば皆平等にしたいのだが」
「見せかけだけでもやっぱり必要なのよ。だからほらさっさと蓮華しなさいよ」
「うん、蓮亀お願いね♪」
「うむ、…んっん……ん、」
「んっん……ん、」
「見てるとこっちが恥ずかしくなってくるわね」
「んっ…ちゅっ……ぷはっ」
「それじゃあ、今度はこっちにお願いね♪」
「初めてなのじゃから無理しないようにのう、んっ…んっん…ぷはっ」
「んっ…んんん…ぷはっ、接吻って意外と難しいのね、息継ぎとか」
「それはまだ慣れていないだけじゃよ」
「そういうものなのね。さてと、お休みなさい」
「お休みなさい」
　こうしてわし達はいろんなことのあった一日を終えた。
～翌日～

次の日、朝食の時間に炎蓮殿から古参の重臣との紹介をすると話しを聞かされた。そのため今日の予定は午前中は、その人達と会うことになった。また、午後は雪蓮と蓮華との武術の稽古をすることに決まった。

そして、今は紹介される人物がいる所に向かっている最中じゃ。

「それにしてもどんな人達なのだろうかの?」

「そうね～、紹介される人は三人よ。張昭、程普、黄蓋というわ」

「張昭は、生真面目な堅物で口うるさく、ことあるごとに怒鳴り声を上げることが多いかな。理屈っぽいし。でも私達のために言っていることはわかってはいるから嫌いにはなれない人物かな!そんな感じじゃない姉様?」

「そうね、あと程普は、公私を明確に使い分けてて職務には忠実なんだけど私生活はズボラなのが玉に瑕ね。性格は少々のことには動じないおおらかな性格で、皆のお姉さん的存在になっているわね」

「そして黄蓋は、昼間から豪快に酒を飲み、堂々と職務をサボってみせるかと思えば、働いていることは働いていたり、武術も特に弓術が優れているわ。他人を唸らせるほどの料理の腕もあるから、武人としてだけではなく、女としての部分でも皆から一目置かれているわね。御母様はほら、武術に優れてるけど料理はできないし」

「各々の悪い部分、良い部分を皆に理解されておるのか。これは、是非とも早くに会いた

いものよな！そして、炎蓮殿は料理ができないのか」
「この話しは秘密よ！御母様それで悩んで知恵熱出したことあるし。姉様もこの事は秘密でお願いしますよ」
「わかってるわよ！あ！着いたみたいね。孫策です！入ってもよろしいでしょうか？」
コンコン
「入って来てよいぞ」
そして、中には炎蓮殿と高身長の女性が２人と、低身長の女性が１人いた。
「ほう、身長が他の２人よりは、低いと思っても馬鹿にしているわけではなさそうじゃな！」
思っていることをそのまま当てられてしまったようだ。わしもまだまだ甘いようじゃな。
そして、そのままその人物は自己紹介を始めた。
「ぼー、としていても時間の無駄じゃ。とっとと自己紹介をするぞ。私は、姓名は張昭、字は子布、真名は雷火
じゃ。御主とは長い付き合いになりそうじゃから真名を教えたぞ」
次に高身長でも肌が白い人物が話し始めた。
「お姉さんは、姓名は程普、字は徳謀、真名は粋怜というはよろしくね！」

最後に高身長で肌が黒い人物が話し始めた。
「わしは、姓名は黄蓋、字は公覆、真名は祭という、これからはよろしく頼むぞ！」
「では、次はこちらの番じゃな。わしは、姓名は北条、字は刹那、真名は蓮亀、こちらこそよろしくお願いいたしますぞ！張昭殿、程普殿、黄蓋殿」
「それでは、自己紹介はこの辺でよいだろう。では解散だ！」
そう言って炎蓮殿はわしらも含め皆を解散させた。
「次は稽古といこうかの。まずはどちらからやるのじゃ？」
「私からよ！やっぱりリベンジしたいじゃない！」
「蓮華もそれで、よいのかの？」
「ええ、それで大丈夫よ。ただ姉様が終わったら私の番よ！」
「勿論じゃよ」
それから、昼飯の時間になるまで、稽古を続けた。雪蓮も蓮華も戦ってみてそれぞれの弱点もよくわかった。
雪蓮は、炎蓮殿と同じく早さを武器にしている分力が弱い。そのため武器同士のぶつかり合いで硬直したときに力で押しきられやすい。また、炎蓮殿よりもまだ早さもないためまだまだ成長の余地はある。
蓮華は、逆に炎蓮殿よりも力を武器にしているが、まだまだ弱くまた、早さでは勝負

できていないため力もつけながら、早さにも対応できるようにしていかなければならなかった。
「とりあえず、午前中の稽古はここまでじゃの。御主ら立てるか？」
「「無理」」
「仕方ない、肩を貸してやるから昼飯を食べに行くぞ！」
「「無理無理」」ブンブン
「吐かない程度に食べるのじゃ！それが力となり、後に自分の力になるのじゃからな!!」
　そして、雪蓮と蓮華には吐かせない程度に食べさせた。食べさせたら気持ち悪いと言いながらも喜んで食べておった。わしもわし自ら食べさせただけでここまで食べると思ってなかったため午後の稽古は少し間を開けてから始めることになった。
「次は蓮華から先なのじゃな」
「そうよ、それじゃあお願いするわね！」
「ふむ、それじゃあ始めるとうぐっ！」ガク
（足腰に力が入らん！それに頭も）
「どうしたの蓮亀!?お願い返事をして蓮亀!!」
（どんどん意識もと……お…の……い……）
　こうしてわしは倒れてしまったらしい。そして、わしも謎の女性の声を聞く夢を見

た。

～蓮亀ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

◆◇◆◇

～孫権ｓｉｄｅ～

私達と午後の稽古を始めるとき突然蓮亀が倒れてしまった。私は突然のことで慌てしまったが、姉様は冷静に判断して私は親達を呼びに行った。

そこからは私達には何もできずにただひたすら親達が蓮亀にしていることを見てることしか出来なかった。

蓮亀ほどの体力がある者が突然高熱で倒れるのは考えづらいという話しになったが、何かあっても困るので孫家の医師に診せたがやはり何もわからなかったようだ。

そこからは、原因不明の病気かもしれなかったが、親達がやめろと言っても私達は蓮亀の隣で看病を続けた。

そして、高熱で倒れてから2日後、何もなかったように蓮亀は朝練をしていた。このとき私はいろんな感情が爆発してしまい蓮亀を殴ってしまった。このとき初めて蓮亀を殴れたと思う。

「なんであなた病み上がりなのに朝練なんてやってるのよ！殴るわよ！」

「いやもう殴られておるのだが!?」

「今のあなたが、私に意見言える立場なの！」
「ごめんなさい」
「蓮華、その辺にしときなさい。でもそうね、私達を心配させといてこれはないんじゃない？」
「すみませんでした」
「今日はおとなしく部屋で私達と一緒に寝てなさい!!」
「はい、仰せのままに」
　そして、今日は姉様の部屋で一緒に寝ていた。寝ていたとき突然蓮亀が高熱を出していたときに夢を見ていたことを言い始めた。そして、その内容に私達は驚いてしまった。
「わしが高熱で倒れたとき夢を見ていたらしい」
「そうなの？それはどんな夢だったのかしら？」
「それがな、聞いたことのない女性の声が途切れ途切れ聞こえてのう」
「ほう、私達が大変な思いをしていたときに、聞いたことのない女性の声を聞いていたと？」
「怒るでないわ。わしだって聞きたくて聞いていたわけではない。ただその時のわしは、一文字も聞き逃してはならんという感覚があったのよ！」

「そう、なら良いわ！それでどんな内容だったの？」
「ここからは伝えづらいが御主らも関わってくるのでな伝えるが、ショックは受けるじゃろうが取り乱してならぬぞ！」
「……」ゴクッ
「わしはどうやら一度この地を去らねばならないらしい」
「え？」ボーゼン
「先程も言ったが女性の声が途切れ途切れだったため聞こえた部分は最後と最後から２番目じゃった。」
「でもそれだけでは蓮亀が未来に帰る話しに繋がらないわよ！」
「そうよ！それに全部を聞き取れたわけじゃないんでしょ？それなら未来に帰らなくてもすむかもしれないじゃない！」
「話しを最後まで聞け！内容は、げ、ん、せ、に、て、ち、か、ら、を、ち、を、た、め、よ、と、き、が、み、ち、た、と、き、こ、の、ち、に、も、ど、ら、ん、要するに、現世にて力を智を溜めよ刻が満ちた時この地に戻らんというわけじゃ」
「そう、でもその内容ではいつ戻ることになるのか、逆にいつ戻ってこれるのか全然わからないわね」
「そうなのじゃよ。不親切なことよな。そんなに泣くでないわ蓮華よ」

「だってだって、初めて自分の運命の人だと思える人に逢えて、御母様にも認められてこれからだって時にこれなのよ！私、私蓮亀とあなたと別れたくなんてない！姉様だって悲しくないの？」グスッグスッ

「何を言ってるのよ蓮華、私も悲しいに決まっているわ、でもねそれ以上にこんなことをしてくれたやつに対して怒りがね治まらないのよ！」

「とりあえずだ、このままいつ起こるかも悩んでいても仕方あるまい。逆にいつ戻っても悲しくないようにできることをしていこうぞ！」

「そうよね。そうしましょう！でも今日は部屋でゴロゴロするわよ！」

「そうよね姉様！蓮亀明日からはよりいっそう想い出作りと稽古をしていきましょ！」

「蓮華はいつの間にか泣き止んでおったのか。だが明日からはそのようにしていこいかのう」

こうして私達の蓮亀が居なくなるまでの予定が決まった。

この日は、出来るだけ部屋で皆でゴロゴロしながら蓮亀に私達は甘えていた。

先程の話しでいつか戻って来ることがわかってはいても、それは私達が生きているときとは限らないことを私達はわかっていたからだ。だからその事を意識したくなくて誤魔化すかのように甘えた。

そして、次の日からほぼ毎日、稽古をしては休憩で甘え、稽古をしては休憩で甘えて

を繰り返した。
そして、あの出来事から今日で２年の月日が経つことになる。私は初めよりはそれなりに弱点を克服できたと思っているが、蓮亀からするとまだまだらしい。
今日は、起きたときから皆今日で蓮亀とは離れることになるような感覚をしていた。そのため、今日だけは稽古をしないでのんびりとその時が来るのを待っていた。
そして私達は、蓮亀が消えてその体温を感じられなくなりまでひたすら蓮亀に抱きついていた。だが、蓮亀は私達の前から消えてしまった。その事に私達は、ひたすら号泣した。
私達と逢ってから２年の月日が経ち蓮亀は私達の前から消えてしまったのだ。
～孫権ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十六話

～華鳳ｓｉｄｅ～

朝日のまぶしさで俺は起きた。そして、俺の隣で華琳はまだ寝ていた。華琳は寝ているだけでもとても可愛かったです。また、俺はただ寝顔を見ているだけなのにその寝顔が華琳というだけで何時間でも見ていられる気がした。

寝顔を見ているだけでも充分だが、やはり愛する人が隣に寝ているならすることはただひとつ！というわけで華琳の頬を突っついてみました。

「うぅ～ん…すぅ……んっ…んん…ぅん？」ツンツン

突っつくのが楽しくてやり過ぎてしまったせいか起こしてしまったようだ。

「ふぁ～、華…鳳？んっんん…っちゅっ…うんっ…華鳳おはよう！」

「おう！華琳おはえっ？ちょっ華琳むぐっ!?っんん…っちゅっ…んんっ…ぷはっ！…あ、華琳おはよう」

どうやら華琳は寝惚けていたようだ。まさか起きたと思った相手から顔を掴まれて朝一から接吻をかまされるとは思ってもみなかった。だが、このときの俺は知らなかった。華琳は寝惚けている時は接吻魔であることを、そして大半はその事を忘れているの

だった。
「さて、着替えましょうか！なんかあなたの前で着替えるのも少し恥ずかしいわね！」カア～
「おっと悪い！後ろ向いてるから着替えてくれ。俺も華琳が着替えている間に着替えるから」
「あら、華鳳は私に見られて恥ずかしくないの？」
「人に見られて恥ずかしいような身体をしているつもりはないし、ここにいるのは華琳だけだからな」
～数分後～
「着替えも終わった事だし早くごはんを食べに行きましょ！」
「おう！もう腹へったしな！行くか」
そして、俺達は食堂に向かった。
「おはよう！あなた達のごはんの準備は出来ているわよ」
「御母様おはようございます！」
「御義母さんおはようございます！」
「あなた達の今日の予定はどうなってるの？」
「午前中は私の稽古に華鳳も手伝ってくれることになってます。お昼はそのまま街に出

掛けて食べて少し店を一緒に回りたいと思います。午後は今日は家で華鳳に甘えていたいですね！」
「まあ、そんな感じになっています。」
「あらそう、家の華琳が何かと迷惑をかけるかもしれないけどお願いしますね！華鳳君」
「もう！御母様余計なことは言わないでよ！」テレ
「華琳ったら照れちゃって可愛いわね」
そうこうして朝ごはんを食べ終えた俺達は華琳の稽古をするために裏庭に行っていた。
「それじゃあ、稽古を始めましょう！」
「華琳の場合大鎌という癖の強い武器だから、しっかり使いこなすまでは時間がかかるだろう。だが、使いこなすことが出来ればそれは他の者にはない物を手に入れることができるはずだ」
「はああっはっ！」
「ただ振り回すだけなら誰にでもできるぞ！」
「くっ、はっせいっ！」
「華琳自身が大鎌に振り回されてどうすんだよ！だからほれ、ちょっとでも相手から押されただけで自滅する！」

「はあっはあっはあっ、」ハアハア
「どうやら華琳はあまり大鎌の特性を知らないようだな」
「大鎌の特性？」
「そうだよ。さっきも言ったがただ振り回すのではなく自身が軸となって遠心力を使ってより効率よく振り回すんだよ！ただでさえ大鎌は間合いが狭いからな」
「遠心力？」
「そう、遠心力。でも遠心力と言ってもうまく伝わらないと思うから見せるけど、振り回せば身体もそれにともない回るだろ？この力を利用するんだよ！」
「その力なら利用しているわよ！」
「いやいや、あれだと重心はぶれてるし、軸として安定してないからちょっとした衝撃で自滅したのはさっきのでもわかってはいるだろう？」
「それもそうね。でもそしたらどうすればいいのよ？」
「大鎌を振り回しているのは華琳自身であって大鎌が華琳を振り回しているのではないのだから、まずはその場で安定してちょっとした衝撃を与えられても大鎌を振り回せるようになろう！」
「わかったわ」
「それが出来たら今日は終わりにしよう。何事も基礎は疎かにしてはいけないからな。

その分念入りにやるぞ」
「そうね！でもうまくできたら何かご褒美を頂戴！」
「わかった。うまくできたら渡すよ」
それからは、初めのころよりは重心もしっかりしていており、振り回されているだけのようには見えなくなってきた。そして、その頃にはお昼の時間にもなっていたので街に出掛けた。
「ここが私の中ではお気に入りのラーメン店よ！」
「そうか！華琳のおすすめなら期待できるな！楽しみにしているよ」
お昼は華琳のおすすめのラーメン店に入ることになった。そのあとは少し街をみて回ることになった。
そして、回っている最中で華琳に似合いそうな髪飾りを見つけたので、華琳にはばれないようにそれを買った。
街を回ったあとは華琳の家に帰り華琳の部屋で一緒に甘えていた。
「華琳、街で華琳に似合いそうだったから買ってみたんだ。着けてみてくれないか？」
「これを私に？ありがとう、着けてみるわね！…どうかしら？似合う？」クビカシゲ
俺が渡していた物を着けてみた華琳はひたすら可愛いとしか言えないぐらいに可愛かったです。小動物の様な華琳も可愛いくて、可愛い以外の自分の語彙力の無さがひた

すらこのとき恨めしかった。
「ああ！とても似合っているよ！華琳のために買ってよかったよ！うん、とても可愛いよ華琳」
「そう！ならよかったわ。ありがとね華鳳！…んっ…っんん…っちゅっ……んむぅ…んちゅっ」
「んっ…っんん…っちゅっ……っんんっ…ぷはっ！はあはあ、ここ最近やけに接吻が激しくないか華琳？」
「そう？ならまだまだ私の愛を受け止めきれてないわね♪」
「なっ！なら今度は受け止めきってみせるよ！」
こうして俺達は甘え合っていた。俺の身にあの事が起こるまでは。
～華鳳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～
◆◇◆◇
～曹操ｓｉｄｅ～
私は今とても嬉しかった。初めての華鳳との出掛けで華鳳からプレゼントまで貰うなんてこのときは考えていなかったからだ。これは一生、何があっても大事にしようと思った。この髪飾りのプレゼントを貰ってからはひたすら華鳳に私は甘えていたわ。華鳳が突然、苦しみ出すまでは。

私は、華鳳に抱きつきながら甘えていたとき、いきなり華鳳が苦しみ出した。
「うぐっ……うぅぅ……ぐぅ…」
「え?·どうしたの華鳳!?·ねえ!·しっかりしなさい!·誰か!·誰か来て!·誰でもいいから華鳳を助けて!!」
このときの私はきっと華鳳の額が冷や汗が出ていたこともあり、慌てていたのだろう。私が人を呼んでからすぐに、私の御付きの侍女その1が駆け込んできた。
「お嬢様どうなさいましたか!」
「華鳳が、華鳳がいきなり苦しみ出したの!·お願い!·早く助けてあげて!」
「っっ!?·失礼します!·これは!·わかりました。すぐさま屋敷の者を数人お連れしまして華鳳様を違う部屋に移しましょう。そのあと曹家の医師に診せましょう!」
このあとは、ひたすら屋敷中の者が動き回っていた。唯一私は、動き回らずひたすら華鳳のそばにいた。看病がすることがなくなっても私は華鳳のそばからは離れなかった。私は、不安だったのだ。このまま華鳳は死んでしまうのではないか、このまま離れてしまえば私の前から消えてしまうのではないかと思っていたのだ。
しかし、華鳳が苦しみ出してから2日後、華鳳は何事もなかったように私の隣で起きていた。その時はその事が嬉しくて華鳳に抱きついてひたすら泣いてしまった。だから気づくことが出来なかった。私の顔を深刻そうな顔で見ていたことを。

　それからそれほど時間も経たずに華鳳が話しかけてきた。
「華琳、重要な話しがある。聞いてくれるか？」
「どうしたの華鳳？そんなに深刻そうな顔をして、またどこか具合が悪いの!?」
「いや、違う。ただとてもショックを受けるであろう話しをこれからするつもりだ。だから冷静に取り乱さないで聞いてくれ！」
「不安だけどわかったわ。それでどうしたの？」
「話しづらいが俺は一度華琳の前から消えなければならなくなる」
「え？どうして？何か私あなたに嫌われるようことをしたの？お願いだから、嫌われるようなことをしたのならそれを直すから。私の前から居なくならないで！」
「織れもできれば、華琳とずっといたいさ。でもこればかりは俺にもどうしようもないんだ！」
「何があったの？あなたが苦しんでいたときに何があったのよ？お願い教えて！」
「俺は、あのあと夢を見ていたんだ。その夢で知らない女性の声が聞こえたんだ。途切れ途切れでうまく全ては聞けなかったが、最初から2番目と最後は聞くことができたんだ」
「何を聞けたの？きっとそのことが私からあなたを引き離すことなのでしょう？」
「ああ、夢の中で聞こえたのは内容は、ふ、た、た、び、こ、の、ち、に、も、ど、り、

し、た、め、に、と、き、が、み、ち、た、と、き、こ、の、ち、に、も、ど、ら、ん、全て繋げると、再びこの地に戻りしために刻が満ちたときこの地に戻らんということになるんだ！」

「そう、でもその内容じゃあこの場所に戻るために何をするのかわからないじゃない。それに時間が解決してくれるみたいになってるけど私があなたと一緒にはいられないことは内容にないわよ！」

「これは、俺の感覚なんだけどたぶん元いた未来に戻ることになる！今回のこれは何かしらの事故だったのかもしれない。そして、今はまだ繋がりが浅いがために戻ることになるんだと思う。だが一度は繋がったから今度はしっかりここに根付くためにあちらで時間を蓄える必要があるんだろう！また、俺はあちらとこちらに繋がってはいるが華琳は繋がってないからたぶんついてくることは出来ないと思う」

「そんな、そんなことあんまりよ！何があろうとあなたについて行こうと思っていたのに私達の力じゃどうしようもないなんて！私は、華鳳が居なくなったらどうすればいいの？私にとって華鳳の替わりなんて誰にもできないの。そのときの悲しみはだれが癒してくれるの!?」

「だからだ、だからこそ俺との想い出をこれから作っていこう！俺が居ないときの華琳にとっての悲しみを少しでも和らげる物を作ろう。いつ俺が消えてしまうかはわから

ない。でも消えてしまうまでの間に残せる物は出来るだけ残していこうと思う」
「わかったわ。なら出来る限りのことをこれから全力でしていきましょう！もしかしたら私が生きている間にあなたは戻ってはこれないのかもしれないのだから」
　それからは、私達は出来る限りの形や想い出として残せることをしてきた。街にも一緒に何度も出掛けたりして想い出として残すようにもしたし、接吻だって数えきれないほどしたわ。それに時間や場所を選ばなかった。だって恥ずかしいと思ったことすらそれは、想い出となるのだから。勿論、稽古もしたわ。だって華鳳が居ない時にまた、賊に襲われて私の初めてを奪われたりでもしたら悔やむに悔やめなかったからだ。その事を華鳳に話したら華鳳もその事にたいしては手を抜かずに全力で私に大鎌と武術のことを教えてくれた。
「華鳳、ずっとあなたのことを待っているから必ず帰ってきてね、愛しているわ華鳳…んっ」
「俺もだ、必ず戻ってくるから心配しないでまっていてくれ、愛しているよ華琳…んっ」
　そして、あれから2年の月日は流れ、今日華鳳は私とこの時最後の接吻をして私の前から去ってしまった。
　～曹操ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第壱章　それぞれの再会と婚前旅行

第十七話

～刹那達ｓｉｄｅ～

「此処は？……病院か」

最初は此処がどこかわからず辺りを見回していると病院だということがわかった。

（なんで俺、病院にいるんだ？）

（これはどういった現象なのでしょうか？）

（ふむ、雪蓮達は泣いておったのう。はて、此処はどこじゃ？）

（は？…いやどういうこと？なんで俺の中に俺達がいるんだよ！）

何故かは知らないが俺の中にあの世界に行っていた他の性格の俺達がいた。

（やはり、僕の最初の仮説は合ってましたね）

（これはまた、摩訶不思議なことよな！）

（なんか俺が体験してない記憶があるんですけどー！）

そして、各々が体験したことなどは記憶として融合してしまっているらしい。俺、華鳳の体験が一番他の俺よりも恥ずかしいことが多かったこともこれでわかってしまっ

た。
（それは僕達もありますよ。僕はてっきりまた、今世の意識と融合するものかと思っていたのですが）
（しかり、だがどうやらあちらの世界にそれぞれの性格に別れて行ってしまったがゆえにそれぞれの性格に人格が独立してしまったようじゃな！）
（いつもは俺達よりも思考が働いていないのにたまに前前世の俺は俺達以上に思考が働くことがあるよな）
（そうですね。いつもは思考が働かなくて女の子の気持ちにも気づかない鈍感野郎なんですけどね）
（お主らわしのくせに、わしに酷くないか？）
（俺の中で俺達が呼びあうとわかりづらいし、せっかく別々の真名があるんだから真名で呼びあおうぜ）
（そうですね。そうしましょうか、蓮亀もいいですね？）
（勿論じゃよ、あと本体の表に出る人格は華鳳でよいな？）
（え？俺でいいの？）
（勿論ですよ。なんせ今生きているのは今世の性格であった華鳳なんですから）
（そういうことじゃ。わしらはわしらの時代でしっかり生きたからのう）

（わかった。この体を動かすのは俺がやる。でも意見があったらしっかり言えよ。桃鶴達だって俺なのだから）

そういうことでこの体を動かすのは華鳳である、今世の性格になりました。そして何故、病院にいるのかという疑問は、桃鶴が教えてくれた。

（たぶん、1人の脳に3人分の体験した記憶が入ったことにより脳の整理が追いつかなくなり倒れ、そして病院に運ばれたのでしょう）

（そうすると今はもう大丈夫じゃということかの？桃鶴）

（その考えで合っていると思いますよ。蓮亀）

（なら明日には退院できそうだな！）

（ええ、だから今は今後どう行動するかを考えましょう）

（そうじゃな。一刻も早くあの世界に戻りたいのだからな）

（だが時間が解決してくれるみたいだからあちらに戻った時に役に立つことをして時間を潰そう！）

（では退院したら三國志の関わる本をたくさん読み知識を蓄えましょう！）

（知識も必要じゃが、あちらに行った時に、満足に身体も動かせばなるまい！）

（なら稽古をより厳しくするしかないな！）

（では、今後の方針は親の目を盗み稽古をより厳しくし、親の目がある時は三國志の関わ

る本をたくさん読む、これでいいですね？華鳳、蓮亀）
（ああ！それでいい（よい））
（さて、今後の方針がこれで決まったわけですが、病院にいる今はもうやることがありませんし、あちらの世界の話しをしませんか？）
（またなんで？記憶としてはあるだろう？）
（でもその時の感情はありませんよ。まあ、一種の暴露話しといきましょうよ！）
（桃鶴が生き生きしておるの！お主、恋バナとか好きなのか！）
（面白そうだしいいぞ！誰から逝くよ？（誤字ではない））
（一番面白そうな華鳳からです（じゃ））
（マジか！）
　こうして今後予定を俺達は決めた。ただ今現在が暇だったため、恥ずかしい思いをする暴露話しをすることになった。そして、暴露すればするほど暴露した本人が恥ずかしさのあまり悶絶することになった。
　～翌日～
（すんなり退院できたな！）
（それでは早速図書館に行きましょう！）
（いやいや、退院したばかりで親が許してはくれまい。ここは、自分の部屋で筋トレじゃ

あ！）
（いや、ここは三國志に関わる本を帰り買って貰って家で読もう！）
（うぐぐ、そうですね。図書館は明日からにしましょう！）
（筋トレは!?）
（それは、本を読みながらでいいだろう）
（そうですね。本を読むことに集中は僕がしますから、華鳳は身体を動かすこと、蓮亀は効率よく筋肉がつくように指示を華鳳にしてください）
（うむ、ならば腕立て伏せといこうかの！それならば本も読みやすかろう）
この日からこのような毎日が始まった。朝は稽古、昼は図書館等で知識を蓄えたり、学校へ、夜は筋トレ等をしながら読書という毎日を送った。勿論学業も疎かにはしない。
高校に入ってからはキューブの新たな機能を追加などもした。それは、キューブにあるスイッチを入れることで認識を妨げる被り物をしているように見せるものだ。ただキューブを持っている者はその事を認識をできないので何を被っているかは他の人にしかわからない。そして、声も誰のものかはわからないようになっている。ただし、これもキューブを持っていれば関係ない。
～現世に戻って来てから8年後～

あれから俺は高校３年生の１８歳になった。そして、こちらに戻ってきてからは８年の月日が流れていた。
また、いつ喚ばれるかもわからずにいたため、キューブとキューブを改造するための道具をいつも学ランなどにしまい込んでいた。
そして、その時は来た。
『刻は満ちた！』ピカッ
（（来たーって眩しい!!!））
またもや何かのフラッシュで目潰しをされた状態で喚ばれたらしい。もう喚ばれる時は目潰しをされるものだと思ったほうがよさそうだと、この時の俺達は思った。

「また目潰しかよ！そして、此処は何処だよ？ってん？」
「あれはたぶん、もうあのようなものでしょう！っと別れましたね」
「あの眩しさはどうにかならんのか！ふむ、身体の感覚があるの」
どうやらこの世界に来れば自動的に別れるらしい。
「戻ってこれたみたいだな。それに皆同じ顔かよ！怖いわ！」
「瓜二つどころか瓜三つのようですね。それにしても前は気づきませんでしたが、

キューブも服も別れてますね」
　同一人物と言っても理解できてしまうほど俺達は似ていた。遺伝子もきっと同じなのだろう。性格は違うが。
「そのようじゃの！今疑問に思ったのじゃが、わしらの内に誰か一人でも死んだら他の者はどうなるのかのう？」
「それもそうだな！現世では一緒だったわけだしな。別れたといえ元は同じだからな！」
「最悪なのは、一人でも死んだら全員死んでしまうことですね。それと三國志の知識を得たことでわかっていますが、僕達はこれからは敵同士になる可能性も高いですしね！」
　その仮説が正しい場合、俺達は俺達で殺し合うことはただただ悲しみを生むだけになってしまうだろうな。
「それから、現世に居たときは真名で呼びあっておったからこちらでも真名を交換しようぞ！」
「そっちのほうが呼びやすいしな！最初は俺からだな。姓名は北条、字は刹那、真名は華鳳だ」
「次は僕ですね。姓名は北条、字は刹那、真名は桃鶴です」

「最後はわしじゃな。姓名は北条、字は刹那、真名は蓮亀じゃ」
「では僕達は敵同士になるかもしれませんが、自分達では殺し合いはなしでいきましょう！殺した瞬間に自分達が死んでしまったら元も子もないですからね！」
「そうじゃのう。それに全員で警戒もして、わしらの内一人にでも殺しにかかってくる敵は全員の敵じゃしの！」
「これから、僕達のキューブを若干改造して軍事など秘密のことはわからないようにして人間関係だけはわかるようにしましょう。それなら、他の陣営の視点から敵対するものがわかったり、自分の陣営から敵対していることもわかりますからね」
「よし、次に今いる場所や時代がわからないから、人がいるであろうあそこに見える街に、改造が終わったら行ってみよう！」
～数十分後～
「そろそろ改造も終わりますし、移動しましょう」
「そうじゃな。とりあえず向かうとしようぞ」
「ああ、それと今後の予定は街に着いて人に話しを聞いてから考えよう」
こうして俺達は街が見えるほうに向かって歩いていった。
～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十八話

～刹那達ｓｉｄｅ～

俺達は今、街に向かっていた。

「向かっていたんだけどな～」

「へへへ、お前ら身ぐるみ全部置いていけや！」

「なんでこう、この世界に来た時って賊と遭遇するんじゃろうな。」

「僕の場合は会わなかったんですけどね」

「ごちゃごちゃ言ってないで、俺らに殺されるんだな！」

「てめえら！今日はこいつらを殺して宴だー！」

「そういえば俺達この世界のお金今ないじゃん！どうするよ？」

「なんなら今、この賊を逆に殺してお金に変えますか？」

「そうするのじゃ！じゃが桃鶴よ、お主戦えたのかの？」

「この身体、一応貴方達と同じ物なのだから戦うことぐらいできますよ。まあ、貴方達よりは弱いですけど」

「なんだ！なら問題はないな！相手も３０人も満たさなそうだし早速始めようか！」

「おう！」「はい！」

　そこからは、ただの虐殺になってしまった。俺達の内1人でも過剰戦力なのに、そこに3人もいたらこうなるわな。瞬く間に殺してしまい、お金になりそうな物は全部回収した。

「肩慣らしにもならんわい」

「もう少し、歯ごたえのあるやつとやりたかったな！」

「こちらは、とっとと街に行きたいのですから我慢してくださいよ！」

「わかっておる！」

「本当ですかね？」

「言い合ってないでとっとと行くぞ！ただ同じ顔が言い合いをしているところを見てる分には面白いけどな！」

　こうして、一般人なら大変なことが起きそうなことも難なく終わらせてしまう俺達だった。そして、また街を目指して歩き始めた。

　～1時間と数十分後～

「やっと着いたな！」

「思っていたより時間がかかりましたね！」

「だが、こんなもんじゃろ！」

ようやく街の門に俺達は着くことができた。
「よし、通っていいぞ！次はってお前ら同じ顔しているが兄弟か？まあ、特に変な物も持っていないし通ってよし！」
どうやら顔がここまで同じだと怪しまれてしまうらしい。それでも普通に通れることから大丈夫だとは思う。また、よくよく考えたら前の時に年代を聞くのを忘れていたため、今回年代を聞いてもあれから何年経ったのかわからないことに気付いた。だから年代ではなく曹操がまだ生きているかを聞くことになった。それでもわからない場合、今度は孫家について聞くことにした。
「とりあえず、この荷物になる奪った武器などはとっとと売ってお金に替えよう！」
「では僕達で替えてくるので、曹操が生きているかを周りの人に聞いてきてください」
「任せたぞ！もしもの時は孫家について聞くのじゃよ！」
「ああ、わかっている。お前たちも気をつけて行ってこいよ」
「はい」「ふむ」
俺達は別れてそれぞれのことをすることにした。そして、俺は人に話しを聞くことになったが、その辺の一般人に聞いてもあまりしっかりした聞けそうもなかったため途方にくれていた。
「商人にでも聞くか？っ！今近くで女性の悲鳴が聞こえたな！何処だ！」

～路上裏のある行き止まり～

「ここまでだぞ、嬢ちゃん！」

「これだから男は嫌いなのよ！近寄らないでっ！」

「へへへ、楽しんだ後はそれ専門のところに売っぱらってやるからな！」

「誰かー誰か助けて！」

「おいおい、自分からあまり人のいない路上裏に逃げたんだろ！助けになんてこねえよ！」

「残念だったな！俺は悲鳴が聞こえて助けに来たぞ！」

「「っ！」」

「いや、なんでお嬢さんのほうまで驚いてんだよ！」

「男が私のことを呼ばないで！」

「いろいろ厳しいなそれ！まあ、助けてやるから安心しろよ。さて、ところで貴様らは女性に何をしようとしていた？」

「「ひっ！ひいいいいぃぃ!!」」

俺は覇気を纏いながら男２人に威圧をした。たかが、それだけでその男達は逃げ出してしまった。俺は逃げ出した男達にはもう目もくれず今は助けた女性のほうを向いて

いた。
「貴方は私を助けて何が目的なのよ！」
「悲鳴が聞こえたから助けに来ただけだが、そうだななら1つ聞きたいことがある！」
　この時、俺はこの女性にも曹操について聞くことにした。そして、それは当たりだった。
「何を聞きたいのよ！」
「曹操という人物を知っているか？知っているのなら今も曹操は存命しているか？」
「あまり、男とは話したくはないのだけど助けられたし、その質問に答えるわ。でも質問が2つだということに気付いてる？まあ、いいけどね！」
「それはすまない。それで知っているか？」
「ええ、知っているわよ。だって私はこれから曹操様の元に遣うようとしているのだからね。これで2つの質問の答えになったかしら？貴方も曹操様の元に遣えようとでも思ったの？」
「ああ、曹操とはちょっとした仲でな、ひさしぶりに会いに行こうしたんだが、そもそも今いる場所もわからない状態でな」
「はあー？貴方今いる場所もわからないの？これだから男は無能なのよ！ここは豫州の潁川よ！わかった？」

「でもそうか、曹操は華琳は、生きているんだな！そして、ここも沛国までは遠くない場所なんだな。教えてくれてありがとうな！」
「貴方曹操様のことを今、真名らしき物で呼んだけど、そこまでの仲なの？」
「そうだよ。それと自己紹介してなかったな、俺は姓名は北条、字は刹那、真名は華鳳という者だ」
「男の名前なんて知りたくないわよ！そのうえに真名まで教えているし、なんで真名まで教えたのよ!?」
「俺の兄弟？で見た目はそっくりで姓名と字が同じ奴があと２人いるから会った時に誤解しないようにするためだからだよ」
「なんで貴方が？なのよ！それともう会うことはないと思うけど」
「いやだって、俺達曹操の元に集まるわけだし、もしかするとまた、会うことがあるかもしれないだろ？」
「うっ！……男の貴方に頼みたくはないんだけど、でも私も命は大事だし、……うがー！もういいわ！ねえ貴方も曹操様の元に行くのなら私も曹操様の元に向かうつもりだから道中私を護衛してくれないから？」
「別に俺は構わないが、そもそも嬢ちゃんは誰だ？」
「そういえば名乗ってなかったわね。男は心底嫌いだから名乗りたくないのだけど、荀

彧よ」
「そうか荀彧か、って荀彧!?」
「あら、私のことを知っているの？」
「ああ、なんとなくだが知っている」
（荀彧ってマジか！そうするとこいつが華琳の軍師として遣えることになるのか！こいつを無事に華琳の元まで送り届ける必要がでてきたな！）
　こうして荀彧を無事に華琳の元に送り届ける必要が俺にできてしまった。要するに護衛を断ることができなくなったということだ。
「ところで護衛の話しはどうなのよ？」
「断る理由もないしいいぞ」
「あらそうなの、ならこれからはよろしくしたくはないけど、よろしく」
　こうして俺達は、路上裏から出て桃鶴達と別れた場所に行った。
「僕は、人に話しを聞いてきてくださいとは頼みましたが、女性を連れてきてくださいとは頼んでませんよ？」
「そうじゃな。ところでお嬢さんはどちら様かの？」
「華鳳が言っていた通りに見た目は違いがわからないほどそっくりね！それと名乗るならそちらが先じゃないのかしら？」

((見た目の違いは俺（僕、わし）達にもわからない。だって遺伝子も全て同じだし))
「それもそうですね。僕は姓名は北条、字は刹那、真名は桃鶴です。これからの道中お願いしますね」
「これは一本取られたわい。わしは姓名は北条、字は刹那、真名は蓮亀じゃ。これからの道中たのむぞ」
「真名以外本当に一緒なのね！これは雰囲気でわからないといけないわね。私は荀彧よ、準備が出来たら出発しましょう」
((荀彧だったのですね（じゃな）これは華鳳も断れないな))
　こうして俺達は、曹操達が生きている時代と今いる場所もわかり、荀彧と共に曹操のいる沛国まで行くことになった。
～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十九話

～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

俺達は、荀彧の護衛をしながら共に曹操がいる沛国までの旅をしていた。そして、数日後やっと潁川から沛国に行くために通ることになる豫州にある郡の１つ、陳国に入るための関所に着くことができた。

「数日かけてやっと着いたな！」

「何がやっと着いたな！よ！あんなことがなければもっと早くに着いてたわよ！私言ったわよね、準備ができたら出発しましょう！って」

そうなのである。俺達は、荀彧が言ったそばから出発していたのである。そのため荀彧も疑問に思っていたらしいが、準備はできていたと思っていたらしい。しかし、俺達は、武器をお金に替えただけで特に何かを買ったわけではなかった。そのため、荀彧は荷物をしっかり持っていたが、俺達はほぼ手ぶらだった。そもそも携帯食料などがどのような物なのか俺達は知らなかったのだ。

だから俺達は、食事になるたびに猪や熊などを狩ってそれを焼いて食べたりしていたため計画していた以上に時間がかかってしまたのだ。ついでに俺達は寝るときは木と

かに寄りかかって寝ていた。勿論荀彧は寝具を使っていました。
「「その点、本当にすみませんでしたー」」
「謝らないでいいからさっさと行くわよ！」
　こうして俺達は、陳国の関所を通り陳国に入った。
「私はこの後携帯食料などを補充しに行くし、貴方達も今度は買いなさいよ！」
「では、僕が荀彧さんに付いて行って買って来ますよ。僕達は携帯食料がどのような物なのかわからないので、荀彧さん教えてくれますか？」
「それぐらいなら構わないわ」
「蓮亀、俺達はどうする？」
「そうじゃな～？……そうじゃ！お主は曹操に何かプレゼントを買えばよかろう！わしもそれに付いて行くのじゃ」
「そうだな、華琳のやつに何か買ってやらないといけないよな。あいつにも寂しい思いをさせちゃったろうし」
「わしも雪蓮と蓮華に後で買うつもりじゃからな！それの参考にさせて欲しいのう」
「それでは、1時間後にこの門に集合しましょう！」
「「おう（うむ、ええ）」」
　そして、俺達はまた、別れて買い物を始めた。そして、俺と蓮亀は華琳、雪蓮、蓮華

の好きそうな店を回って見ていた。
「こう言うの華琳が好きそうだけどどう思う？」
「わしは記憶はあるが、実際に会ったことはないからのお、お主が決めたほうがそれが何であれ曹操殿は気に入ってもらえると思うぞ！」
「それもそうだな、ならこっちにあるシンプルに銀の指輪にするよ！」
「お主、なかなかせめるのう！」
「いや、この時代だと婚約指輪はないから婚約はしているが、婚約指輪という意味にはならないぞ！」
「そうじゃったか！ならわしも銀の指輪にするぞ！」
　こうして俺達の買い物は終わった。また、携帯食料を俺達が食べる分を用意するとかなりのお金がかかるため携帯食料は程々に買ってやはり獣を狩ってお金をうかすことになった。
　それからまた2週間後に沛国に入るための関所に着くことができた。ここまでの道中は獣も狩ったが、賊も2回現れたため倒しお金に替えることのできる物をとっておいた。
「ここが沛国に入るための関所か」
「そうよ、ここからまた数日かけて曹操様がいる街まで行くのよ！」

「もうすぐ曹操さんに逢うことができますね華鳳！」
「ああ、やっと逢うことができる。８年は長かったな」
「逢うときに驚かせてみてはどうかのお？まあ、驚かすと言ってもキューブを使って顔と声を隠すだけじゃが」
「それはなかなか面白そうだな。やってみるか、ただ最初からやるとそもそも逢ってもらえそうもないから逢う直前にやろう！」
「はい（うむ）」
　こうして俺達は華琳に逢うときに驚かすことにした。そして、歩き始めてからあることに気付いた。ここからは内緒話しをするため３人で小声で話し始めた。
「そういえば、８年逢っていない間に他の男と一緒にいる可能性があるよな？」
「そうですね！」
「これは、わしらのところも下手するとあり得るな！」
「そうなんだよ。これから華琳に逢うのにそいつがいたら俺絶対邪魔なやつだよな！」
「特に婚約は親が認めているとはいえ、この時代で８年もいないわけですからね。子供の時だと下手すると違う人にまた恋するかもしれないですよね！」
「どうしよう？もし逢った時に違うやつがいたら。俺ショックで自殺するかもしれない」

「それは、僕達も一緒ですよ！」
「そうじゃよ！もしもそうなったら本当に立ち直れないぞ！」
「「大丈夫かな華琳（桃香、雪蓮と蓮華）は」」
俺達はもしもの可能性に気付いてしまったせいで歩く早さがかなり落ちてしまった。そして、それから数日後華琳がいる街に着くことができた。正直心臓の音がよく聞こえる。自分でもここ最近うまく寝れてなかったりしているため緊張していることがわかる。
そして、華琳の屋敷に俺達は着いてしまった。
～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十話

～曹操ｓｉｄｅ～

数週間前、刹那達がこの世界に来た時に華琳は何かに感じていた。

「何かしら？今日は何か良いことがあるかもしれないわね！こう胸が大きく音がなるような、そういえば華鳳と初めて逢った時もあの時はわからなかったけど似たようなことがあったわね。華鳳と別れてもうはや８年になるのね。最初のころは悲しくて何をするにも涙が止まらなかったけど、部下の春蘭とその妹の秋蘭ができてからは涙も出なくなったわね。でもやっぱり貴方に逢えないことがとても寂しく感じるわ。華鳳、貴方はいつ戻って来るの？私がこんなにも逢いたいと思っているのだから早く戻って来なさいよ！」

そう言って華琳は、今日も華鳳のことを待ちながらもやるべきことをやり始めた。

～曹操ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

◆◇◆◇

～刹那達ｓｉｄｅ～

「やばい、本当に緊張してきた。……ん？」

「どうかしたのですか？」
「いや、俺が居たときは門番が居なかったからな。今いることに少し違和感を感じただけだ」
「それは、時間もそれなりに経てば曹操さんなんですから偉くなっていて警備もそれなりに厳しくなっていますよ」
「とりあえず、門番に話しかけて華琳に逢えるようにしてもらおう！」
　そうして、俺達は門番に華琳に逢えないか話しかけた。
「すみません、俺達曹操さんの知り合いなのですが逢わせてはもらえませんか？」
「なんだお前達は？俺達はそれなりに曹操家の門番をしているがお前達のことは知らない。また、曹操様に言い寄ろうとしている者達だろ！早々に立ち去れ！」
「そこをなんとか逢わせてはもらえませんか？」
「ならんと言ったらならん！早々に立ち去らなければ切り捨てるぞ！」
　かれこれ数分頼んでみたが、何度言っても駄目らしい。どうしようかと俺達が悩んで居たときに彼女が現れた。
「どうかしたのですか？どうやら騒がしいのですが？」
　そこに現れたのは華琳御付きの侍女その１の人だった。
「は！これは鞍山殿、どうやらまた曹操様に言い寄ろうとしている輩のようです。しか

し、私達が早々に追い払うのでご安心ください。」
「そうですか。なら頼みましん?……」
彼女がどうやら鞍山さんということをこの時初めて俺を含めて知った。
そして、こちらをじっと睨み付けるように見詰めるまま固まってしまった。
「あちらの者達を見詰めて、どうかなさいましたか?」
「いえ、私の勘違いなのかしら?…すみませんが彼らに質問があるのでそこを通ってもいいですか?」
「「は!」」
「すみませんが質問があるのですがよろしいでしょうか?」
「はい。大丈夫です。ただあまりそこにいる女性には聞かれたくないので小声でお願いします!」
「わかりました。では質問させていただきます。貴方は、お嬢様の真名、及びお嬢様が好きな御方でお嬢様が待ち続けている御方の姓名から字、真名とお嬢様の朝の癖を知っていますか?」
「ええ、勿論知っています」
「ほう、自信があるようですね!ではお答えください!」
「まず、お嬢様というのが曹操であれば真名は華琳だ。そして、自意識過剰になってしま

うが待ち続けているのは俺で、姓名は北条、字は刹那、真名は華鳳だ。それと、華琳の朝の癖は寝ぼけて接吻魔になることだな。これがまたその時の記憶がなくなっているんだよな。まだ

直ってないのか?」

「そうですよね。答えられるわけがえ?え?本当に?本当に華鳳様なのですか?」

「俺はそのつもりだし、俺の他にも真名が華鳳のやつがいるのか?華琳御付きの侍女その1の鞍山さん」

「……」ポロポロ

「うおうい!何故泣き出す!?どうかしたのか?どこか体調の悪いところでも?大丈夫か?鞍山さん」

「はい、大丈夫です。ただやっと戻って来ていただけたのですね。どれだけお嬢様が悲しみ、待ちわびていたことか!」

「そのことについては本当にすみません!」

「いえ、華鳳様もお嬢様と別れねばならない状況になってしまい悲しい思いをしたのはわかっていますからその事ではありません。ただこれでやっとお嬢様はずっと待ちわびていたことが報われ、悲しい思いをしないですむと思うと涙が出てしまいました。なので華鳳様が悪いということではありません」

「そうか。それで、俺は華琳に逢いたいのですか。逢わせていただけますか?」
「勿論でございます!むしろ逢わせるどころかこれからはずっと一緒に居てもらわなくては困ります!」
「よかった。長い間待たせてしまったから下手すると他にも婚約者ができてしまったのかと思ってしまっていました」
「何を馬鹿なことを、お嬢様が華鳳様のことを忘れ、他に婚約者を作ろうなどとするはずがあるわけないではないですか!」
「そうですか。それを聞けて安心して華琳に逢うことができる」
「ただ、華鳳様がいない間に悲しみを紛らわすためか、ちょっと変な癖がでてしまいました」
「え?なんですかそれは?」
「それは逢っていただいてのお楽しみということでお願いします」
　こうして俺達は華琳に逢うことが可能になった。
「鞍山殿、この者共を通してよろしいのですか!?」
「ええ、安心してください。この人、華鳳様は華琳様の大事な方ですので大丈夫ですよ!」
「貴方、本当に何者なのよ!?」

「だから言ったろ、曹操とはちょっとした仲だって」
「これは!?先程は申し訳ございませんでした」
「いや、しっかり仕事をしていることがわかったから良いよ!ただ次からはすぐに追い払わずに少しは華琳と話しをさせてやって欲しい!もしかしたら華琳のお目にかかる才能を持つものがその中にいるかもしれないからな!」
「は!」
「それでは、お嬢様のいる部屋へ御案内しますので、ついてきてくださいませ」
俺達は、華琳に逢うために鞍山さんについていった。そして、華琳の部屋まで行く道中で鞍山さんに質問をされた。
「そういえば、華鳳様失礼ながら質問をさせていただきたいのですがよろしいでしょうか?」
「ええ、構いませんが」
「それでは、何故そちらの方々も同じような顔をされているのでしょうか?」
「少し複雑な話しなので、できれば華琳がいるときに一緒に聞いていただきたいのでその時でもいいですか?」
この話しは何度も話すのは得策ではないし、できれば纏めて聞いて、質問などをして欲しかったため華琳と一緒に聞いてもらうことにした。

「そういうことならば構いませんが」
「ではそれでお願いします」
「もうそろそろお嬢様の部屋へ着きます」
　そう聞いた俺達はキューブを使い被り物をしているようにした。
「何故馬の頭の被り物をし始めたのですか？」
「そうよ！いきなり馬の頭の被り物なんかして今から曹操様に会うのに、ふざけているの！」
（（（今、馬の頭なんだ!!!））））
「いや、ちょっと逢うときに驚かそうと思ってな！」
「ふふふっ！なるほどそういうことですか！ならば私もご協力いたします」
「曹操様を驚かせようなんて貴方何を考えているのよ！」
「だが、曹操の驚いた顔なんてめったに見れないぞ」
「そう言われると見たくなってきちゃうじゃない！わかったわ、でもどうなっても知らないわよ！」
「大丈夫だよ。たぶん、きっと、でもあいつ切れるときは俺にでも普通に切れるしな、何もないといいな！」
　そうこう話している間に華琳の部屋に着いた。ただ部屋の中で華琳以外の女性の声

が聞こえているんだが、その声がちょっとあっちの声なんだよな。男としてここにいるのが今、とても気まずい！
「この声ってもしかして？」
「駄目じゃ桃鶴！それ以上は言ってはいかん！」
「お嬢様！お客様達がお見えになりました。ご部屋に失礼してもよろしいでしょうか？」
「今日の予定に私に用のあるやつはいないはずよ！」
「急用らしく、できれば今すぐお会いしていただきたいのですが！」
「チッ、今春蘭と秋欄とお楽しみなのに邪魔してくれたわね！わかったわ着替えるからそうつらをそこで待たせておきなさい!!」
（（あっ！やっぱりそういうことなんだ！））
「わかりました。それでは準備ができましたらお呼びください」
　～ここからは小声です～
「嘘だろ！俺がいなくなってからそっちに目覚めちゃったの華琳！」
「そうなのでございます。華鳳様はどう思いますか？」
「いろいろショックなのですが、俺が不甲斐ないばかりに華琳もそういうことに目覚めてしまったと思うと、俺は華琳に何も言えません」

「蓮亀、これはやっぱり下手すると、僕達のところもいろいろショックなことが待っているかもしれないね」
「想像したくないのじゃ！」
「俺、やっぱり見捨てられたらどうしよう？」
「「きっと、たぶん大丈夫でしょう（じゃろう）」」
「全然安心できねー！」
～小声終了～
「準備ができたから入って来ていいわよ！」
「では失礼させていただきます！」
俺達は華琳の部屋の中に入った。華琳は中央に座っており、その左右に女性が２人立っていた。華琳達の顔を見たらこちらを見て固まっていた。
「鞍山！何馬の頭の被り物を被っているやつを3人もいれてくるのよ！」
「ですがこちらの方々が本命でございます」
「私の知り合いに馬の頭の被り物なんて被るやつなんていないわよ！」
「そうでございましょうか？」
「そうよ！まあ、もういいわ！そちらの女の子からにするわ！ところで貴方何をしにここへ来たの？」

「は！私は姓名は荀彧、字は文若、真名は桂花と申します。ぜひとも曹操様の元で軍師として働きたくと存じます」
「そう、そういえば貴方袁紹のところで軍師をしていたわね！……いいわ！貴方の力存分に私のために振るいなさい！」
「は！ありがとうございます！」
「さて、そちらの馬の頭のをしている方々は私にどのような用件があるのかしら？」
「この服を見てどう思う？」
「どう思うって服だけの話しをしに来たの？まあ、いいわ。そうね変わって……貴方達はそれをどこで手に入れたの!?」
　華琳は、何かに気づいた用に俺に詰め寄ってきた。
（こんなに顔を近付けて来ちゃって8年間の間にまた一段と可愛くなったな華琳）
「何かしら？貴方に近付いて気付いたけど何だかとても懐かしい匂いがするわね貴方！ってそんなことよりどこで手に入れたのよ!?」
「こういうときは、内緒って言いたいけど、華琳がわかる風に言えば華琳の待ち人と同じ国の服だよ！」
「な!?何故貴方が私の許しもなく真名を呼ぶのかしら？殺されたいの？それとも貴方真名の意味を知らないの？それに貴方が何故あの人のことを知っているの！古参の曹家

の者しかあの事は知らないはずなのに！」
　華琳がそういった時に後ろに控えていた女性２人も少し驚いていた。聞かされてなかったのだろう。
「真名の意味は知っているし、華琳の真名は許しを昔に許されていたはずだがまだ気付かないかな？なんなら待ち人と逢った時からのことも話せるぞ！」
「貴方は何を言っているの？私が昔に真名を教えた人であの事を話せる者なんてあの人ぐらいしかい・・な・・い……え？嘘よね!?貴方なの？……華鳳！」ポロポロ
　やっと逢えると思ったのか華琳は泣き出してしまった。その時点で部下になった桂花を含めて部下が驚いた顔で華琳を見ていた。
（（そろそろ頃合いだな（ですね、じゃな））
　そう思った俺達は、華琳達に正体を明かすことにしたためキューブを取り出し機能を停止させて被り物を脱ぐように見せた。
「やっぱり、そのキューブを持っている貴方は!?」ポロポロ
「そうだよ。待たせてしまって本当に悪かった。もう離れるようなことはないようにするよ。だから華琳！これからはずっと一緒だ!!華琳愛しているよ」
「華鳳、華鳳、華鳳やっと、やっと貴方に逢えた！私ももう離さないわ！お願いされたって離れないもん！華鳳、私も愛しているわ」ポロポロ

そして、お互いに顔を近付けて接吻をした。そして、その光景を見ていた部下達は顎が外れてしまうのではないかと言うほど口を大きくあげて驚いていた。

～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十一話

～曹操ｓｉｄｅ～

私達はやっと逢えたことによる嬉しさで人目を気にせずにその場で接吻をしてしまった。まだ華鳳はいいだろう。これから部下になるよう春蘭と秋欄に見られてもそういう人なんだと思われるだけなのだから。

だけど私はかなりの間こんな素の自分を出したことがなかったし、部下の前で出せるはずもなかったのだが、それを見られてしまった。実際に春蘭と秋欄、さっき部下になったばかりの桂花も驚いた顔でこちらを見ているし。私はつい華鳳がそばに居たことでその視線に耐えられず華鳳の背中に隠れてしまったのも私の失態だわ！

「とりあえず華琳、まだあの時の曹家との話しは無しにはされていないのか？」

（きっとこの空気を壊そうとしてくれたのね。そういうところが優しいんだから）

「おっほん！ええあの話しはいまだに有効になっているから安心して、御母様達も貴方の帰りを待っていたわ！それと後ろにいる貴方と同じ顔の人達のことも紹介してくれる？」

「そうかそれは有り難い！御義母さん達は元気でいるんだな。あと俺達の事情は皆が纏

まっている状態で話しをしたい！」
「わかったわ！それなら前に御母様達と会った場所で話しをしましょう。春蘭、秋欄、桂花もついてきなさい！鞍山、貴方もね！」
「は！しかし、この男、信用できるのでしょうか？」
「秋欄の言う通りだ！いきなり現れた男を曹嵩様達に会わせてよろしいのですか？華琳様！」
「あら、私の指示に従えないの？でもそうね、貴方達はまだ事情を知らないものね。その話しはあちらの部屋で話すわ。それと桂花、貴方は何も言わないのね」
「は！私はこの者達とここまで来たので何かしらの事情はあるのことは存じていたので、それに初めて会った時も曹操様とちょっとした仲とは言っていましたので」
（何がちょっとした仲なのよ！隠すためとはいえ、これは何かお願い１つね！）
「そういうことね。ならいいわ！華鳳も構わないわね！」
「ああ、今後のことで重要な話しだからな重臣達には聞いていて欲しいからな！」
「そう、ならさっさと向かいましょう！」
私達は初めて華鳳が御母様に会った部屋に向かった。
～曹操ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～
◆◇◆◇

～刹那達ｓｉｄｅ～

俺達は今話し会う部屋に着いた。それとどうやら御義母さん達はもう部屋にいるらしい。

「あら、貴方また緊張しているの？大丈夫よ今回は御母様達も最初から喜んで迎えてくれるわよ！」

「そうか、ならいいんだけどな。ここ最近の俺は緊張しかしていない気がする」

「なんでよ？」

「ひさしぶりに華琳に逢うと思うと、他の男がいたらどうしよう？とか

あの事が無しにされていたらどうしよう？とか

そもそも逢ってくれなかったらどうしよう？とかでね。実際に俺が居ない間に悲しみを紛らわすためか女性同士のあっちに目覚めちゃってたし」

「もう！そういうことは心配しなくてもいいのにって、え？さっきの聞こえてたの!?嘘よねー！お願いだからなかったことにして！」

「いや、無理だろ！あと俺達もあそこにいたんだから聞こえてるに決まっているだろ！あの時はこっちのほうがいろいろ驚いたわ！」

「嫌よ！せっかく逢えたのに、お願いだから嫌わないで！直すからだから私を捨てないで!!」グスグス

「今更俺が華琳のことを離すわけないだろ！あと今さっきの発言は部下２人に失礼だから！そういうことを含めて華琳のことを愛しているっていたんだよ！だから泣き止めよ。な？」
「グスグス、うん！本当に貴方を裏切るような行為をしてしまってごめんなさい」
「だからいいって、それとできればそういう行為は減らしてくれると助かる。そうでもないと華琳と逢う回数が減るし」
「あら？なら貴方も一緒にすればいいじゃない！」
「いや、それはいろいろまずいし、その相手に失礼だろ！」
　この時俺と華琳の後ろにいた秋欄と春蘭がめちゃくちゃ縦に首を振っていた。
「私の命令はほぼ絶対よ！」
「どこの暴君だよ!!華琳後ろを向いて見ろよ！部下２人がめちゃくちゃ涙目だぞ！それに華琳の部下達が俺に馴れるまでは、できれば２人っきりでいたいしな」テレ
「もう華鳳ったら、でもそうね。なんなら今日からでも」イチャイチャ
　そうこうさらに数十分間華琳とイチャイチャしていたら部屋の中から御義母さん達から
「いい加減に早く入って来なさい！」
　と怒られ、俺達は後ろを振り向くと何かを吐いて気持ち悪そうにしている皆がいた。

とても申し訳なかったです。このあと蓮亀と桃鶴に文句をかなり言われた。
　そうして、やっと俺達は部屋の中に入った。
「貴方達は何をやっているのですか！大事な話しがあると言うので集まって待っていれば、扉の前でイチャイチャと、そういうことは話しが終わってから華琳の部屋でやっていなさい！」
　ごもっともなことを言われてしまった。
「すみません。それと無事に戻って来ることができました」
「それはよかったです。それで今後の話しと華鳳君の後ろにいる同じ顔の人達のことの話しですね！」
「はい！まず、全部話すので質問はその後でお願いします！」
「わかりました。それでは皆さんもそれでよろしいですね？」
「「「「はい！」」」」」
「それではまず、蓮亀と桃鶴は俺でもあります。あちらに戻った時に知ったのですがどうやら俺はここに来た時に俺を含め３つの性格の俺に別れたようなのです！戻った時に各々が経験したことが記憶として入って来たことでわかりました。まあ、華琳との経験が一番激しかったこともそれで知りました」
「華鳳！皆がいる前で言わなくてもいいでしょうが！」

「次に僕から話します。僕は前世の時の性格が出てきた華鳳です。姓名、字は華鳳と同じで真名は桃鶴と言います。

僕は華鳳がここに居たとき、幽州にある涿郡の涿県の外れにある桜桑里と言うところにいました。そこにいる僕にとって華鳳にとって曹操さんにあたる人と逢い、桃鶴と言う真名を貰いました」

「次にわしは、前前世の時の性格が出てきた華鳳じゃ！姓名、字は先程と同じく真名は蓮亀と申す！

わしの場合は徐州の下⊠国におった。そこで賊の捕虜になっていた者を助けそこの家で世話になっとった。次いでに華鳳にとって曹操殿にあたる者もおる。

まあ、捕虜になっていた者とその姉なのじゃがな。真名もあやつらから蓮亀という名を貰った」

「ここからが大事なんだが、俺達は1人でも死ぬと多分他の俺達も死ぬことになると思う」

「「「「?!?!」」」」

「あちらの世界に戻った時に俺達は1人の中に戻った。この事から3人合わさってあちらに生きていた俺という1人の人間だったんだ。だけどこちらで3人に別れたせいで独立した人格が出来てしまったんだ！

だからあちらに戻っても1人の体の中に俺達は3人とも意識しっかりした状態でいたんだ。そして、多分1人が死ねば他の俺達も死ぬことになることの仮設が建ちそれがあっている感覚が俺達はあったんだ」

「今後の予定は僕が話します。ここにいる一部の人は知っていますが僕達は未来に戻りました。その時に歴史を調べてあることがわかりました。

それは、歴史通りにいけば僕達3人は愛する人のために争うことです。要するに愛する人同士が対立するから僕達も戦う訳なのですが。

しかし、先程華鳳が言っていた通り1人が死ねば3人死ぬ。それは回避したいし、曹操さんもそれは望みませんね？そこで婚前旅行をしてみませんか？」

「早い話し、わしらの愛する人達と合流して婚前旅行をしながら今後の話しをしないか？と言う話しじゃよ！」

「俺達の話しはここまでだ。質問は？」

そこからは俺達以外で話しをしていた。そこで一応部下達にもこれまでのことを話し、部下達も納得はしてくれたようだ。ただ荀彧は途中驚いた様な顔でこちらを見てきたが。

そして、御義母さん、華琳が質問をしてきた。

「まず、どのような婚前旅行にするつもりで何日間の予定ですか？」

「まず、僕達は歩いて婚前旅行をするつもりなのでかなりの月日がかかると思います。なのでその間は曹操さんの仕事を引き継ぎをしてもらいたいです。
　道はここから徐州の下⊠国に行き、蓮亀の愛する人達を連れ、青州と冀州を通り、幽州の涿郡にある桜桑里にいる僕の愛する人を連れ、そのまま冀州と⊠州を通り、ここに戻って来ます。他の僕達はまた通った道を行きそれぞれの元いたところに戻ります。以上です」
「わかりました。準備はしておきます！なので話しも大切ですが、ぜひ楽しんできてください」
「「はい！」」
「次にわたしよ。婚前旅行には部下達はなしよね？」
「そのつもりだ」
「ならいいわ！春蘭達は私がなんとかしておくわ！」
　こうして婚前旅行への計画が始まった。そして、俺達の後ろでは華琳と華琳の部下達がそれなりに揉めていた。だが、結局華琳に言い負かせられていた。
　～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十二話

～刹那達＆曹操ｓｉｄｅ～

「で、なんでこうなったんだ？華琳」

何故かは知らないが華琳の部下である夏侯惇と戦うことになった。そして、それを先程話しをした

「私は華琳様の部下なので華鳳様が華琳様の夫になるのであれば、必然的に私は貴方様の部下になる！そのうえ華琳様が夫にするぐらいだから認めているのだろう！しかし、私は貴方様のことをまだ知らないし、貴方様も私達のことを知らないだろう！だから私達を一騎討ちをして認めさて貴方様のことを認めさてくれ！」

夏侯惇のやつがとても華琳のことを大事にしてくれていることがわかる。またまあ、この時代だから戦ってみれば何となくどんな人かもわかるのだが

「言っていることはわかるが、華琳？」

（この模擬試合なんか嫌な予感がするんだよな！気のせいかな？）

「だって、私の護衛をするって聞かないの！だったら華鳳のほうが強いことを証明すれば春蘭達が護衛しなくてもすむって話しになったのよ！」

「で、本音は？」
「私も貴方の今の強さを知りたいし、戦っているところ見たいんだもん！」
「だもんって華琳よ、まあ、可愛いから良いけどさ。はあ～わかったよ戦ってやればいいんだろ？」
「ええ、そうよ！」
「では、始めるとしようぞ！」
「ちょっと待った！華琳どれくらい出せばいい？」
「そ～ねえ今の貴方がどれくらいの強さかは知らない1回は全力を見てみたいわ！」
「わかったよ。なら最初の1回は全力を出すから2回目で俺に華琳を任せられるか見てくれよ夏侯惇！」
「貴方様は、私を舐めていらっしゃるのか！2回目も全力でかかってこい！」
「まあ全力を出して反応できたらね！じゃあ行くよ！」
「かかってこい！」
「よっと！これで終了」
「っ!?」「「「「!?」」」」
俺はまず、全力で覇気を出した。この時点で桃鶴、蓮亀以外の観客は怯んでしまった。勿論、夏侯惇も怯み体が硬直してしまっている。あとは全力で走って夏侯惇の首筋に木

刀を添えた。これだけで戦いは終わってしまった。
「でもこれじゃあ納得いかないでしょ?」
「ああ、貴方様が強いことはわかった。だが、できればしっかりとぶつかり合いたい!」
「わかった。なら次は覇気を使わずにお前の全力にあたると思われる4割でやり合おうか!」
「貴方様のことは認めました。ですので、真名を貴方様に預けたい!よろしいでしょうか?」
「ならこれが終わったら預かろう!次はそちらに先手を譲ろう」
「は!それではいきます!」
　それからは、ひたすら攻防が続いた。あくまでも自分の力を夏侯惇に見せるための戦いだったが、今はこの戦いを楽しんだ。だが、いつまでも続けているわけにもいかないのでそろそろ決着をつけようとしよう。
「次の一撃で決めようか!」
「わかりました。この全力の一撃で決めます!」
「はあああぁぁぁぁ!!」
「「ばきっ!」」
　この時お互いの木刀がぶつかり合った瞬間に今まで負担がかかっていた部分から折

れてしまった。
「へ？」
「あっ！」（自分達も気を付けよう）
「うおっ！」「キャッ！」
「むぐっ！」
「「「「なっ！」」」」
　この時俺達は全力で向かっていたため勢いを殺すことができないうえに俺のほうが勢いが強かったため夏侯惇を
　押し倒してしまい接吻をしてしまった。この時の俺は何も考えることができなかった。
　また、木刀が折れた時点で桃鶴と蓮亀はこの後のことを察していたらしい。
「ごめん、大丈夫へぶっ！」
「貴方と言う人は、私の部下に何やっているのよー！」キィー
　俺は夏侯惇に謝り切る前に華琳から殴られた。そして、この後、俺も自分が悪いことは一目瞭然だったため華琳の気がすむまで殴られたため顔が真っ赤に腫れてしまった。しかし、殴る勢いが凄すぎて途中から皆が止めに来るほどだった。
「ぼんどうにずびばぜんでしだ」ボロッ

「いえ、そのこちらこそすみません」
「ふん！気が収まらないわね！もっと殴ればよかったかしら！」
「いやいやいや、充分殴ったでしょ!!」
（同じ顔が殴られていると僕（わし）も殴られた気がして震えが止まらないです（のじゃ））ブルブル
「そうかしら？まあ、いいわ！そのかわり今日は今までの分も含めて甘えることにするわ！」
（俺の身体今日、もつかな？）
　こうして、いろいろハプニングはあったが模擬試合は終わった。そして、真名を預かることになった。
「とりあえず、模擬試合も終わったし、私達の真名を預けるわ！私は姓名は曹操、字は孟徳、真名は華琳よ！これからよろしく頼むわね桃鶴、蓮亀！」
「よろしくお願いします（するのじゃ）」
「私は姓名は夏侯惇、字は元譲、真名は春蘭だ！華鳳様、これからよろしくお願いいたします。それと桃鶴と蓮亀もよろしく頼む」
「これからは一緒に華琳を支えよう！」「よろしくお願いします（するのじゃ）」
「は！」

「私は春蘭の妹で、姓名は夏侯淵、字は妙才、真名は秋欄です。華鳳様、姉者共々よろしくお願いいたします。桃鶴殿も蓮亀殿もよろしく頼みます」
「よろしく頼む！」「よろしくお願いします（するのじゃ）」
「曹操様、私も教えなければいけませんか？」
「そういえば桂花、貴方男嫌いだったわね。でも一緒にここまで来たのでしょう？それでも嫌なのかしら？」
「いえ、他の男達と比べれば全然大丈夫です。旅でも華鳳…様と桃鶴、蓮亀の非常識っぷりはよくわかりましたし」
「ならいいじゃない。それとも私の命令を聞けないのかしら？」
「いえ、大丈夫です。でも貴方達は特別ですからね！私の姓名は荀彧、字は文若、真名は桂花よ！華鳳…様は曹操様のためにもよろしく頼みますが、貴方達は前も言ったようによろしくしなくてもいいわよ！」
「できるだけ早く俺達に馴れてくれよ？」
「男嫌いなのはよくわかってますから無理はしなくていいですよ」
「無理が一番よくないからのう」
　こうして、俺達の真名交換は終わった。しかし、この時まだ嫌な予感が残っていたのだった。

そして、やはりその嫌な予感は当りそれは、風呂場で起こった。

～風呂場～

「ふ～。いい湯だな！毎日入れるようになってよかったよ」

「華鳳が居なくなるまでの間にいろいろ教えてましたからね！」

「わしの所も教えたのじゃ！」

「でも貴方の場合は華鳳ほど上手く教えてあげられていないじゃないですか！ところでこの黒い布は何ですか？華鳳」

「いや、なんか嫌な予感がしてな。必要になる気がしたんだよ」

「じゃが、必要になる場面などこの場で1つしかないのじゃが？」

「早速来たわよ！やっぱり身体まで貴方達は一緒のようね！」

「そうそう、こんな感じで華琳が来るようなってうおっ！まじか!?」

「「必要になりましたね（なったのじゃ）」目隠し

「俺達は目隠しをして後ろを向いてるから早く出ろよ！」目隠し

「嫌よ！ほら、貴方達も早く入ってらっしゃい！」

「「本当に入んなきゃだめですか!?」」

「この声って、華琳！お前は春蘭達も連れてきたのかよ!?」

「当り前じゃない！私は今後出来るだけ貴方から離れるつもりはないわよ？それが家の

中であってもね」

俺達は結局後ろに向いて目隠しをしたまま華琳達と一緒に風呂に入ることになった。

「しかし、昔と違って体型も変わってきてるんだから昔の様に一緒に入るわけにもいかないだろ！」

「あらでも、下手すると華鳳には、ここにいる子達とは私の様な関係を結ぶことになるかも知れないわよ？」

「そう言うわりには、さっきは容赦なく殴ってきたけどな！」

「だって、まだ私の許しがある前にあんなことをするのだもの。しょうがないでしょ？」

「逆に許しがあればいいのかよ！それとお前達はそれでいいのか？今日突然来た男の嫁に宛がわれる感じで！」

「私は華鳳様とはもう接吻してしまったし、できれば責任をとってもらいたい」カオマッカ

「私も姉者だけにしておけないので」カオマッカ

「私は嫌よ！でも貴方には初めて逢ったときに救われているし、……貴方なら嫌だけどいいわよ！光栄に思いなさい！」カオマッカ

（（ツンデレだ））

（これがツンデレというのだったかしら？）

「そう言うことで春蘭達のこともお願いね華鳳！でも勿論正妻で一番は私よ！」
「あ～もう！わかったよ！出来るだけ平等に愛せるようにするよ。それでいいか？」
「それでいいのよ！皆もそれでいいわね？」
「「は！」」
（（僕（わし）達は空気だ））
「ところで１つ気になったことがあるのですがよろしいでしょうか？華鳳様」
「なんだ？秋欄」
「いえ、華鳳様は華琳様が話しているので何となくわかるのですが、話していない状態だと桃鶴達と見分けがつかなくて何で判断すればよろしいのかと」
「そういえば、私もそれがわからなかったな！」
「私も旅の時は何となくの雰囲気で判断してましたからね」
「私も華鳳は愛でわかるけど桃鶴と蓮亀はわからないわ。華鳳違いを教えなさい！」
「と言っても、俺達の違いなんて真名としゃべり方と雰囲気と性格ぐらいだからな～。見た目の違いはないんだよ。折角だし風呂から出たら髪型を変えるか？」
「そうですね。髪型で判断してもらうことにしましょう！」
「それが無難じゃな」
「そう、わかったわ。それならとっとと出て変えてきなさい！」

こうして、俺達を見分けるために髪型を変えることになった。

そして、俺は変わらずそのままで桃鶴はキューブを改造して眼鏡（度は入っていない）にも出来るようにして眼鏡をかけ、蓮亀はポニーテールのような感じにした。

「じゃあ、変わらないのが華鳳で、眼鏡が桃鶴、ポニーテールが蓮亀なのね？」

「ああ、これなら見分けがつくだろ！」

「そうね、あとは寝るだけね！」

「悪いが今日は一緒に寝ないぞ！」

「何でよ!?８年も我慢してたのに！」

「いや流石に他の桃鶴と蓮亀に悪いだろうが！一緒に寝るのはあいつらの許しがあってからな！だから今日はあいつらと一緒に寝るよ」

「もう！でも華鳳のそういう優しい所が好きよ♪そうね、明日には新しい部屋を用意しておくから今日は春蘭達で我慢するわ」

「ほどほどにしとけよ。あと俺とそういう行為をするのはあいつらの愛する人達と合流してからな？」

「貴方は後何日私に我慢させる気なのよ！」

「怒るな怒るな、今日はとりあえずお休み♪」

「今日はこれで我慢してあげるわよ♪お休みなさい♪」

「「んっ」」

こうして、今日は無事に華琳とも逢え婚前旅行の一歩を踏み出せた。

～刹那達＆曹操ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十三話

～刹那達ｓｉｄｅ～

翌日、明日には出発出来るように準備をする1日にすることになった。

しかし、準備をするために別れる前に俺は華琳の部屋でお土産を渡してしまうことにした。

「華琳、お前には8年間も悲しい思いをさせてしまったからここまでの道中で買ってきた物があるんだが受けってもらえるか？」

「私に？でも貴方から貰える物ならば何でも喜んで受け取るわよ♪何かしら？」

「俺達の時代だとそれなりの意味のある物なんだけどこの時代だとまだそこまでの意味はないだが、この銀の指輪を受け取って欲しい！」

「貴方の時代だとどういう意味があるの？この時代だとほとんどただの服飾用品だけども」

「俺達の時代だとある一定以上の年齢になって渡すと婚約や結婚する人に自分の想いを伝える意味合いで渡す物なんだけどどう…かな？」

「貴方がそこまで考えて渡してくれるなんて嬉しいわ！勿論貰うわよ♪でもそうね、な

ら他の子達にも後で渡さないといけなくなるわね！」
「それもそうだな。また、お金を貯めてまとめて買っておこうと思うよ」
「それがいいと思うわ！それじゃ、準備をしに行きましょう！でも本当にありがとうね♪いつから私からも何かしらプレゼントをするから楽しみにしてなさい！」
「それは、楽しみにしているよ！このあとは荷物をまとめて寝具を買うぐらいかな？水も充分用意したし」
「食料品はしっかり用意しなくていいのかしら？」
「そこはほら、旅の道中で調達するから大丈夫だよ」
「貴方のそういうところが非常識っぷりなのでしょうね」
　こうして、俺達を明日のための準備を各々始めた。
　そして、その日の夜俺達は今後も話しをしていた。
「結局昨日はしなかったのですか？」
「お前達がまだ他の妻に会ってないのにそれは流石にできないからな」
「そのわりには昨日はわしらの前でいちゃついておったがな！」
「そのへんは勘弁してくれよ！」
「そのこと置いといてとりあえず明日からは数日間かけて蓮亀の妻達のところに向かいましょう。それでいいですね！」

「「おう！」」
「あっ！それと忘れてたけど今後の方針はどうするんだ？三国で同盟を結ぶ感じでいいのか？」
「できれば一番それがいいのですが、そもそも桃香が国を治めることができるのか心配なのですよね」
「そこは今後仲間になってくれる奴等に一緒に頑張ってもらうしかないじゃろ！桃鶴も人一倍頑張らねばなるまい」
「まあ、もしもの時は敵同士になったとしてもその時は助け合いでいこう！多分一番土台ができていない蜀が大変だろうし」
「その時は本当にお願いしますね」
「だからこそこの旅行でわしらの相方同士でも仲良くなってもらいたいのじゃ。うまく成功させねばな！」
「話しはそろそろ終わりにしよう。明日は早い事だし今日もう寝よう。お休み」
「「お休み」」

～旅たちの日～

「今回の旅は婚前旅行でもあるからのんびりしながら合流して行こう」

「そうですね。ただ合流は早くして合流し終えてからのんびりしたほうがいいとは思いますが」
「そうじゃ、それと今後のためにも皆で稽古試合をするもの面白そうじゃ！」
「あら、そういうのも面白いわね！」
「「これ一応婚前旅行だぞ」」
「そういえば、聞いてなかったけど貴方達の妻達って誰なの？」
「言ってもわからないとは思いますが、姓名は劉備、字は玄徳ですね」
「ごめんなさい。やっぱりわからないわ。一応蓮亀のほうも聞いてもいいかしら？」
「ふむ、姉の姓名が孫策、字は伯符じゃ。妹の姓名は孫権、字は仲謀じゃよ」
「あっ！そっちは妹のほうの蓮華を知っているわ！」
「「マジで！」」
「なんで知っているんだ？」
「塾が一緒で話しが合って仲良くなったのよ！」
「その話しってまさかだよな？」
「多分華鳳考えている通りよ。自分達の夫の話しがなんか話していて共感できたのよ」
「そりゃあまあ、ある意味同一人物だから共感もできるとは思うけどな、疑問に思わなかったのか？」

「あの時は、流石にこんな感じに別れているなんてわからなかったから似たような人がいるのかなって思ってたのよ。そのうえにあの時はまだ悲しいにくれてたから慰め合ってもいたのよ」
「本当に蓮華達には悪いことをしたのう」
「華琳も待たせてしまって本当に悪かった」
「もういいわよ。だって貴方はしっかり私の元に帰って来てくれたんだもの」
「待ててくれてありがとう、華琳」
「ここは接吻の1つでもしてくれてもいいのよ？」
「こいつらの目の前でやるのはちょっと・・な？」
「本当に貴方らしいわね！あ！」
「どうかしたのか？」
「蓮亀には言いづらいのだけどいいかしら？」
「なんじゃ？」
「私、蓮華と話していて蓮華が私に姉様とも話しが合いそうねって苦笑してたのよね」
「「おいおいおいそれって」」
「嘘じゃろー！」
　どうやら孫策は華琳と同類になっていたようだ。

「お前も俺と同じ感情を抱くことになりそうだな。とりあえず気を強く持つんだ！」
「こんな慰めは欲しくなかったのじゃ」
「僕のほうも本当に心配になってきたのですが、桃香は大丈夫でしょうか？」
「貴方達は本人が目の前にいるのによくそんなにいろいろ言えるわね！」
「わしも雪蓮に逢うのが怖くなってきたのじゃがしょうがないのう。あ！折角だし雪蓮達も驚かしのじゃ！」
「え！私にやったことのようなことをするの？」
「そうだな、だがあちらは会ったら模擬試合だろうからそれで驚かしてみてはどうだ？蓮亀」
「そうじゃな！どれだけ成長したかも見たいしそれで良かろう」
「では、僕の時はクイズで驚かしてみますかね？」
「貴方達はこういうときは生き生きしているのね」
「よし、じゃあ合流したときのことも考えたし行こうか！」
「「おう（ええ）！」」
　そして、俺達は孫策と孫権がいるであろう徐州の下⊠国に向かった。
～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十四話

～刹那達ｓｉｄｅ～

「フゴォォォッッ」

「今日のばんめしいぃぃぃ!!」

今、俺こと華鳳は猪と死闘を繰り広げていた。普通の猪ならもう仕留めているのだが、なんかこの猪めちゃくちゃ硬かった。

「かかってこいやぁぁぁ!」

「プギィィィッ!」

挑発したらかかってきたので何気に勇ましい猪だった。しかし

「まだまだ甘いぜぇぇぇ!どりゃあぁぁ!」

「プギィ、フゴッフゴッ、ピギィィ」

数回にわけて猪と取っ組み合いをしては投げ飛ばすということをしていたら、打ち所が悪かったのか猪は力尽きてしまった。

「よし!これで気に入った晩飯は確保だな!」

俺が猪と格闘をしていた同時刻に桃鶴も熊と死闘をしていた。

「グガアアアア！」
「この熊はでかいですね！これは技のかけがいがありますよ！」
何故か桃鶴は熊相手に柔道技をかけていた。
「うおりゃあぁぁぁ！」
「ガアアアッッ」
「一本！」
そして、桃鶴は熊に背負い投げをしていて、その横で蓮亀は判定をしていた。
「なかなかよい戦いじゃったぞ！」
「これで明日の朝飯までは持ちますね！」
今現在、俺達は森に入り食料を調達をしていた。まあ、猪と熊て戦ってただけなんだけどな！
そして、解体できるところは全て解体した。前回は解体しても入れる袋がなかったが今回は用意したので無駄なく回収できる。
「貴方達を見てると本当に非常識っぷりがわかるわね！」
俺達はこれから晩飯だが華琳はもう晩飯はすませていた。と言っても俺達も食べたが、食べ足りないので食料を調達をしにきていた。
だが話しをしていて次いでに明日の朝飯も調達することにしたため熊まで倒してし

まった。
「と言ってももう見慣れた光景だろ！」
　そう旅立ってからもう数日間は経っていた。だからもう見慣れた光景であるはずなのだが。
「素手でやりあっている光景なんて何回見たって見慣れないわよ！そのうえに戦うたんびに戦い方違うし！」
　そう、俺達は鍛練も込めて食料調達はいつも素手で行っていた。それが一般人からしたら異常に見えたらしい。まあ、俺達は自分達でも普通とは思っていないのでそんなものかですませてしまっているが。
「とりあえず戦ったらさらに腹もへったし、飯の用意をしようや！」
　この日の晩飯は猪の丸焼きと一昨日取った熊の燻製を食べた。今日取った熊も燻製にするつもりだ。
「もういいわよ。ところで、あとどれくらいで着くのかしら？」
「そうじゃのう、あそこに見える山は見覚えがあるからあとかかっても2日といったところじゃろな」
「思っていたよりペースが早いですね！心の準備はできてますか？蓮亀」
「できとるわけないじゃろ！」

「武人の性格の筈なのに情けないですね！」
「おま、お前武人とか関係ないからな！そろそろお主もわしなのだから知っておるじゃろ！わしがそういうことには経験がなくて苦手なことを！」
「ええ、知っていて言っているんですよ！とても楽しいですね！ええ」
「お主、わしをからかうのも大概にしろおぉぉ！」
　めちゃくちゃ桃鶴が蓮亀をからかって遊んでいた。たまにあいつドＳになるからな。
「貴方達、遊んでないで今日はもう寝ましょう！明日も早いのだから！」
「「お休みなさい」」
「お休みなさい」
　今日も１日華琳と無事過ごすことができたな。そろそろ孫策達とも合流するし、合流したらより早く移動して劉備とも合流しなくちゃな。
　俺はこんなことを考えながら寝てしまった。
　～翌日～
「おい、なんで華琳が俺が寝ている寝具に入ってるんだよ！」
「あら？夫婦でもスキンシップも大事だと思うのだけれども。貴方は違うのかしら？」
「いやそりゃあ、大切だとは思うけど桃鶴と蓮亀もいるし」
「その２人が気を使わせてくれたのよ。だからここ最近は甘えてないんだから甘えさせ

なさいよ！」
「そうか、あいつらにも悪いことをしたな。でもそういうことなら存分にいいぞ！」
「やった♪久しぶりに逢った時は甘えたけどそれから甘えてないんだもんその分もお願いね♪」
「わかったわかった、ほらこい」
ここからは割愛させてもらうがかなり溜まっていたらしく、いろいろ激しかったです。（でもまだ致してはいません）
時間を忘れ途中で桃鶴達がもう行こうと乱入してくるほど長い時間いちゃついていました。
「そろそろあの山を越えていけそうだけど今日はここで野宿でもいいか？」
「かまわんが、明日のどのへんで着くかのう？」
「ここの場所から考えて早く着いたとしてもお昼頃ではないでしょうか？」
「まあ、それぐらいならここでいいじゃろうな」
「今日も晩ご飯を取りに行くのかしら？」
「いや、できればこの場所では狩りはしたくないから今ある物ですませよう」
「別にわしに気を使わなくても良いのじゃよ？」
「それだけではありませんよ」

「そうだ。流石に今ある物は着く前に消費しとかないと消費する機会がないかもしれないからな。だからこの場で消費してしまおうと思ったのさ」
「なるほどの。そういうことならわかったのじゃ！」
　そしてできるだけ俺達は消費できる物は消費した。また、明日には確実に着かなければいけなくもなった。
　こうして、俺達は明日に備えてやることをやったらとっとと寝た。
　そして次の日、蓮亀の足取りだけは重かったが無事に徐州の下⊠国に着くことができた。
　そして門にいるだけで伝令で伝わってしまうことを知っていたので前もって被り物をしていた。今回は虎の頭らしい。そのせいで周りからの目線が痛かった。
「とりあえず、とっとと孫策達がいるであろう屋敷に行こう」
「そうですね。周りからの目線も痛いですし、できればとっとと脱ぎたいですからね」
「早く行きたいのに着きたくないという矛盾に今わしは襲われているのじゃ」
「ほらさっさと行くわよ！一緒に私まで変な目線で見られるんだから！たまったもんじゃないわ！」
　そして、俺達は街を歩き屋敷が目の前まで見えてくるところまできた。
「作戦は久しぶりに華琳が孫権に会いに行くってことでいいんだよな？」

「ええ、そうよ。そして、その護衛に貴方達が一緒にいるという設定よ。絶対に孫家からも私が変な目で見られることになるんだわ！」
「ですが、蓮亀が逢ってしまえば事情は話すのでその時に誤解を解けば大丈夫な筈です」
「それで大丈夫じゃなかったらどうするつもりなのよ？」
「その時は俺が全てそういう評判を被るから安心して華琳は実行してくれ！」
「本当に華鳳ったら我儘だけどしっかりそれのフォローはしてくれる優しさは持ってるから手におえないわね！」
そう文句を言っている華琳だがその顔はとても笑顔で素敵だった。
そして、俺達は屋敷の門の前に着いたのだった。
～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十五話

～刹那達ｓｉｄｅ～

さて、門の前に着いたわけだがここから先はほぼ俺達はしゃべらずに行き、華琳がほぼ受け答えをすることになっている。

「それじゃあ行くわよ！準備はいいわね？」

「「……」」コク

「ここは孫家の家で合っているかしら？」

華琳が孫家の屋敷の門番２人に話しかけた。

「む、貴様は何者だ！後ろにふざけた被り物をしている３人もだ！」

「あら、私は曹家の者よ。孫権とは友達で、今日は遊びに来たの。だから孫権に曹操が遊びに来たと伝えてもらえないかしら？」

「これは失礼しました。伝えて来るのでここで少しお待ちください。孫権様に伝えて来るから見張っていてくれ（ボソッ）」

「わかっている。任せて行け」

「頼んだぞ」

そう言った門番の1人は伝えに行ったらしい。
「ところで後ろにいる3人は何者なんですか？」
「ああ、彼等は私の護衛よ。これでも私は曹家の次期当主なのでね。友達と会いに来るのにも護衛が必要だったり一苦労よ」
「そうですか。しかし、何故またそのような変わった被り物を彼等はしているのでしょうか？」
「彼等は、少し前にあった私のところの領地で賊との戦いがあった時に他人に顔を少し見せられない状態になってしまったのよ。だから被り物をしているのよ。でもこんな被り物をしてきたのは彼等のセンスの問題よ！」
「それはまた、いろいろと大変なのですね」
「まったく、その通りよ！」
こうして門番が孫権と共にまた戻ってくるまで俺達は華琳達からいろいろと言われていた。
◆◇◆◇
～その頃の孫家～
華琳達がこの街に着いた頃、孫家は日課である模擬試合を中庭でしていた。この時はちょうど、孫策と孫権が戦っていた。そして、それを孫家の重臣達が回りで見ていた。

「はあああぁぁ！」ガキンッ
「でりゃあぁぁ！」キンッ
　それを何度も繰り返し、なかなか決め手となる一撃を両者、共に与えることができていなかった。
「次で決まらなかったら休憩にしましょう」
「わかりました。全力の一撃でいきます！」
　そして、両者が己の武器を構えたところで
「失礼します！曹操と名乗る者が孫権様のご友人との事で遊びにいらっしゃいました！」
「は～。姉様、今回の模擬試合は一旦ここまでにしましょう。集中も切れてしまいましたし。ここでお茶会でもしましょう」
「それもそうね。それじゃあ他の皆はそれぞれの仕事をしてちょうだい！」
「「「はっ！」」」
「蓮華お姉様！シャオも一緒にお茶会したい！」
「小蓮！貴方は別に華琳とは関係ないでしょ！」
「あら、いいじゃない。私もお茶会に参加するつもりだしね」
「流石、雪蓮お姉様！」

「もう姉様も！まあ、いいわ。それでは私は華琳を呼んでくるので準備をお願いします」
「わかったわ」
「うん！準備をしておくわね蓮華お姉様！」
◆◇◆◇
そして、孫権と門番が戻ってきた。
「華琳、よく来たわね！いきなり来たんで驚いたわよ。ところで後ろにいる3人の変な被り物を被っている人達は護衛の人？」
「そうよ！まあ、あまり気にしなくていいわ！」
（蓮華も大きくなって美人になったのじゃな）
「そう、では案内するからついてきて。それと姉様と妹の小蓮もいるのだけどいいかしら？」
「ええ、構わないわ。逆に居てもらったほうがいいもの。私が遊びに来たと言ったけど重要な話しがあって来たのよ」
「重要な話し？何かしら？」
あれ？華琳はもうここで俺達の話しをするつもりなのか？変に煽りすぎないといんだけどな。
「できれば貴方のお姉さんがいるところで話したいのだけど。そうね、蓮華の昔の時の

話しで出ていた貴方達の婿さんの北条とか言ったかしら?・その人の話しよ!」
「え!?蓮亀の!華琳その話し全て話しなさい!」
「そんなに掴まないでよ!しっかり話すから、とりあえず離してちょうだい!それに何度も同じ話しはしたくないから貴方のお姉さんがいる場所で話したいと言ったのだけど」
「あっ、ごめんなさい!蓮亀の話しと聞いてしまって私ったら慌ててしまって」
「大丈夫よ。私ももし華鳳の話しと言われたら慌てると思うから、その気持ちはわかるわ」
　その話しを聞いて俺と蓮亀はとても申し訳なかった。
(桃香も待たせてしまって本当に申し訳ありません)
　桃鶴も遠くにいる桃香に謝っていた。
「わかったわ。その話しを早く聞きたいし、少し急ぎめで行きましょう」
　～数分後～
　俺達は中庭に着き、華琳と孫権、孫策、その妹は椅子に座りながら話しをし始めた。勿論俺達は華琳の護衛ということになっているので華琳の後ろで立っています。
　そして、孫権達の後ろにも護衛と思われる人達がいた。
「ふ～ん、貴方が蓮華の友達の曹操さんね。蓮華と仲良くしてくれてありがとうね。蓮

華の姉の姓名は孫策、字は伯符よ。よろしくね」
（雪蓮も本当に美しくなった。炎蓮殿に似てきたのう）
「シャオは雪蓮お姉様と蓮華お姉様の妹の姓名は孫尚香、字はないわ。よろしくお願いするわね」
（あの時はまだ赤ん坊じゃったが大きくなったのう。そういえば、炎蓮殿はおらんのかのう？）
「よろしくお願いします。私は姓名は曹操、字は孟徳、真名は華琳です」
「あら、真名まで教えてくれるなんて！なら私も教えるわ。真名は雪蓮よ」
「シャオも教えるわ。小蓮よ」
「小蓮にはあまり関係のない話しなのだけど、姉様には重要な話があるわ」
「蓮華からあるなんて何かしら？」
「華琳はどうやら蓮亀の情報の話しをするに来たみたいなの」
「なっ！それは本当なの！詳しく教えなさい！」
　反応が蓮華と似ていてやっぱり姉妹だと感じさせるものがあった。
「蓮亀？蓮華お姉様、それは誰なの？」
「小蓮は赤ん坊の時に会ったことのある人よ。あの時は御母様と模擬試合するときだったかしら。そして、その人は私と姉様の婿になるはずだった人よ。でもあの人は今は遠

くに行ってしまったのよ。だから私も姉様もあの人の帰りをずっと待っているのよ」
「あっ！シャオ、その人のこと何となくだけど覚えているわ！だって御母様に唯一勝った人だったもん」
「そう、小蓮でも覚えているのね。今日はその人の情報を話しくれるために華琳が来たのよ」
「とりあえず話してもいいかしら？」
「ええ、お願いするわ！」
「その人はどうやら私の婿である華鳳と同一人物だったのよ。もうびっくりよね！」
「はあ？」
「??何で雪蓮お姉様達の婿さんが華琳の婿さんと同じ人なの？」
「まあ、落ち着いて聞いて。どうやらこの世界に来たときに性格が分離しちゃってある意味新しい人格ができちゃったらしいのよ。だから貴方達の婿も前前世の人格だったでしょ？」
「なっ!?」
「何で貴方がその事を知っているのよ」
「そうよ！それはあの時いた人しか知らない情報の筈なのに何故華琳、貴方が知っているのよ」

「教えて欲しい？なら私の護衛と戦ってもらいたいのだけど」
「っ！いいでしょ！しかし、私達は何としても教えて欲しいのだから私と蓮華と戦ってもらうわよ！」
「え！雪蓮お姉様、シャオも戦いたいわ」
「これは、私と蓮華の話しなの。悪いけど今回は駄目よ！」
「んー！もう雪蓮お姉様のイジワル！」
　この時の小蓮は頬をリスのように膨らませていた。
「あら、私からしたら小蓮も参加するかと思ったのだけど。そうね、雪蓮と蓮華の２人だけにしてもらおうかしら。そちらの方が面白そうだしね。でもこちらは１人だけど舐めてる訳ではないから安心してちょうだい。私は元々教えるつもりなんだから、とっとこの茶番を終わらせたいしね」
「なら教えてくれればいいじゃない！」
「でもそれじゃあ面白くないでしょ？さあ、模擬試合を始めましょうか！」
　こうして、俺達は孫権と孫策と模擬試合をすることになった。
　しかし、孫権達は確実にこちらをやりにきてはいるのだが蓮亀は大丈夫なのだろうか？

～刹那達ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～